払田柵跡調査事務所年報　1976

払田柵跡

―第9・10次発掘調査概要―

秋田県教育委員会
払田柵跡調査事務所

序　　文

払田柵跡昭和51年度の発掘調査は，第９次，第10次の発掘調査が行なわれ，築地跡等の発見により，内郭線のおおよその姿と遺跡の性格を推測する手がかりが得られるなど，大きな成果を収めることが出来ました。

ここにその概要を刊行するにあたって，日頃ご指導ご配慮を賜わっている顧問の諸先生，文化庁の関係各位及び関係各機関に対し深甚なる感謝の意を申し述べます。

昭和52年3月31日

秋田県教育委員会
教育長　畠　山　芳　郎

目　　次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　既往の調査……2
Ⅲ　調査の計画……4
Ⅳ　第9次発掘調査……9
　1　調査経過……9
　2　発見遺構……11
　3　出土遺物……18
　4　考察……20
Ⅴ　第10次発掘調査……23
　1　調査経過……23
　2　発見遺構……25
　3　出土遺物……26
　4　小結……37
Ⅵ　成果と課題……38
Ⅶ　調査成果の普及と関連活動……40

例　　言

1　この年報は，調査の速報を編集方針とし，全所員が発掘調査と整理作業にあたった。調査概要の作成にあたり，次のとおり分担し，小松昭雄，千葉聖代が全面的に協力した。

第９次発掘調査　　畠山　憲司

第10次発掘調査

1，2，4　　船木　義勝

3　　小玉　　準

2　この年報と現地説明会資料の記述に相違がある場合は，本年報の記述を正確なものとする。

3　発掘調査および整理・概要作成にあたって顧問，文化庁，奈良国立文化財研究所，宮城県多賀城跡調査研究所，東北歴史資料館，秋田市秋田城跡発掘調査事務所，岩手県教育委員会，水沢市教育委員会，酒田市教育委員会，秋田県立博物館および下記の方々からご指導と助言をたまわったので，記して感謝の意を表したい。

仙北町　大山喜八郎，後藤哲雄，後藤安司，竹村省吾　**仙北町教育委員会**　後藤千代松，後藤定雄　**仙北町公民館**　後藤稜太郎，森本金龍　**作業員**　大河喜栄，茂木福太郎，原政雄，越後谷慎一，熊谷良治，後藤清治，森川源之助，山田善之助，杉沢毅，山田アイ　**東海大学生**，山崎文幸　**山形米沢短大学生**　茂木ふみ子　**能代農高教諭**　熊谷太郎　**土地所有者**　後藤清治，高梨正進会第六支部（代表　大野清栄）

4　石質鑑定にあたって，秋田県立博物館加藤万太郎学芸主事よりご教示をたまわった。

5　写真の現像・焼増しについては，（有）藤岡商店　藤岡久助，後藤良司の両氏に大変なご無理をお願いした。記して感謝したい。

6　土色の記載については，『標準土色帖』　農林省農林水産技術会議事務局　監修，を参考にした。

7　図版中，出土遺物は木簡を除き，土器は縮尺約２分の１，その他は３分の１である。

表　目　次

第１表　発掘調査計画表……4
第２表　発掘調査実績表……4
第３表　杯底部の器種別出現率……36
第４表　杯底部切り離し技法別出現率……36
第５表　土器総数に占める内黒土師器出現率……36
第６表　再調整のある土器数……36
第７表　遺構別杯底部出土数……37
第８表　砥石・紡錘車・瓦・下駄・木簡出土数……37

挿　図　目　次

第１図　払田柵跡発掘調査地域図　折込み……5
第２図　第９次発掘調査発見遺構図　折込み……7
第３図　ＳＦ75西壁断面図……10
第４図　ＳＦ75積手の長さ模式図……11
第５図　ＳＤ76・ＳＤ77西壁断面図……12
第６図　ＳＡ83・ＳＡ82Ａ・Ｂ・Ｃ実測図……13
第７図　ＳＢ80・ＳＡ78・ＳＡ84等実測図……15
第８図　ＳＡ84—３・ＳＡ85—３掘方断面図……16
第９図　ＳＡ78—２掘方断面図……16
第10図　ＳＢ87Ａ・Ｂ・Ｃ等実測図……17
第11図　ＳＢ87Ａ—１・87Ｂ—１掘方断面図……17
第12図　ＳＢ87Ｂ—２・87Ｃ—２掘方断面図……17
第13図　出土土器実測図……18
第14図　出土瓦実測図……19
第15図　ＳＦ75・ＳＤ77・ＳＡ83・ＳＡ82等実測図……21
第16図　第10次発掘調査発見遺構図……24
第17図　ＳＫ91実測図……25

第18図　ＳＫ97・98実測図……26
第19図　第Ⅱ層出土土器実測図……28
第20図　第Ⅱ′層出土土器実測図……30
第21図　第Ⅲ層出土土器実測図……31
第22図　第Ⅳ層出土土器実測図……32
第23図　ＳＸ90出土土器実測図……33
第24図　ＳＫ91出土土器実測図……33
第25図　砥石・紡錘車・瓦・下駄実測図……34

図　版　目　次

図版１　払田柵跡航空写真
図版２　(1)発掘地点の航空写真　(2)発掘地点の遠景
図版３　(1)第９次発掘調査全景　(2)同
図版４　ＳＦ75築地
図版５　(1)築地版築状況　(2)同　(3)同
図版６　(1)ＳＦ75積手の違い　断面　(2)同　平面
図版７　(1)ＳＤ76・ＳＤ77溝状遺構　(2)同
図版８　(1)ＳＤ77・76溝状遺構断面　(2)ＳＤ77溝状遺構柱痕跡
図版９　ＳＡ83・ＳＡ82角材列
図版10　(1)ＳＡ82Ａ・Ｂ・Ｃ角材列　(2)ＳＡ83・82角材列
図版11　(1)ＳＡ82Ａ礎板状況　(2)同
図版12　(1)ＳＡ82Ａ礎板状況　(2)角材列横断面
図版13　(1)ＳＢ87Ａ・Ｂ・Ｃ　(2)ＳＢ87Ｂ－２・Ｃ－２　(3)ＳＢ87Ａ－２
図版14　(1)ＳＢ80・79，ＳＡ84・85　(2)同
図版15　(1)ＳＡ84－２，ＳＡ85－２掘り方断面　(2)ＳＦ75，ＳＡ83・82の接点
図版16　(1)ＳＦ75，ＳＡ83・82の接点　(2)同　ＳＤ77内南壁
図版17　第９次発掘調査出土土器，瓦
図版18　第10次発掘調査全景
図版19　(1)ＳＸ93・ＳＸ94遠景　(2)ＳＫ91・ＳＬ95遠景

図版20　(1)ＳＫ91土壙　(2)ＳＫ91土壙断面

図版21　(1)ＳＫ97・98土壙　(2)ＳＫ97・98

図版22　(1)花瓶出土状況　(2)平瓦出土状況

図版23　(1)第12号木簡出土状況　(2)ＳＫ98内第14号木簡出土状況

図版24　第10次発掘調査第Ⅱ層出土土器

図版25　第10次発掘調査第Ⅱ'層出土土器

図版26　第10次発掘調査第Ⅲ・Ⅳ層出土土器

図版27　第10次発掘調査第Ⅳ層・ＳＸ90出土土器

図版28　第10次発掘調査ＳＫ91出土土器・砥石・紡錘車

図版29　第10次発掘調査出土瓦・下駄・木簡

Ⅰ　は　じ　め　に

昭和49年，現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を開設して早くも3年の歳月が流れました。この間，諸々の問題をはらみながらも，基本的には開発計画・現状変更等に対応すると同時に，遺跡の性格把握を主眼として調査を進めてまいりました。

昭和51年度は第1次5か年計画の第3年次目にあたり，第9，10次発掘調査を実施し，その結果，堂々たる築地跡や多量の土器の検出等を見，払田柵跡における内郭線の在り方，土器の編年等について，多くの興味ある事実が判明しました。とくに，築地と角材列が連続し両者が併用されて内郭を画した時期があり，内郭北門同様に内郭線が造り替えられたことなどはこれまでになかった知見であります。

この年報は，これら発掘調査の成果の概要をまとめたものですが，これが学術研究上並びに遺跡保存の一助になれば幸いであります。

文末ではありますが，払田柵跡の発掘調査については，文化庁記念物課，奈良国立文化財研究所，顧問の秋田大学教授新野直吉，宮城県多賀城跡調査研究所長氏家和典の両先生のご指導を心から感謝申し上げるとともに，地元仙北町，同町教育委員会，千畑村および同村教育委員会，土地所有者，作業員の各位からは一方ならぬご協力とご援助を賜わりましたことに対して，厚くお礼申し上げます。

昭和52年3月31日

秋田県払田柵跡調査事務所長

高　橋　　司

Ⅱ 既往の調査

払田柵跡は，秋田県仙北郡仙北町大字払田・千畑村本堂城廻にある。遺跡は，雄物川の中流域に近い秋田県大曲市の東方約6㎞，横手盆地の北側，仙北平野のほぼ中央部に位置し，第3紀硬質泥岩の真山・長森の残丘を中心に，北側の烏川・矢島川・南側の丸子川に囲まれた沖積地にある。

明治39年頃から始まった耕地整理の際発見された埋木が，地元の後藤宙外氏・藤井東一氏の努力によって，歴史的遺産と理解され，遺跡解明の糸口が開かれたのである。昭和5年10月，文部省嘱託上田三平氏によって，東北古代城柵では最初の学術調査のメスが入れられ，短期間に，遺跡の輪郭を実証したことは，まさに驚異であった。この調査結果に基づき，昭和6年3月30日付国指定史跡となり，本格的な解明を将来に託したことは，今日においても記憶されてもよいだろう。

昭和48年度に入り，指定地を中心に「仙北地区新農村基盤総合整備パイロット事業」が実施されることになり，計画どおり実施されれば，遺跡は壊滅し，その痕跡さえとどめえないことは必至であった。このため，当教育委員会は，この重要な遺跡を保護するため基礎的な発掘調査を促進して，遺跡の実態を把握することとし，昭和49年度現地に地方機関を設け，本格的な発掘調査を開始した。調査を開始してから3年を経過し，第1次発掘調査の空白を埋めるように新しい事実が毎年公表されると同時に，管理団体仙北町当局および地域の人々の深い理解にあずかり，開発計画は中途再検討の段階となっている。しかしながら，まだ多くの問題と未調整の課題をかかえており，今後共，関係者の理解と協力を仰ぐと同時に，史跡保存のあり方が問われており，なお一層の努力が要求されている。

「払田柵跡発掘調査要項」の設置に基づき「第1次5か年計画」の基本計画が立案された。

1．大規模調査に対応する基準測量の実施

2．開発計画に対応しうる基礎調査の促進

　① 内，外郭線の位置と構造，変遷の概要把握

　② 内，外郭間の発掘調査の促進

　③ 管理計画策定資料の収集

3．現状変更届出に伴う緊急発掘調査の実施

4．史跡保存のための基礎資料の作成

上記の基本計画に沿って，昭和49年度～50年度間，第２次～８次発掘調査が実施された。調査の概要については次のとおりである。

１．昭和49年度は，基準測量調査として，指定地内にコンクリート柱35本を埋設し，「基準点成果簿」「基準点測量網」を作成した。昭和51年度においても，既設のつけかえのほか６本を新規埋設した。

２．内郭線の調査は，第２次発掘調査として内郭北門跡，第３次発掘調査として築地状遺構を確認した。内郭北門跡は，八脚門の掘立柱建物で，新旧２時期あり，角材列も再建されていることがわかった。従来，内郭線は，北側にしか存在しないとされていたが，長森丘陵東・南側において築地状遺構が発見されたことから，長森丘陵を取り囲むように内郭線があるだろうという見通しがえられた。

３．外郭線および外郭地区主要地域の調査は，第４～８次の発掘調査が行なわれた。このうち第４・８次は現状変更届出に対応した緊急調査であった。外郭線の調査は，第４次発掘調査として，北東部の一部を調査対象としたが，角材列を発見することができず，外郭線の位置について，新しく課題が提起された。第７次発掘調査は，外郭南門跡を発掘し，八脚門の掘立柱建物跡を再確認した。当地域の土壙（ＳＫ60）からは，「嘉祥二年正月十日」の年紀をもつ木簡が発掘され，出土土器とともに，絶対年代の決定ともいえる貴重な資料を発見したことは特記してよいだろう。

外郭地区主要地域の調査としては，第５次発掘調査として，真山西端部を行なったが，主要遺構の発見はなかった。第６次発掘調査は，外郭西門跡の東側を発掘し，竪穴住居跡を発見，一括遺物の出土とともに，今後の検討資料となっている。第８次発掘調査は，「仙北町民俗資料館」建設工事に伴う事前調査として実施したもので，主要遺構の発見はなかった。

以上第２次～第８次発掘調査の概要に根ざし，第１次５か年計画の基本計画に密着させながら本年度の事業計画が立案された。

Ⅱ 調 査 の 計 画

昭和51年度の発掘調査は「払田柵跡発掘調査要項」に基づく，第1次5ケ年計画の第3年次にあたる。さいわい発掘調査費については，秋田県の要求額どおりの国庫補助金の内示（総経費800万円のうち，国庫補助額400万円）を得たので，次のような「昭和51年度払田柵跡発掘調査計画（案）」を立案した。

第1表　発掘調査計画表

第9次	内郭線北東地区	920㎡	5月～8月
第10次	外郭主要地区 （外郭南門跡北側地域）	400㎡	9月～12月
合　計	2　地　区	1320㎡	

しかしながら，第9次発掘調査地区内での予想外の遺構の重なりや，そのための精査の手間どり等に加え，例年にない天候不順等により，調査の進行には当初の予想より大幅な遅延が生じた。

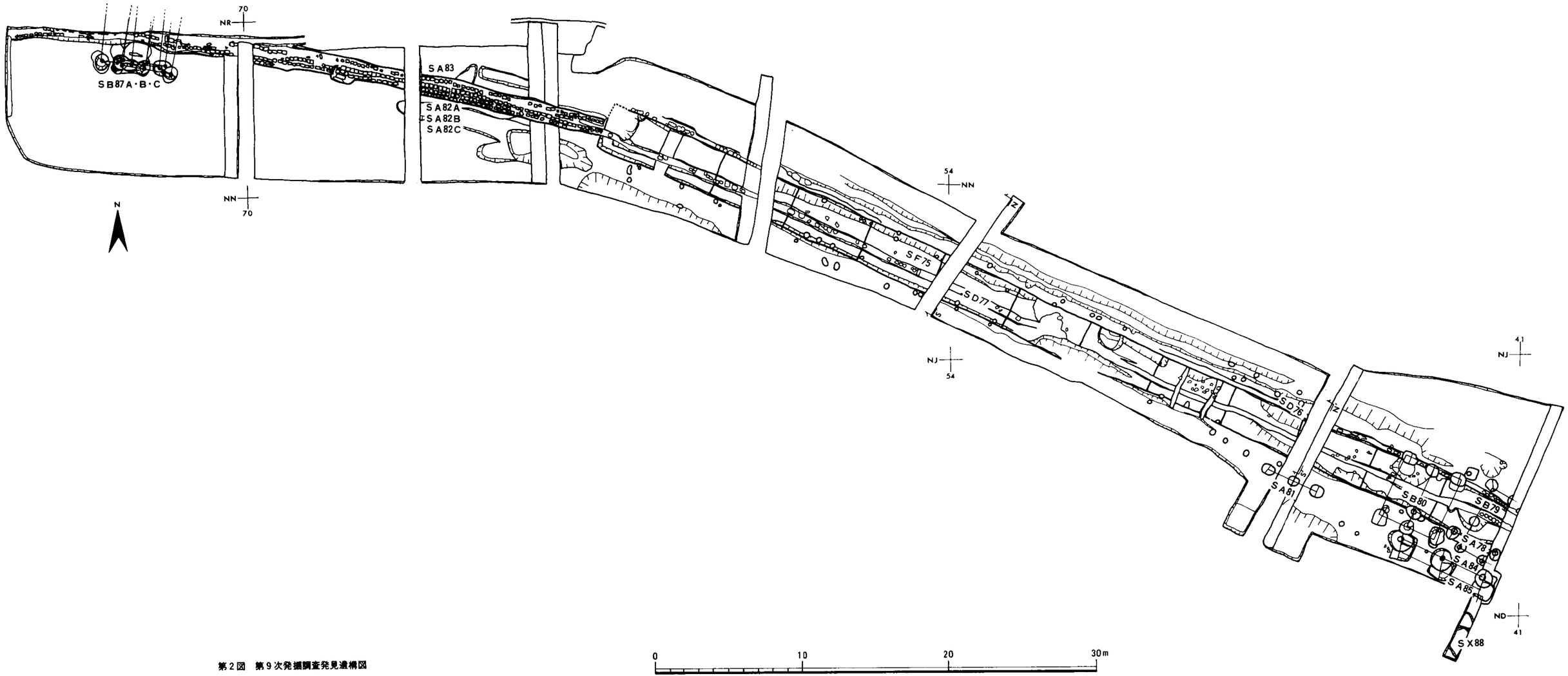
昭和51年度の発掘調査の実績は以下のとおりである。

第2表　発掘調査実績表

第9次	内郭線北東地区	1000㎡	5月10日～10月26日
第10次	外郭南門跡北側地域	400㎡	10月27日～12月11日
合　計	2　地　区	1400㎡	

なお，年間を通して出土遺物，資料等の整理をおこなった。

第1図　払田柵跡発掘調査地域図



第2図　第9次発掘調査発見遺構図

Ⅳ 第 9 次 発 掘 調 査

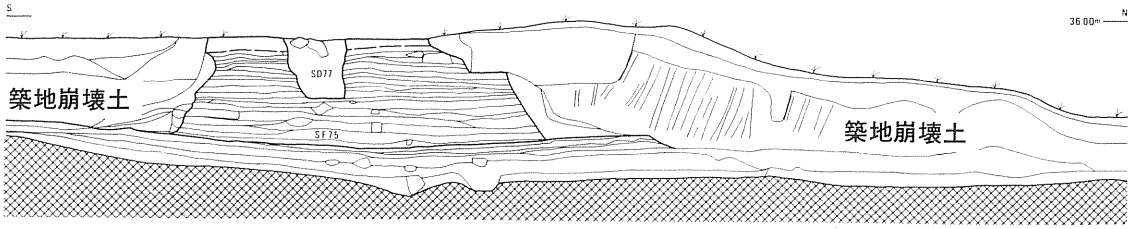
1 調査経過

第9次発掘調査は仙北町大字払田字長森23の1番地のうち，約920㎡を対象とした。当地域は払田柵跡の北東隅やや内側で，想定内郭線長森丘陵の北東端裾部にあたり，外郭東門へは直線にして約200ｍの地点である。本調査は，①昭和49年度第3次発掘調査で発見された築地状遺構の性格と構造を究明すること。②昭和5年の調査により推定された内郭線角材列の本調査区内での位置と，その構造を明らかにすること。③築地状遺構と角材列との関連を明らかにすること。などを目的として計画された。

昭和51年5月10日～19日まで，測量原点（*No.*17）から調査区に測量原点の移動，器材の搬入，表土の下払い，発掘区の設定等を行った。5月20日，調査区東端部の表土の除去を開始し，同日，合わせて，調査区東端で断面観察のための南北トレンチを入れた。それによると，第3次発掘調査検出の築地状遺構は基底幅2.7ｍ前後の築地であることがわかった。（これをＳＦ75築地跡とした。）また，築地のほぼ中央と北側端には，築地積土を切った溝状遺構の存在することが明らかになった。この観察結果をもとに同21日から西方に表土除去を開始した。表土はうすく，10～20㎝で築地本体，あるいは崩壊土にあたる。しかし，調査前まで当地域には樹齢40～50年の杉林があったため，その根が築地本体，その他の遺構に深く入りこんでおり，それらを掘り上げると遺構を破壊する恐れが生じた。このため根を遺構上面で一本一本切っていくことにしたが，積土に含まれた角礫等も多く作業は難渋を極めた。5月31日までに調査区東端より西に直線で約13ｍＳＦ75築地跡を検出し，同時に溝状遺構もＳＦ75のほぼ中央(ＳＤ77)と北側端（ＳＤ76）を走ることがわかった。また，ＳＦ75本体上面で，ＳＦ75軸線に対し直角に左右の土色が全く異なる箇所があり，積み手の違いであると推測された。6月2日にＳＦ75の断面観察のため幅1ｍのトレンチを入れた。その結果，ＳＦ75築地跡は基底幅約3ｍで，その中軸線中央と北側端にＳＤ77，ＳＤ76のあることが明確になった。6月14日までに調査区東端より約30ｍ西までＳＦ75築地跡の上面等を検出し，築地崩壊土を切るＳＡ78，ＳＢ79，80，81を検出した。ＳＦ75築地は約30ｍ直線で，その上面観察より5～6ｍくらいの間隔で積み手の違いが見られた。6月16日よりは，一時調査区の中間をとばし，調査区西端部に移動した。雑草等の下刈りをし，推定角材列線のボーリング探査を行ったところ，調査区西端より約

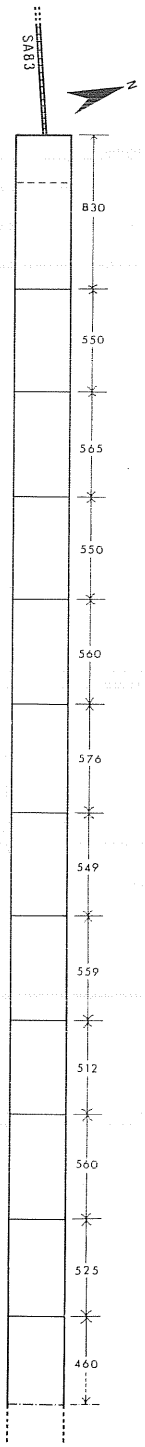
40m前後の地点で角材にはあたらなくなり，同地点が築地と角材列の接点部分と思われた。同17日より表土剝ぎを行い，接点部分ではＳＤ77溝状遺構の延長と思われる掘り方が表土の下に見え，ボーリング探査によって，その中に角材が存在することを確認した。同26日には，この接点より東側に断面観察のために幅１mのトレンチを入れ，築地，溝状遺構のあることを確かめ，ＳＤ77とＳＤ76にそれぞれ柱アタリと思われる跡を検出した。その後，残っていた築地部分の検出につとめ，７月13日まで全長約70mにわたるＳＦ75築地のおおよその姿を見た。なおこの間，７月５日，６日に第６回の顧問会議が開かれ，新野，氏家両顧問より適切な指示を得た。この後築地寄柱等の検出につとめたが，位置や規則性に乏しいものばかりで，明確にその姿を捉えることはできなかった。またＳＤ76，77等の掘り下げも行ったが，上面及びその途中では柱アタリ等はつかまえられず，結局は底面まで下げてみなければわからなかった。これらの作業と並行して調査区西部において，角材列の部分的な精査を行ったが，掘り方の見えるレベルでは角材のアタリを捉えることができなかった。角材列の掘り方は二条あり，北側の掘り方は南側の掘り方により切られていた。南側をＳＡ82，北側をＳＡ83とした。７月30日より本格的に角材列の検出につとめ，８月９日までに完掘したところ，ＳＡ83はＳＡ82よりも古く，ＳＡ82は部分的に三列になることがわかった。この間，西端部においてＳＢ87の掘り方を確認した。その後，調査区全域にわたり残された作業を行い，ＳＢ80はＳＤ77をまたぐ東西棟二間一間の掘立柱建物跡であること，ＳＤ76は部分的になくなるが，その西端部では柱アタリが存在すること等を確認した。８月12，13日には，築地と角材列の接点部分を掘り下げ，ＳＦ75はそれ以上西にはのびず，ＳＡ83はＳＦ75の中軸線に一致すること，ＳＡ82Ａ・ＢはＳＤ77に連続すること等を確認した。その後，写真撮影のため全域の清掃を行い，８月17・18日の両日写真撮影を行った。その後，８月24，25日の第７回顧問会議により，細部にわたる指示を得た。同28日には，現地説明会を行い，30,31日の両日，東北古代城柵官衙遺跡発掘担当者会議を現地で行った。

９月２日より実測遣り方を設定し，９月６日から実測を開始した。しかしこれと並行し，土層断面，溝状遺構の掘り下げ等の精査や補足調査などを調査区全体にわたって行ったため，調



第３図　ＳＦ75西壁断面図

査期間が予想以上に延長されることとなった。埋め戻しに入ったのは10月22日で器材の運搬等も含め，調査が全て終了したのは10月27日であった。



第４図
ＳＦ75 積み手の長さ
模式図（単位 cm）

2 発 見 遺 構

本調査で検出した遺構は築地跡１，溝状遺構２，角材列４，掘立柱建物跡５，柱列跡４，その他である。（第２図）

築地　（第３，４図，図版４，５，６の１）

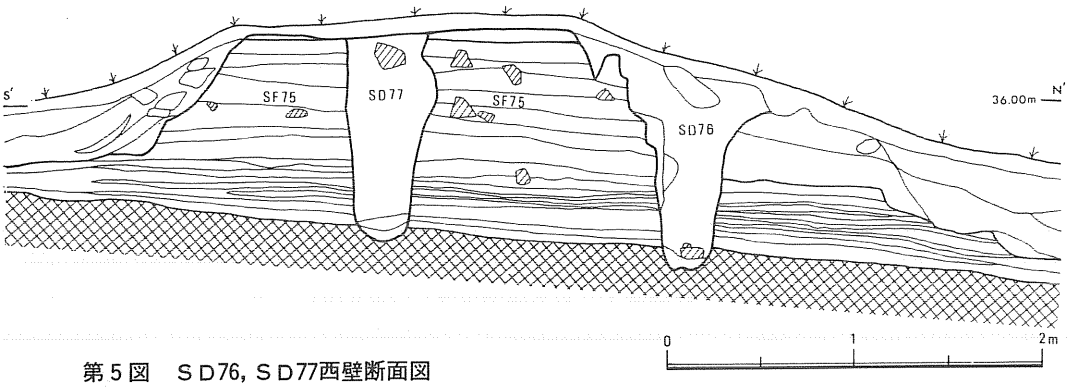
ＳＦ75　調査区東端より西北西に約68ｍほど直線で発見された築地跡である。一部ゴミ捨て場や道路面に利用されているが，その遺存状態は良好であった。築地構築方法は，まず（黄褐色地山土の上の）黒色土を幅10～13ｍにわたり地ならしをし，その中央に幅６～７ｍ，厚さ0.2～0.3ｍの版築による盛土整地層を造る基礎地業を行い，その上のほぼ中央に基底幅約３ｍ（約10尺）の築地本体を築くものである。本体積土は黄色粘土，暗褐色粘土，黒色土等を丹念に互層に版築したものである。積土中にはこぶし大から½頭大の角礫をかなり意識的に使用している。

築地本体全長にわたり，積土の土色の違いが帯状に観察され，築地軸線に対し縦方向の積手の違いがわかる。その１つの単位は5.6ｍ前後のものが多く第４図のごとくである（単位cm）。なお，積手の違いは高さにおいても見られ，２か所の断面観察によれば，盛土整地層上面より0.7～0.8ｍの高さで仕事の工程を違えている。（第３・５図）

築地本体両側端部に寄柱と思われる柱穴が検出されているが，間隔が不規則であり，部分的にしか存在しない。寄柱については不明である。また，築地本体両外側約0.4～0.7ｍに築地に並行して並ぶ浅い柱列跡が部分的にある。径30～40cmの円または楕円形がほとんどで，間隔にばらつきがあるが，約2.2～3.0ｍである。盛土整地層上面より掘り込んでいるので，本体を築成する際の工事用足場穴かと思われる。

調査区東端部，築地本体より４～５ｍ南に土取り穴と思われる掘り込みがあった（ＳＸ88）。後述するＳＡ85柱掘方はこの土取り穴を埋めた後に掘り込んだものである。

溝状遺構



第５図　ＳＤ76，ＳＤ77西壁断面図

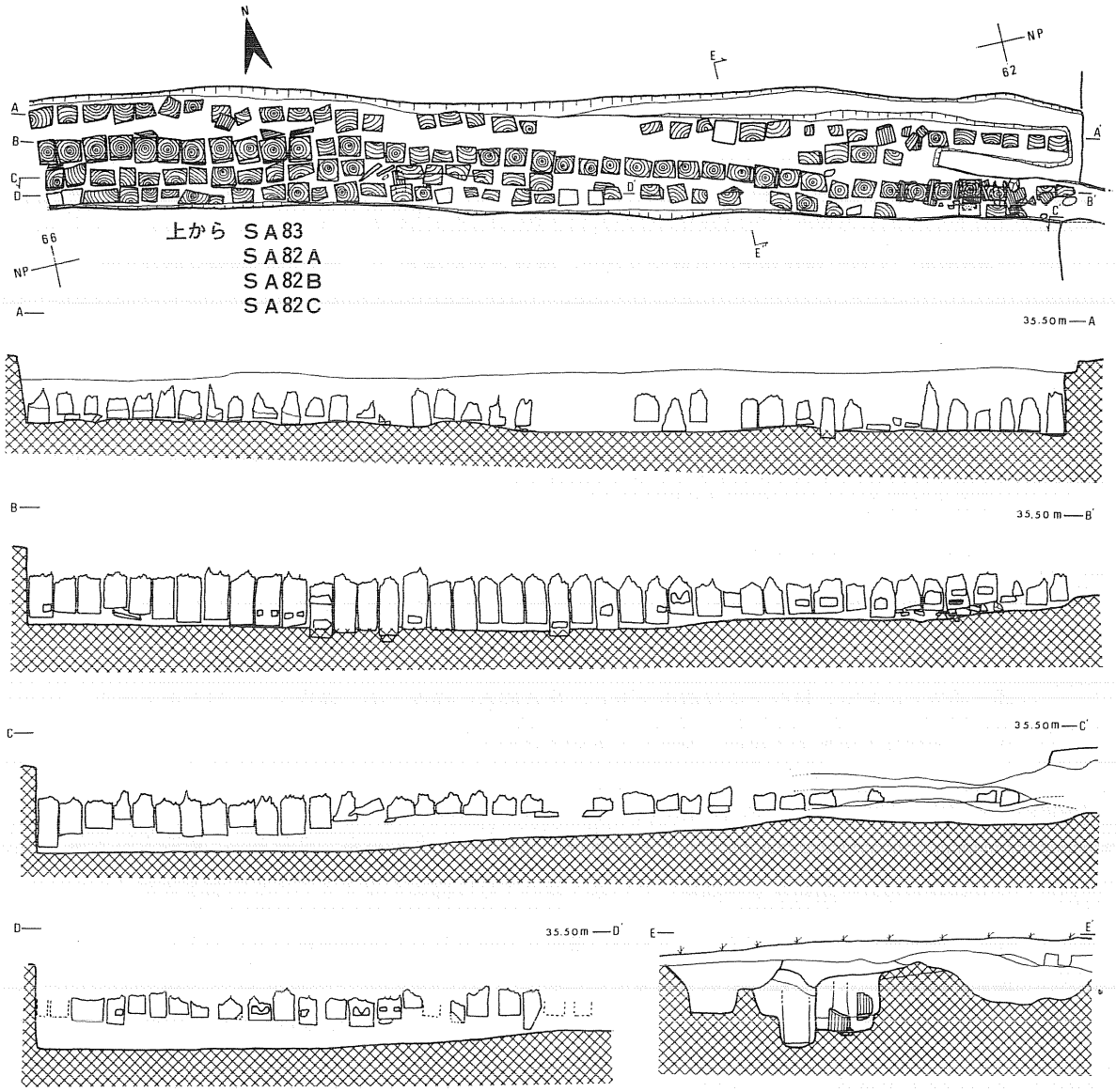
ＳＦ75本体中央と北（外）側端にＳＦ75中軸線と並行する二条の溝状遺構がある。

SD77　ＳＦ75本体積土を切り，幅約0.5ｍ，深さ約0.3～1.1ｍ，断面深いＵ字形を呈する溝状遺構で，ＳＦ75本体のほぼ中央を東西に走り，築地西端部ではそのまま，後述する角材列ＳＡ82Ｂ・Ｃの掘り方に連続するものである。（第15図，図版15の２，16）。掘方底面は丸い鍋底状を呈するが，粘質でしまりのある黄褐色土と黒色土の混土が上面を平らにして堆積している。埋土は築地崩壊土に似た褐色の細かい土であるが，中に築地積土にも用いている角礫を含んでいる。また，掘方底面で柱アタリに似た土色の違い，あるいは硬さの違いが見られる所があり，角材ないし丸太材が立っていた可能性がある。埋土中より，赤褐色を呈し，底部回転糸切り離しで再調整のない土師器の破片が多数出土している。

SD76　部分的にとぎれるが，ＳＦ75本体外（北）側端を一部切るようにして掘り込まれた溝状遺構で，築地崩壊土を切っている。幅約0.4ｍ，深さ0.4ｍ～0.8ｍ，断面深いＵ字形をなすが，底面にはＳＤ77と同様の埋土があり平らでかたい。部分的に柱アタリに似た土色の違いがある。角材か丸太材が入っていたものと考えられる。埋土はやわらかい赤褐色土であるが，西に行くほど硬くなる。ＳＤ76がどのような性格の遺構であるかは不明である。

角材列　（第６図，図版９，10，11，12の１）

ＳＦ75築地西端より西北西，内郭北門方向に連なる角材列は部分的に３～４列あり，今次は全長約42ｍ検出した。角材列は大きく二時期に分けられ，北からＳＡ83，ＳＡ82Ａ，ＳＡ82Ｂ，ＳＡ82Ｃとする。角材はいずれも長方形，方形で，手斧でていねいに面取りし，筏穴のあるものが大部分である。（筏穴の有無についてはほんの一部しか調べていない。調べたかぎりでは大部分あった）。角材の材質はＳＡ82Ｃを除き全て杉である。ＳＡ82Ｃは杉材の他に一部広葉樹が使われている。これらの角材列は直線的ではなく，南側にわずかづつ屈折する。



第6図　SA83, SA82A・B・C実測図

SA83　古い角材列で，新しい角材列（SA82）の掘方によって切られており不明な点も多いが，幅約0.5m～0.8m，深さ0.7～0.9mの布掘りの中に角材を立て並べたものである。角材は抜き取られたりして一部を欠くが，一辺27cm×23cm前後のものが多く，主に長辺を軸線（東

西）に合わせている。角材と角材の間隔は１～２㎝ないし数㎝である。角材は掘方底面まで入っているものが多く，現長30～60㎝あり，その下には部分的に小さな礎板が敷かれている。

SA82A・B・C　ＳＡ83の掘方南側を切って，ＳＡ83の南（内）側に造られた角材列である。幅0.8～0.9ｍ，深さ0.8～1.0ｍの布掘りの中に２～３列（ＳＡ82CはＳＦ75築地と角材列の接点より西に5.7ｍ～14.2ｍの範囲8.5ｍしか存在しない）の角材がほとんどすき間なく立ち並んでいる。これが時期をかえた仕業か同時かは明確にとらえ得なかった。

SA82A　４列の角材列中，角材の大きさ，埋設された深さ，材と材との間隔等において最もていねいな仕事のものである。角材は一辺27㎝×27㎝前後のものと22㎝×23㎝前後のものが多く，材と材との間隔は0.5～３㎝とせまい。現存する材一本の長さは60㎝前後のものがほとんどであるが，中には80㎝近いものもある。材底面はほぼ平らでその下には軸線に対し横に小さな礎板が角礫とともに敷かれている。（図版11，12の１）。ＳＦ75築地との接点においては，ＳＤ77溝状遺構の中にこの角材列の東端部が検出された。

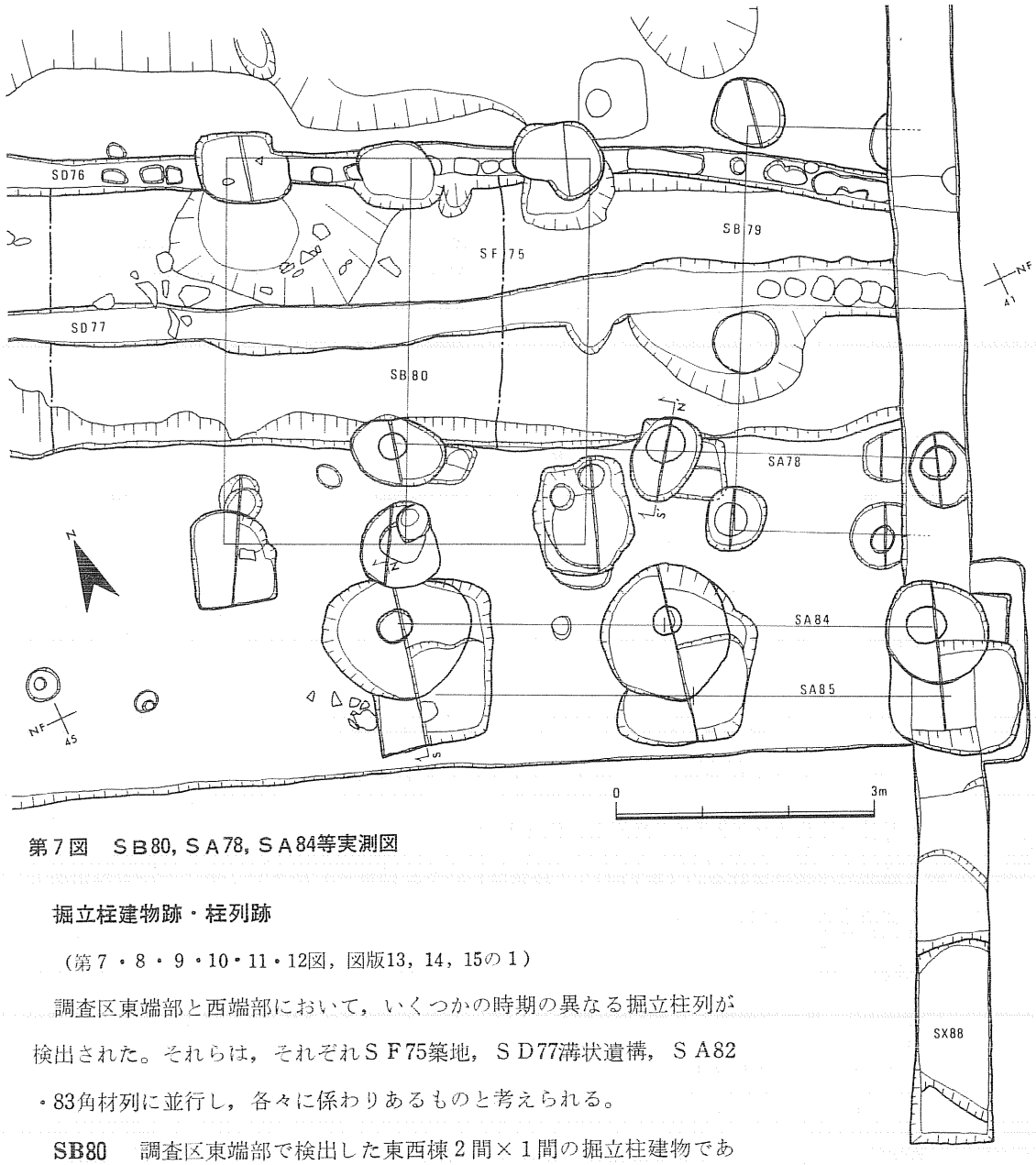
SA82B　ＳＡ82Aの南（内）側にある角材列で，ＳＦ75に近づくにつれＳＡ82Aに接近し，約５～６㎝の間隔しかなくなる。ＳＡ82Aと同様にＳＦ75との接点部分ではＳＤ77の中より検出された。遺存する材は東側ほど短かくなり，20㎝前後である。材底面は掘方底面より高く約25～30㎝上にある。材の下には礎板を有し，ＳＡ82Aの礎板と同じ礎板の上に材がある箇所もある。角材列の屈折する場所，角度もＳＡ82Aに似る。

SA82C　今調査区内では，わずかに約8.5ｍしか存在しない角材列で，４列のうち最も南（内）側にあり，掘方南壁に接している。角材には大小かなりのばらつきがあり，他の３列と異なり杉材の他に広葉樹をも一部用いている。材の下には礎板を有するものも一部あるが，その底面は掘方底面より30～40㎝も上にある。遺存する材は長さ約30㎝前後のものが多く，中には腐朽してアタリだけを残すものもある。

なお，角材には丸太一本加工，二つ割加工，四つ割加工があり，各角材列の各々の数量は以下のごとくである。

	調べた本数	一本加工	二つ割	四つ割
ＳＡ83	33　本	5　本 (15)	20本 (61)	8本 (24)
ＳＡ82A	41	34 (83)	7 (17)	
ＳＡ82B	30	5 (17)	19 (63)	6 (20)
ＳＡ82C	18	4 (22)	14 (78)	

（　）内は％を表わす。



第７図　ＳＢ80, ＳＡ78, ＳＡ84等実測図

掘立柱建物跡・柱列跡

（第７・８・９・10・11・12図，図版13，14，15の１）

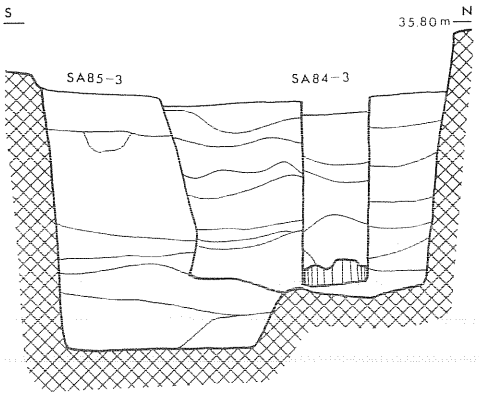
調査区東端部と西端部において，いくつかの時期の異なる掘立柱列が検出された。それらは，それぞれＳＦ75築地，ＳＤ77溝状遺構，ＳＡ82・83角材列に並行し，各々に係わりあるものと考えられる。

SB80　調査区東端部で検出した東西棟２間×１間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行4.5ｍ（15尺），梁行2.1ｍ＋2.1ｍ（７尺＋７尺）である。柱掘方はややふぞろいで，１ｍ×0.8ｍ前後のものが多く，深さは0.3～0.5ｍと浅い。柱アタリは検出できなかった。柱掘方はＳＦ75築地の崩壊土を切っており，ＳＤ76溝状遺構より新しく，ＳＤ77をまたぐ。

SB79　ＳＢ80の東側に検出された４本の柱列で，桁行１間（4.5ｍ）梁行１間（1.8ｍ）以上の掘立柱建物と考えられる。掘方は築地崩壊土を切っており浅く，２つの柱アタリは径約

30cmである。

SA84　ＳＦ75本体南側端より約2m離れ，築地中軸線に並行して東西に3本（3.1m＋3.1m）並ぶ柱列である。柱掘方は築地崩壊土除去後に検出され，径1.2m～1.5mの略円形，深さ1.25m前後で，掘方やや北寄り底にわずかに柱根を残す柱アタリがある。柱の太さは径約30cmである。（第8図，図版15の1）。埋土はしまりのある褐色，黄色，黒色土の混土で，掘方下方より小さな木屑等に混じり木簡の破片が出土した。柱掘方がＳＡ85掘方を切っており，ＳＡ85柱列があまり時間を経ずに建て替えられたものと考えられる。北側にこれに対応する柱穴はなく，南側にも6m以内には存在しない。



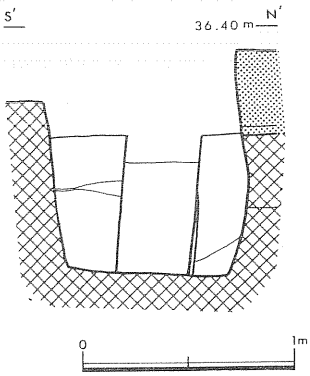
第8図
ＳＡ84−3，ＳＡ85−3
掘方断面図

SA85　ＳＡ84掘方により北側½ほど切られているが，ＳＡ84と同様の柱列跡で柱間は約3m等間と考えられる。柱掘方は一辺約1.3m×1.4mの略方形で深さは1m～1.3mほどである。柱アタリはない。埋土はかなりしまっており，下部に木片等を含む。

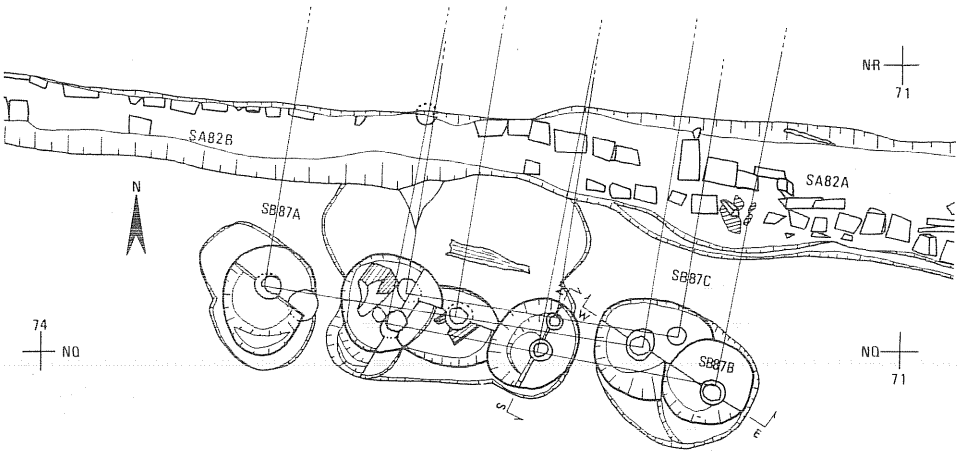
SA78　ＳＦ75本体南側端を一部切って掘られた3本の柱列である。柱掘方は築地崩壊土を切っており径約1m×0.7mの楕円形，深さ0.8mである。掘方やや北寄りに明確な柱アタリが残り径30cm～40cmを計る。（第9図）。柱間は心心で3.15m＋3.15mで，東にのびる可能性もあるが調査範囲内で南北には対応する柱はなかった。

SA81　調査区東端より約13m西，ＳＦ75南（内）側にある3本の柱列である。築地の軸線に並行し，築地南側端より約1.5m離れている。柱掘方は0.8m×0.9mの隅丸の長方形で浅い。柱アタリはなく，築地崩壊土を切っている。柱間は心心で，1.8m×1.8mである。

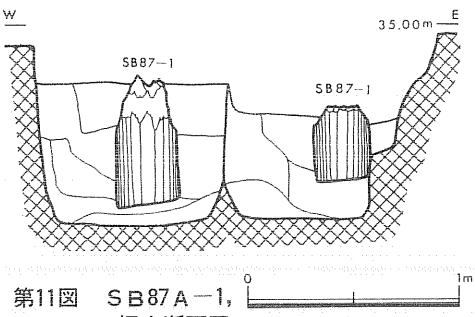
SB87A・B・C　調査区西端部で角材列より約1.5m～2m南側に検出された掘立柱建物跡である。ＳＡ82Ａ・Ｂに並行し，東西に3本づつ柱が並ぶ。（第10図，図版13の1）。角材列の反対（北）側は発掘できなかったが，ボーリング探査によれば柱根が存在するので，いずれも角材列をまたぐ東西棟2間1間の掘立柱建物と考えられる。柱掘方にはそれぞれ切り合いがあり，古い順



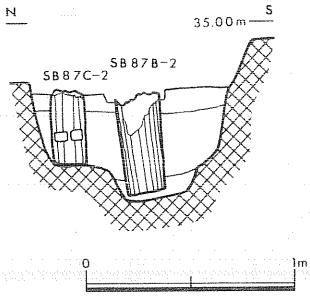
第9図　ＳＡ78−2 掘方断面図



第10図　ＳＢ87Ａ・Ｂ・Ｃ実測図



第11図　ＳＢ87Ａ−1，87Ｂ−1 掘方断面図



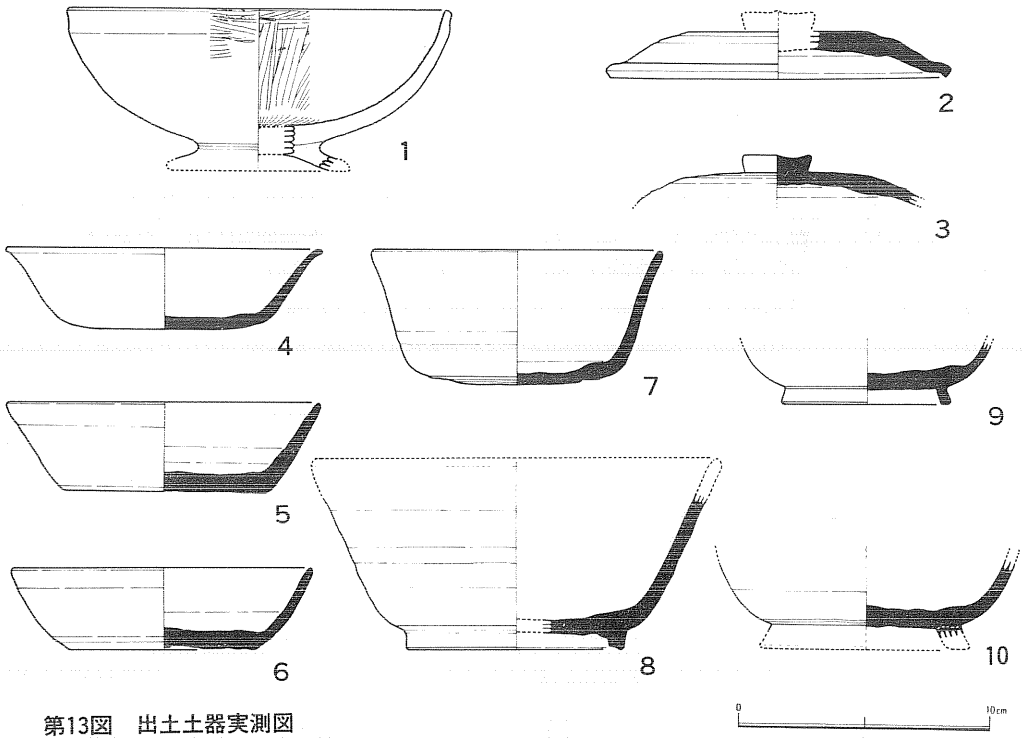
第12図　ＳＢ87Ｂ−2，87Ｃ−2 掘方断面図

にＡ・Ｂ・Ｃとする。ＢとＣの切り合い関係は捉え得なかったが，柱根の遺存状態から判断した。

SB87Aは約0.9ｍ×1.15ｍの略楕円形柱掘方のほぼ中央に約30cmの柱を立てるもので，柱根は手斧仕上げのきれいな面取りのある丸柱であった。（第11図，図版13の３）。梁行は心心で1.95ｍ＋1.95ｍ等間である。

SB87Bは一部ＳＢ87Ａ柱掘方を切っており，ＳＢ87Ａより新しい。径約１ｍ，深さ0.8ｍの柱掘方の中に径21～27cmの面取りのある丸柱の柱根が残っている。柱根の頭はやや北に傾いている。柱間は心心で東より1.75ｍ＋1.6ｍである。（第11，12図，図版13の２）

SB87Cは柱掘方を明確にとらえられなかった。柱根は15cm～20cmで面取りのある丸柱であった。柱間は1.3ｍ＋1.6ｍである。（第12図，図版13の２）



第13図　出土土器実測図

3　出　土　遺　物　（第13・14図，図版17）

本調査では，全般に遺物の出土量が少ない。土師器，須恵器，瓦の他は見るべきものがない。

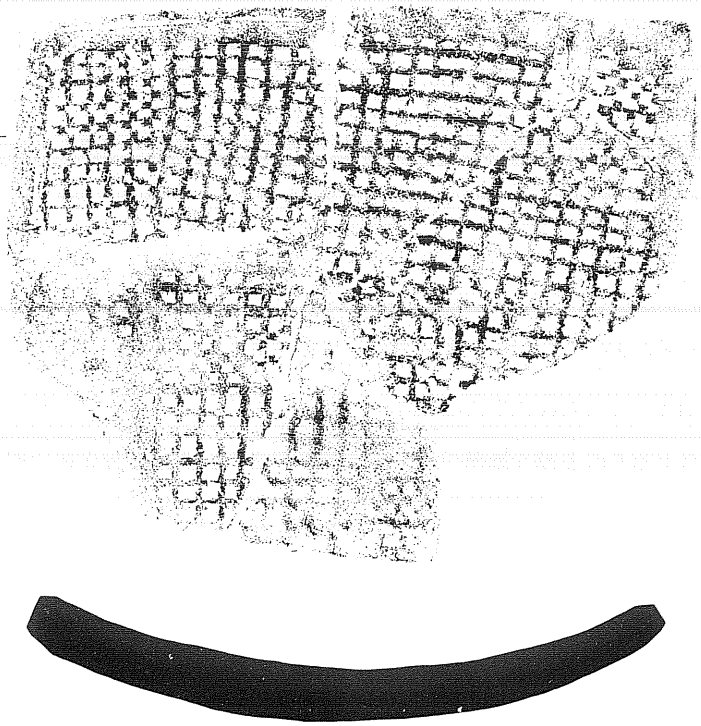
土師器　図示できるものは高台付杯１点である。他に内外面赤褐色で回転糸切底の再調整のないものが，小さな破片でＳＤ77やＳＡ82掘方内，ＳＢ87Ｂ・Ｃ掘方内などから出土している。第13図の１は内面と外面口縁部黒色の高台付杯である。全体の約$\frac{1}{6}$残存するのみであるが，口径15.2㎝，器高約6.5㎝を計る。内面はユビ等で横方向にナデたあと，口縁部を斜め，ないし横にヘラミガキし，最後に底面中央から放射状のヘラミガキを施している。外面には口縁部から体部中位まで横あるいは斜めのヘラミガキ痕がある。その下は摩滅が激しくミガキの有無等は不明である。口縁頂部には３～４条のヘラミガキ痕があり，やや平らな面となっている。底部には外に弱々しくふんばるような高台を有するが，ほぼ杯部を形造った後に付したと思われる。全体として土器内面は非常になめらかで凹凸はない。これに比し外面は不規則な浅い凹凸があり，ロクロ不使用のものと考えられる。（図版17の１）

須恵器　いずれも破片であるが図示できるものが蓋２，杯４，高台付杯１，壺底部２である。第13図２は，ＳＡ84―２掘方内出土のもので，天井外面に墨書があるが判読できない。外

面，体部と天井部の接点に右方向の回転ヘラケズリが施してある。全面青灰色を呈し焼成は良好である。3の天井外側全面に右回転ヘラケズリが施されている。4はＳＡ85—3掘方底部出土の杯で，底部は回転ヘラ切り離しである。底部から体部下半にかけては丸味をもって立ち上がる。再調整はない。全体の約⅙しか現存しない。（図版17—4）。5は築地崩壊土中より出土のもので，内外面ともに肌色がかった灰白色でやわらかく，ナマヤケの感じである。底部切離しは，右回転のヘラ切りである。再調整はない。6は体部約$\frac{1}{10}$しか残存しない。底部は左回転のヘラ切離しで，体部との境にヘラケズリ痕が1条ある。図示できなかったが，底部だけの破片でこの土器にかなり類似し，左回転ヘラ切離しのものが1点出土している。4～6ともに口径1に対する底径比は0.64前後である。7は深い杯で内外面のロクロ目は顕著でない。口径11.4㎝，器高5.4㎝，底径7.2㎝を計る。底部は回転のヘラ切り離しのあと倒立させ回転ヘラケズリを施し，そのあとナデを行なって，底部端に2条の沈線を描いている。沈線と沈線の間隔は6㎜で，本来この部分に高台を付すためのアタリであったと考えられる。8は体部約⅙の破片で，外面に顕著なロクロ目を残す。高台は付高台でほぼ垂直に立ち，高台内端部が上がる。底部切離しは不明だが回転のヘラ切りと思われる。7.8ともに内外面灰白色で焼成はやや良である。9，10は小形の壺と思われる。9はうすい青灰色で，細かい砂粒を多く含む。10は暗青灰色で焼成は非常に良く，かたい。10の底部切離しは右回転のヘラ切りで，ケズリは施していない。9，10ともに高台を付す際に，アタリをつけたようで（沈線），10は高台を付したあとそのまわりをヘラ状の工具で軽くおさえている。

瓦　（第14図，図版17—11）

調査区東端部，掘



第14図　出土瓦拓影図

立柱建物跡，柱列跡周辺より平瓦片が15点出土し，接合の結果2個体となった。

図示したものは幅27㎝，厚さ2.3㎝で，表面は正格子タタキ目，裏面には布目痕がある。表裏の側縁と側面は手持ちのヘラケズリを施し，それぞれのタタキ目，布目痕をケズリ消している。

4 考　　察

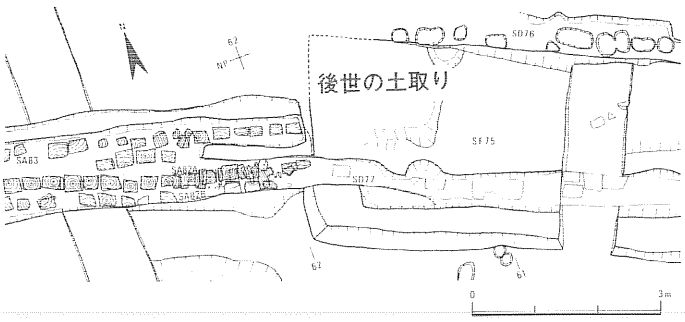
(1) 築地，溝状遺構，角材列，掘立柱建物，柱列について

昭和49年度第3次発掘調査において，長森丘陵東・南裾には築地状遺構の存在することが確認され，従来「内柵」と呼ばれていた内郭線角材列と，この築地状遺構の連・不連続が懸案となっていた。今回第9次発掘調査の結果では第3次発掘調査にいう築地状遺構（注1）は，本体基底幅約3㎜（約10尺）の堂々たる築地であることが判明し，角材列と直接に接し，連続することがわかった。

築地は一部にかなりの削平を受けていたが概して残りが良い。このためその構築方法が，部分的にではあるが観察できた。すなわち，まず黒色土を築地を造ろうとする軸線にそって，幅10～13㎜にわたり地ならしをし，その上に幅6～7㎜，厚さ約30㎝の版築による盛土整地層を築き，そのほぼ中央部に築地本体を築成するものである。この際注目されるのは，築地本体築成の場合の積手の違いである。検出した築地全長で積手の違いがあり，築地軸線に対して直角に長さ5.2㎜～5.6㎜，厚さ0.7㎜～0.8㎜積むことを1回の工程としていた。また，この1つの単位と単位の間には幅2～3㎝の土色の異ったやわらかい部分のあることもある。(図版6—1，2）。そして，築地の崩壊は地震にでもよるものでなかろうかと想起されるような箇所がいくつかあった。すなわち，築地崩壊土の中に積土がそのままの形で残っている部分があった。第3図に示した断面図中，築地北側崩壊土の中には，積土がちょうど90°だけ回転してころげ落ちたと思われる縦の版築がそのまま観察できた。この部分を仮に残っている本体の高さにそのままのせるとすると，築地本体の高さは最底3.3㎜以上を想定することができる。また，築地の前後からは調査区東端部を除き瓦の出土はなく，築地は瓦葺きではなかったものと考えられる。

築地崩壊後，残った本体の高まりを利用した溝状遺構が存在する（SD77）。その幅，深さ，前後の施設等との関連では，土塁，空堀的なものとはとうてい考えることは出来ない。その西端部では掘方の中に角材列が存在すること，他の部分では柱アタリに似た跡の見えることを合わせ考えるならば，この溝状遺構の中には，角材あるいは丸太材が立っていたものと思われる。

角材列は主に3列，部分的に4列検出され，新旧関係のあることがわかった。築地，溝状遺構との関連で見るならば，最も古い角材列ＳＡ83はその東端部においてＳＦ75築地西端部中軸線に接続し，両者は連続する。ＳＡ82ＡとＳＡ82Ｂとに新旧関係があるか否かは不明であるが，両者の東端部においては両者は溝状遺構，ＳＤ77西端部掘方の中より検出された。従って，角材列ＳＡ82Ａ・Ｂは溝状遺構ＳＤ77と連続する。（第15図）



第15図　ＳＦ75，ＳＤ77，ＳＡ83，ＳＡ82等実測図

また，上述した築地，溝状遺構，角材列にそれぞれ伴うものと考えられる掘立柱建物あるいは掘立柱列がある。それらの位置，構造，および規模等から推測すれば，これまで岩手県矢巾町徳丹城跡，宮城県多賀城跡，秋田市秋田城跡等（注２）で検出されている櫓跡あるいは，それに類似するものであると考えられる。しかし，それらの諸遺跡ではいずれも外郭線に取り付く施設であるが払田柵跡では，内郭線のそれである。（注３）

(2)　**内郭線について**

払田柵跡内・外郭線の角材列（いわゆる「柵列」）について上田三平氏は，昭和５年の国営調査（第１次発掘調査）結果にもとづき，角材が地上約10尺～12尺つき出ていたと想定した。（注４）しかしその後，東北の各遺跡で同様の遺構の検出例を増すにつれ，そのような角材列に対し最近は，上田氏とはやや違った見解が出されるようになってきている。（注５）

今回の第９次調査ではそれらを勘案して，発掘調査を進めた。結論からいうと，払田柵跡における内郭線は，基本的には築地を意図したものであろうと考えられる。しかるに，角材列および角材列と他の遺構とのあり方は，角材列が単に築地の基礎的な仕業等でしかないとは考えにくい点が多い。すなわち，角材が地上に確実につき出ていたという証拠は捉え得なかったが角材列の前後には掘立柱建物跡の他は，積土その他の遺構は検出されなかったし，後世にそれらが除去されたとは考え難い状況にあった。さらに，角材列の掘り方および角材の底面は当時の地表面より約0.8～１ｍほど下にあり，少なくとも地上３～４ｍの角材が十分に立ち得たものと推測される。また，古い角材列と築地とはお互いその中軸線で連続し，新しい角材列も崩壊した築地の上に掘られた溝状遺構に連続する。これら角材列のあり方，角材列と築地，溝状

遺構との関連，角材列や溝状遺構をまたぐ掘立柱建物跡，内郭北門への角材列の取り付き方，立地条件等を合わせ考えるに，角材列は地上に頭を出し立っていたものであり（注６），払田柵跡における内郭線は少くとも２期考えられることになる。

新旧の内郭線のあり方は以下のごとくである。

①古い内郭線　＝　長森丘陵の南・東・西裾には築地を築成し，低湿地（北＝現水田）には角材列を構築する。第９次発掘調査出土土器等からして９Ｃ前半に近いものと思われる。

②新しい内郭線　＝　古い内郭線とほとんど位置をかえずに造り替えられた。低湿地は古い時期と同様に角材列で，以前築地であったところは崩壊した築地の跡に溝を掘り角材（あるいは丸太材？）を立てる。

なお，このことにより想定される内郭線の大きさは，約東西770ｍ×南北320ｍの長楕円形となる。

また各遺構間の関連は以下のとおりである。

	築地	溝状遺構	角材列	掘立柱建物・柱列		内郭北門
旧	ＳＦ75 ＳＦ01 ＳＦ02		ＳＡ83 ＳＡ03	ＳＢ87Ａ	ＳＡ85 ＳＡ84	ＳＢ02
新		ＳＤ77	ＳＡ82Ａ・Ｂ ＳＡ01・02 ＳＡ82Ｃ	ＳＢ87Ｂ ＳＢ87Ｃ	ＳＢ80 ＳＢ79 ＳＡ78	ＳＢ01

注１　『払田柵跡調査事務所年報1974』秋田県払田柵跡調査事務所1975年。

注２　板橋源，佐々木博康，『陸奥国徳丹城』岩手県文化財調査報告第20集，1972年。『多賀城跡―昭和47年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所1973年。『秋田城跡―昭和50年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会1976年。

注３　注２の『多賀城跡―昭和47年度発掘調査概報』の中の内郭築地内側の3～4列の柱列に類似性を見る。

注４　上田三平，「払田柵跡」史蹟精査報告第３1938年。

注５　桑原滋郎：「東北地方における城柵の外郭線の構造―特にいわゆる柵木について―」研究紀要Ⅲ，宮城県多賀城跡調査研究所1976年。

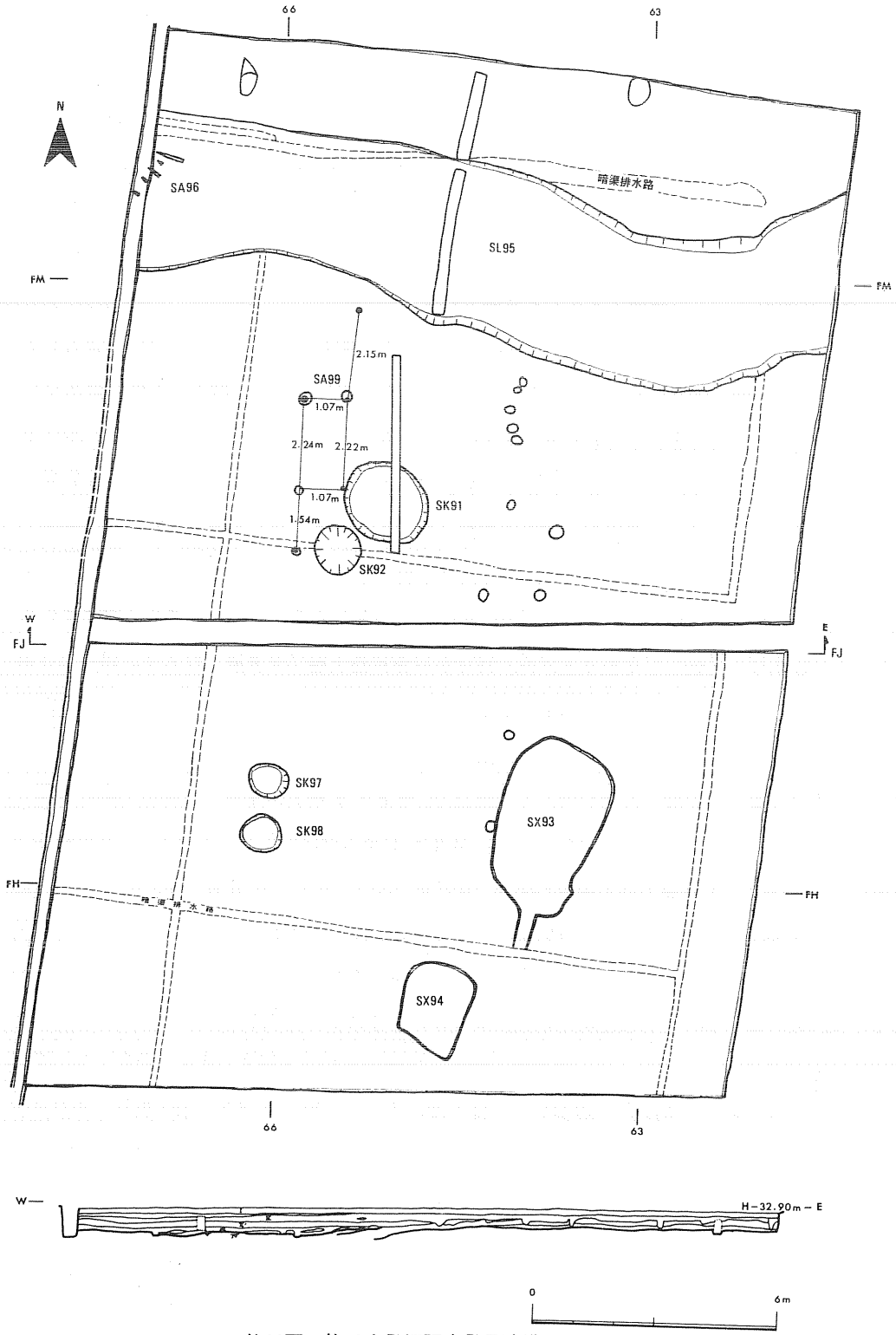
注６　注１に同じ。この中で角材列の地上における高さをそれほど高くないものと想定したが第９次調査結果からは本文のように想定される。

Ⅴ 第 10 次 発 掘 調 査

1 調査経過

第10次発掘調査は仙北町払田字仲谷地62—1番地内，調査面積400㎡（121坪）を発掘した。当地域は昨年度の第7次発掘調査で残された同地内北側の未調査地である。本調査は①外郭南門と内郭間の外郭内主要地域発掘調査の一環として，②木簡が発見された土壙（SK60）北側の遺構の有無等について確認することを目的とした。

今季は冷害と収穫期の長雨により，調査区の稲刈が3週間余も遅れ，早い冬将軍の到来が予想された。10月27，28日に基準点の移動，グリッドの設定をおこない，調査区西側に排水路を掘ることにした。11月4日からFFライン北側1mを残し，南から北へ表土（第Ⅰ層・耕作土）剥ぎを開始した。8日から黒褐色土層（第Ⅱ層），10日から黒色・黒褐色土層，（第Ⅱ′層）と急ピッチで作業を進め，FL65・66から下駄（半分）を発見し接合できた。11月12日初雪。SK91・92が確認され，SK91には炭化物と共に土器が多量に入っているのがわかった。FI66・67，FJ66・67付近からは土器，石器が集中しているため精査したが，遺構は確認できなかった。遺物はSX90として取り上げた。15日から黒褐色土層（第Ⅲ層）に入り，16日には第12号木簡，SX93・94を発見，昨年度の土壙（SK60・64）と同様な遺構，あるいは住居跡とも考えられた。調査区北側を東西に走る河道（SL95）があることがわかり，ナラ，ヤナギなどの古木や木葉などが埋もれていた。この時点で，第Ⅱ・Ⅱ′層と第Ⅲ層との間に土器の種類と出土量とに著しい差があることに気づいた。第Ⅱ・Ⅱ′層には，土師器が80～90%，須恵器10～20%であるのに，第Ⅲ層では土師器が65%，須恵器が35%である。第Ⅲ層の出土量は第Ⅱ・Ⅱ′層より70～80%も少なかった。11月24日から暗緑灰粘質土層（第Ⅳ層）を掘り始める。この第Ⅳ層中を10～20cm掘り始めると黒色炭化物（2～3cm）を敷いたようなところが，FK64・65，FL64・65・66の範囲だけに認められた。26日にはFJ65から石製紡錘車が出土した。第Ⅳ層出土土器は第Ⅲ層の2倍近くで，須恵器が50%，土師器が40%と両者の比率が逆転する。27日から天候不順が続き，調査区は泥沼化が一段と激しくなり，除雪と排水に明け暮れ，晴れ間を見て写真撮影をおこなった。12月3日から杭打ち，遣り方設定，翌4日から実測を開始した。12月9日から補足調査に入り，FH65・66・67，FI66・67付近の第Ⅳ層遺物包含層を掘り下げたところ，FI66から叩き渦巻文のある平瓦，FI67からは須恵器の花瓶が立ったまま発見され，周囲を精査したが掘方等の遺構はつかめなかった。翌10日は，降りしきる雪の中，SK97・98を検出し，SK97からは第14号木簡が出土した。今冬は降雪量が多く，これ以上発掘



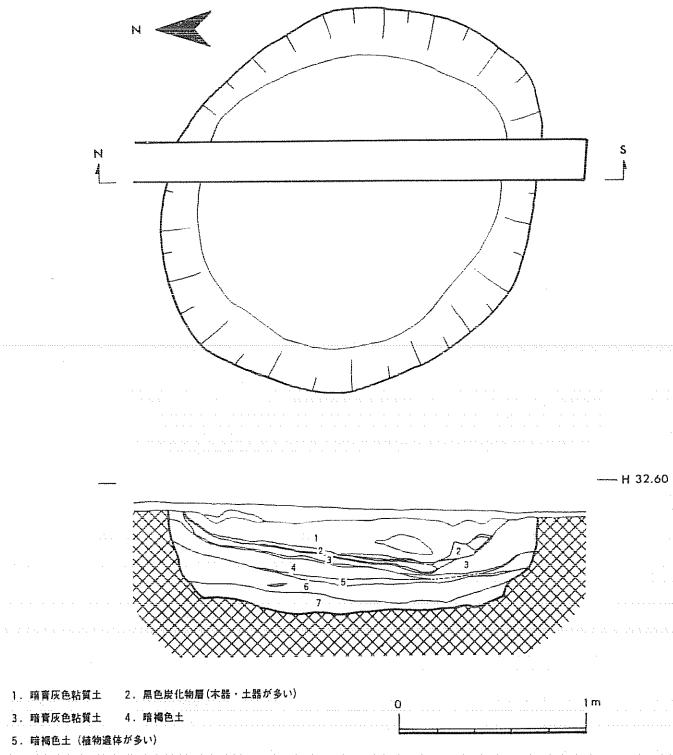
第16図　第10次発掘調査発見遺構図

調査を続けることは不可能となり，12月11日に荷物運搬・テント撤去を行ない，第10次発掘調査を終了した。

この間，11月29・30日第８回顧問会議を開き，顧問の新野・氏家両先生に現場視察をお願いし，調査指導と助言を賜わった。本会議では，昭和52年度以降の長期計画および今後の発掘調査体制についてもご指導をいただいた。

2　発見遺構

本調査で検出した遺構は，土壙４・河道１・杭列２・その他２である。（第16図）



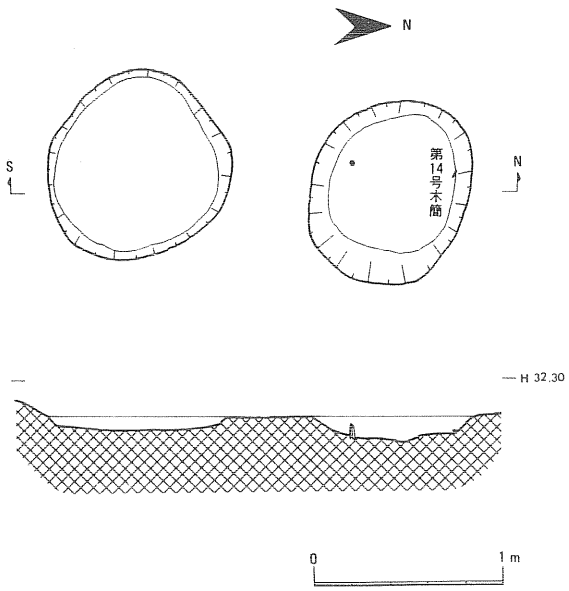
第17図　ＳＫ91実測図

層序について簡単に述べておきたい。ＦＪライン北壁断面の観察から，第Ⅰ層耕作土，第Ⅱ層黒褐色土（10ＹＲ2/3），第Ⅱ′層黒色・黒褐色土（7.5ＹＲ～10ＹＲ2/2），第Ⅲ層黒褐色土（2.5Ｙ1/3），第Ⅳ層暗緑灰粘質土（10ＧＹ4/1）にわけられる。

以下，主要遺構について述べる。

SK91土壙　本土壙は２度にわたって使用されている。当初の規模は，直径2.5×1.87ｍ，深さ0.50ｍと長楕円形に近い。土壙内には，暗緑灰・暗オリーブ灰色の粘質土に，炭化物・クルミ・植物遺体などが入っていた。次の時期は，当初のほぼ中央部に直径1.90×1.70ｍ，深さ0.3ｍの規模で，楕円形である。土壙底面には，黒色炭化物と木片・植物遺体・土器が２～３cm，その上に，暗青灰色粘質土がのっている。土壙内出土土器は，多量の土師器と小量の須恵器・内黒土師器がみられた。ＳＫ91は第Ⅱ′層期の土壙である。（第17図）

SK92土壙　ＳＫ91の南側に隣接して，同時に発見された。土壙の規模は直径1.15×1.06ｍ，深さ0.12ｍの円形に近い。土壙内には黒色炭化物・焼けた木片数点と暗青灰色粘質土が入っていた。土壙内出土土器は少量の土師器，内黒土師器・須恵器がみられた。ＳＫ92は第Ⅱ′層期の土壙である。



第18図　ＳＫ97（右）・98（左）実測図

SK97土壙　土壙の規模は直径1.05×0.95 *m*，深さ0.14 *m* でほぼ円形に近い。中央よりやや南東よりに，径5 *cm*程の丸太棒が立っていた。丸太棒の頂部は腐朽しているため，どの位土壙肩から出ていたかはわからない。土壙内からは，箸形木器と木簡（第14号）が北側の底面に密着して発見された。土器は土師器・内黒土師器・須恵器がみられた。ＳＫ97は第Ⅳ層期の土壙である。（第18図）

SK98土壙　土壙の規模は直径1.00×0.96 *m*，深さ0.06 *m* で，ほぼ円形に近い。ＳＫ97に比較すると底面が浅く，埋土は暗青灰色粘質土で，遺物は土師器・須恵器が数点みられた。ＳＫ98は第Ⅳ層期の土壙である。（第18図）

SL95河道　この河道は調査区北側にあり，河道の肩は北側は暗緑灰砂層に，南側は暗緑灰粘質土上面にある。河幅は約3.7 *m*，肩から河底面までは東で0.84 *m*，西端では0.80 *m* で，河底は西から東に向ってゆるやかな低い傾斜をもち，わずかに蛇行していた。河道内には，ナラ・ヤナギと思われる埋木や，削り屑と思われる木片や植物遺体がみられた。

SA96杭列　ＳＬ95の西端に割材杭３本・丸太杭２本の杭列がみられた。杭は頂部が北西方向から南東方向に斜めに打ち込まれており，頂部は河道の肩からわずかに出ているものがある。又，杭の底部は河底部にまで達していた。これら杭列を観察してみると，位置が不規則で，傾斜角度の違いも大きく，杭の太さも不揃いである。上流からの水流に抵抗するような斜方向にあるのだが，どのような機能を果たしたものか，解明することはできなかった。

SA99杭列　現状で確認できた杭は６地点で，相対する杭の「あたり」付近を精査したが確認できなかった。天候不順の悪条件下での作業のため，見失っている可能性もある。便宜上ＳＡ99杭列の名称を東側の北から南へ１，２，３，西側の北から南へ４，５，６とする。杭１・２・４は丸太杭，３・６は割材杭で，４はあたりが確認できた。杭間の間隔は，１・２・３間は，2.15 *m*，2.22 *m*，４・５・６間は2.24 *m*，1.54 *m* で，２と４，３と５間は1.07 *m* と同一で

あった。この長さから，２・３と４・５，２・４と３・５間はほぼ等しいから相関関係にあると考えたいし，１・６も位置からみて，関連する同一遺構としておきたいが，１の位置が列方向からわずかに東偏していることは不自然である。

ＳＡ99の機能は，当初ＳＡ99周辺に何らかの建物跡があるのではなかろうかと精査したが，天候の悪条件も重なって確認できなかった。又，ＳＡ99はＳＬ95に近い位置にあり，これに付随する施設かとも思われるが，肯定する素材がない。ＳＡ99北側の延長線上，ＳＬ95内にも関連する遺構はなかった。ＳＡ99は第Ⅲ層期の遺構か，第Ⅳ層期の遺構か明確につかめなかった。

SX93その他　遺構の規模は4.10×2.55ｍ，深さ0.05ｍの不整長方形で，南側のわずか東よりに幅0.44ｍ，長さ0.90ｍ，深さ0.05ｍの溝が付く。埋土は暗褐色土で出土遺物はなかった。

SX94その他　遺構の規模は2.10×1.60ｍ，深さ0.05ｍの不整長方形である。埋土は暗褐色土で出土遺物はなかった。ＳＸ93，94は，第Ⅲ層期の遺構である。

３　出　土　遺　物

（１）　層序別出土土器

土器は各層から出土しているが，第Ⅰ層は耕作による攪乱層で，小破片が若干出土しているだけであるので省略する。

①　第Ⅱ層出土土器　（第19図，図版24）

土師器が圧倒的に多く出土した。

土師器

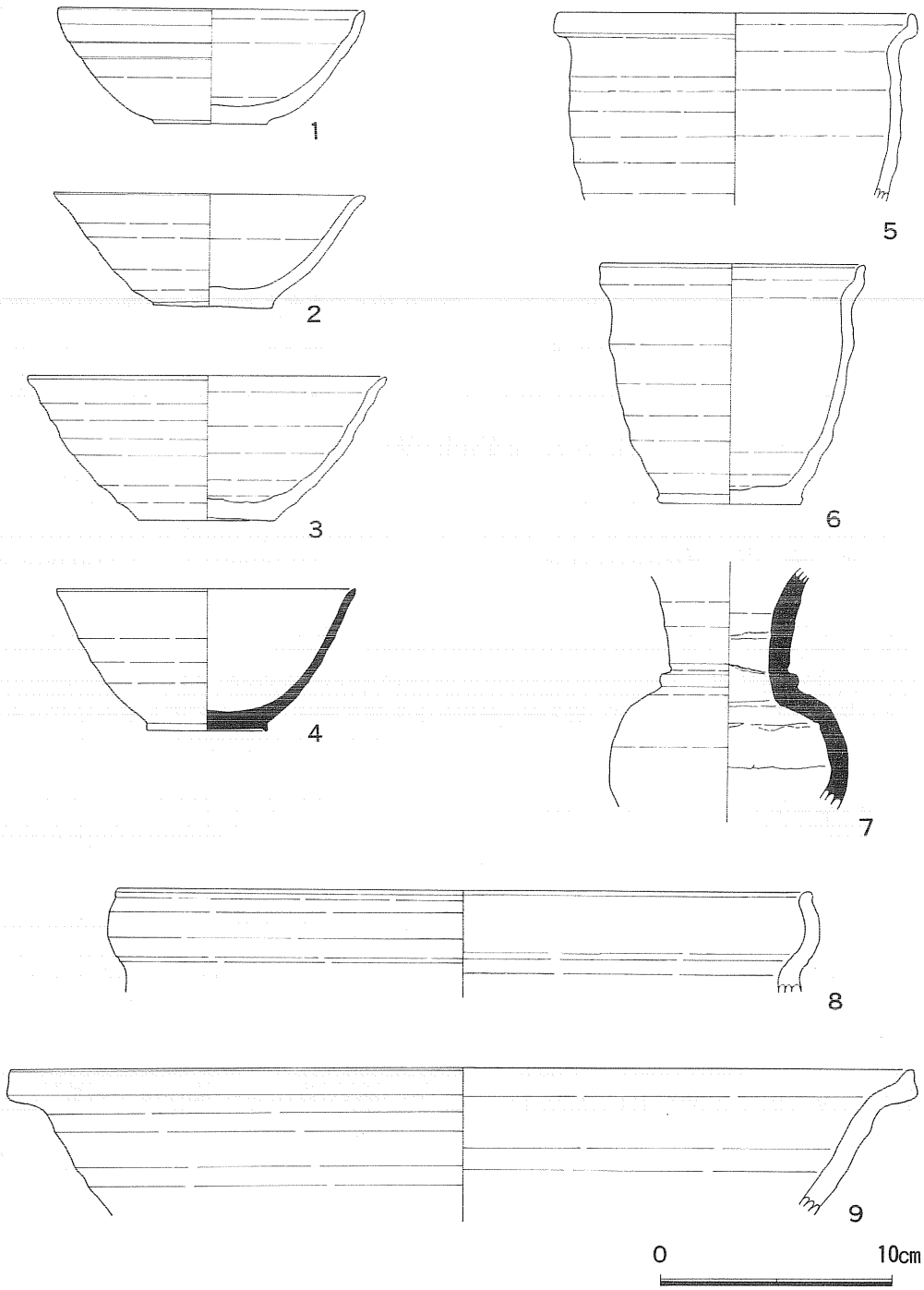
杯（１～３）　浅黄橙色ないしにぶい橙色を呈し，砂粒が混入しているが焼成は良好，回転糸切りで底径の口径比はいずれも0.38である。(1)はロクロ調整後の凹部が浅い沈線状をなしており，(2)は内外両面に黒班が見られ，(3)は底部内面の中心部に黒褐色の物質が付着している。

甕（５・６・８）　(5)(6)は小形で煤が付着している。(6)は口径11.5㎝，器高10.4㎝，底径6.2㎝を測る。(8)は口縁部が内湾し，口唇部がわずかに立ち上がるものである。

鍋　(9)　内面はにぶい橙色，外面は黒褐色を呈し，煤が付着する。焼成は良好でロクロ調整されている。口径は39㎝程と推定される。

須恵器

杯　(4)　灰色を呈し，胎土に大きめの砂が多いが，焼成は良好である。回転糸切りで底径



第19図　第Ⅱ層出土土器実測図

の口径比は0.41である。

長頸壺 (7)　球形にふくらんだ体部から頸部が外反しながら立ち上がる。体部と頸部の境には粘土紐張り付けによる突帯が設けられている。胎土は細かいが，器肌はザラザラしており内面に粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。

② **第Ⅱ′層出土土器**　(第20図，図版25)

Ⅱ層同様，土師器が多く出土した。

土師器

杯（10・11）　(10)は浅黄橙色を呈し，体部がいくぶん外側にふくらみながら立ち上がり口縁部がやや外反し，末端では内側に少し折れる。回転糸切りで，底径の口径比は0.39である。(11)は浅黄橙色を呈し，胎土に砂粒が多いが焼成は良好で堅い。体部が外方にわずかにふくらんで立ち上がり，先ぼそりの口縁部に至る。底径の口径比は，0.48である。

甕（14～20）　小形(14)(15)と大形（16～20）にわけられる。(16)の外面には調整時の工具によると思われる，浅い斜線が数段見られる。(17)はロクロ調整後，体部を手持ちヘラケズリし，体部最大幅は22cm前後と思われる。(20)はロクロ調整後，外面に縦方向に刷毛調整し，口縁部をヨコナデしている。口唇部にはヘラによるおさえがあり，稜線を形成している。一般に砂粒の混入が多く，外面に煤が付着している。

須恵器

杯（12・13）　(12)はにぶい黄橙色を呈する。胎土は微細で，焼成は良好で堅い。回転糸切り離しで，底径の口径比は0.38である。(13)は灰白色を呈し，胎土は細かく，焼成良好である。回転糸切り離しで，底径の口径比は0.49である。

③ **第Ⅲ層出土土器**　(第21図，図版26)

出土数が少なく，図示し得るものは2点にすぎない。

土師器

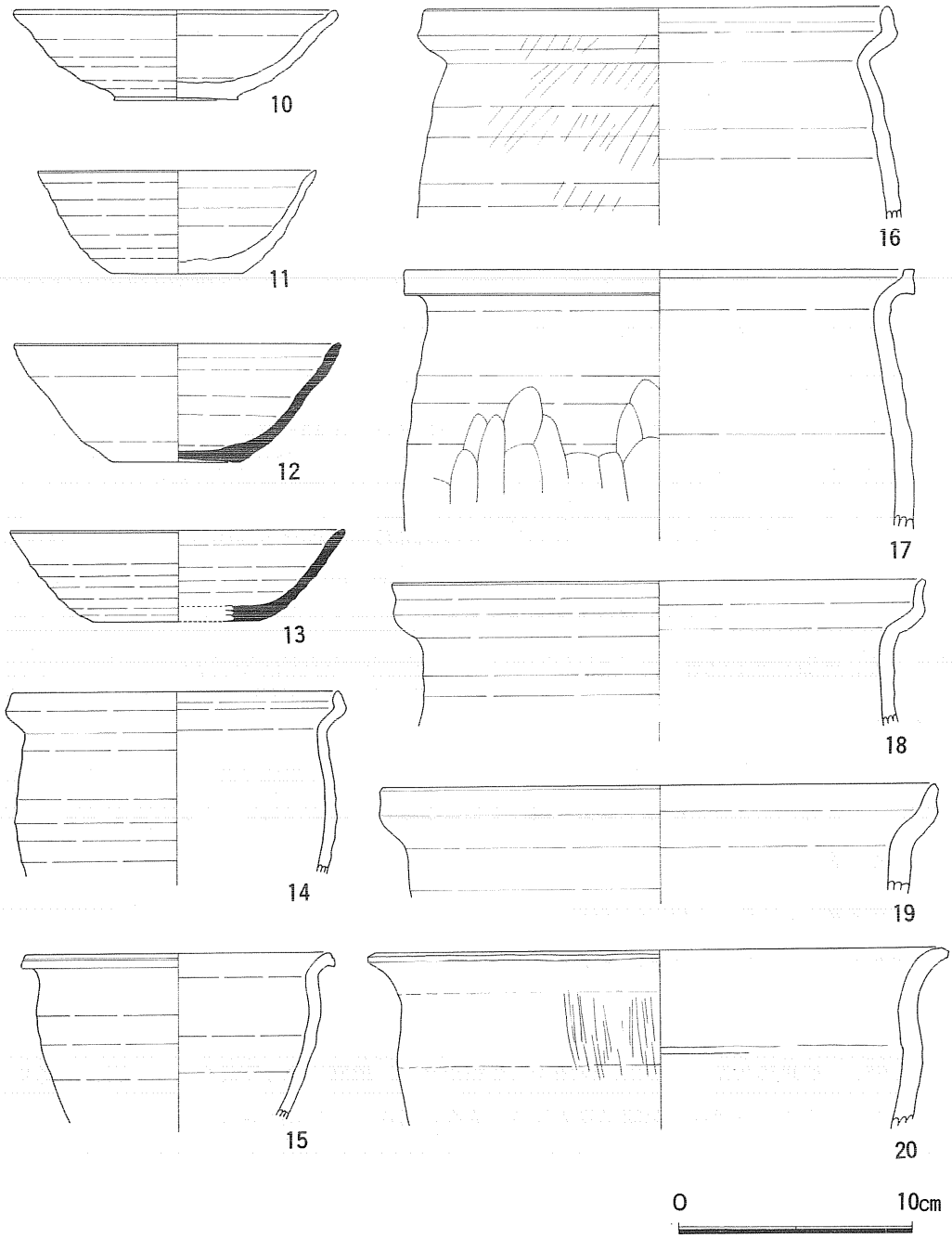
杯 (21)　淡黄色を呈し，胎土には細かい砂粒が多く，焼成はやや不良である。回転糸切り後の底面に，1本のヘラ描き刻線が見られる。底径の口径比は0.42である。

須恵器

杯 (22)　灰色を呈し，胎土は微細で，焼成も良好である。体部内面下半に墨が付着し，底面は磨滅しており，硯として転用されたらしい。底径は小さく，口径比0.31である。

④ **第Ⅳ層出土土器**　(第22図，図版26・27)

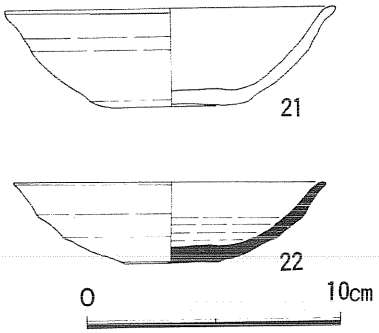
土師器・内黒土師器・須恵器が出土している。



第20図　第Ⅱ'層出土土器実測図

土師器

杯（23～26）　㉓は内黒で，底部を欠くが体部には両面に横方向のヘラミガキがなされている。㉔は外面は淡黄橙色を呈し，内黒で，底部内面に不定方向のヘラミガキがなされている。回転糸切り後に高さ5㎜程の高台を付し，台部内側をナデている。㉕は淡橙色を呈し，胎土に砂が混入するが，焼成は良好で堅く，回転ヘラ切り離し後，体部下半と底面の半ばまで回転ヘラケズリをほどこす。高さ2.7㎝，底径の口径比0.63である。㉖は口縁部が大きく外反するもので，にぶい橙色を呈し，焼成は良好で堅く，砂粒の混入も少ない。底径の口径比は0.35である。



第21図　第Ⅲ層出土土器実測図

甕（33～35）　口縁部が外傾して先端がわずかに内傾し，先細りになるもの㉝，口唇部に沈線のあるもの㉞，横方向に大きく外反し，先端の内面にふくらみを持つもの㉟などがある。ロクロ調整後，体部内面に刷毛調整がなされている。

須恵器

杯（27・29・31）　㉗㉙は灰白色を呈し，回転ヘラ切り，底径の口径比はそれぞれ0.67，0.57である。㉛は灰色を呈し，胎土は極めて細かく，回転糸切りで，底径の口径比は0.47である。

高台杯（30・32）　㉚は回転ヘラ切り後，高台を付し，底部周縁に回転ヘラケズリをほどこしている。㉜は高台から体部がいくぶん丸みをもって立ち上がり，器体の半ばで稜をなして屈折し，ゆるやかに外反しながら口縁部に至る。高台はほぼ直立する台部の先端が先ぼそりになりつつ外側へ張り出し，台部内端部がわずかに浮き上がって稜を形成する。底部切り離しははっきりしない。

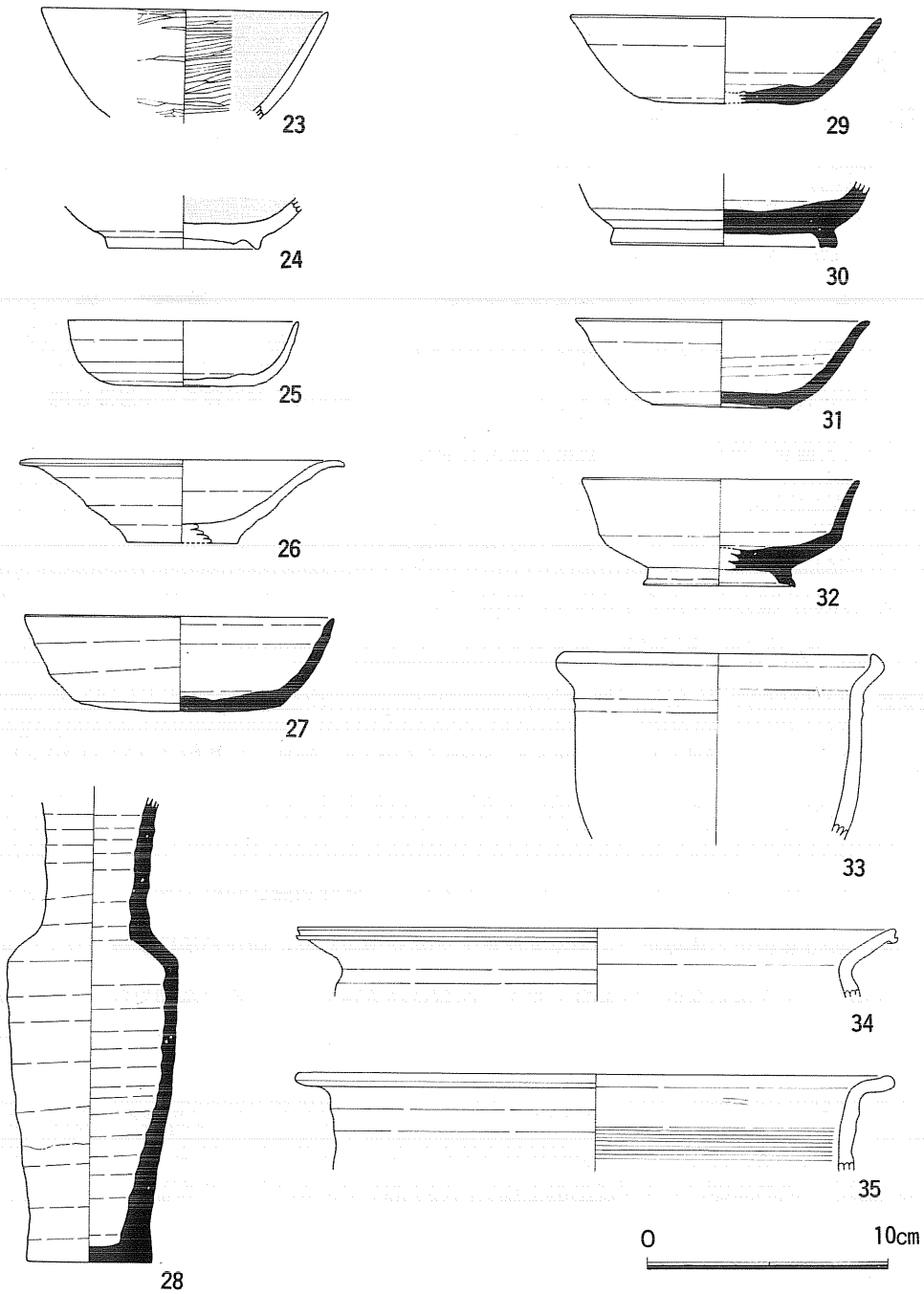
花瓶（㉘）　現高20.3㎝を測る。緑灰色を呈し，底部より5㎝程の箇所に粘土紐巻き上げ痕が見られる。内外両面にロクロ成形痕を残し，切り離しは回転糸切りである。

(2)　遺構別出土土器

SX90出土土器　（第23図，図版27）

遺構は確認されなかったが，ＦＩ66・67，ＦＪ66・67付近から集中して発見されたものである。

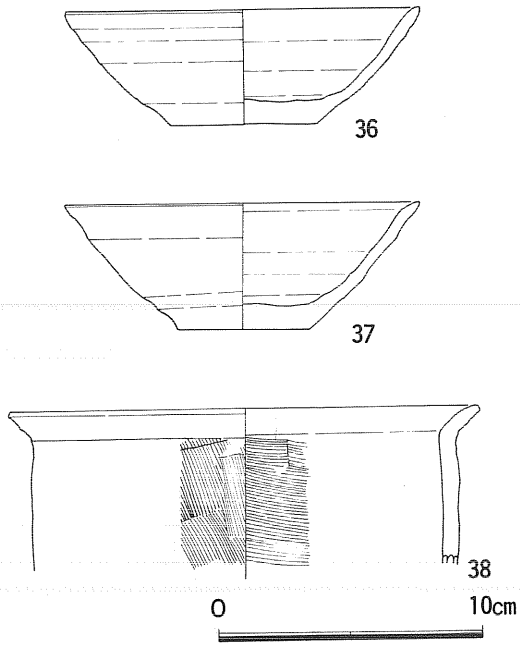
土師器



第22図　第Ⅳ層出土土器実測図

杯（36・37）　㊱は淡黄橙色を呈し，胎土・焼成ともに良好である。回転糸切りで，底径の口径比は0.41である。㊲は内面橙色，外面黒褐色を呈し，胎土に砂粒が混入するが，焼成は良好である。口縁部が外反しつつ先細りとなる。回転糸切りで，底径の口径比ははは0.37である。

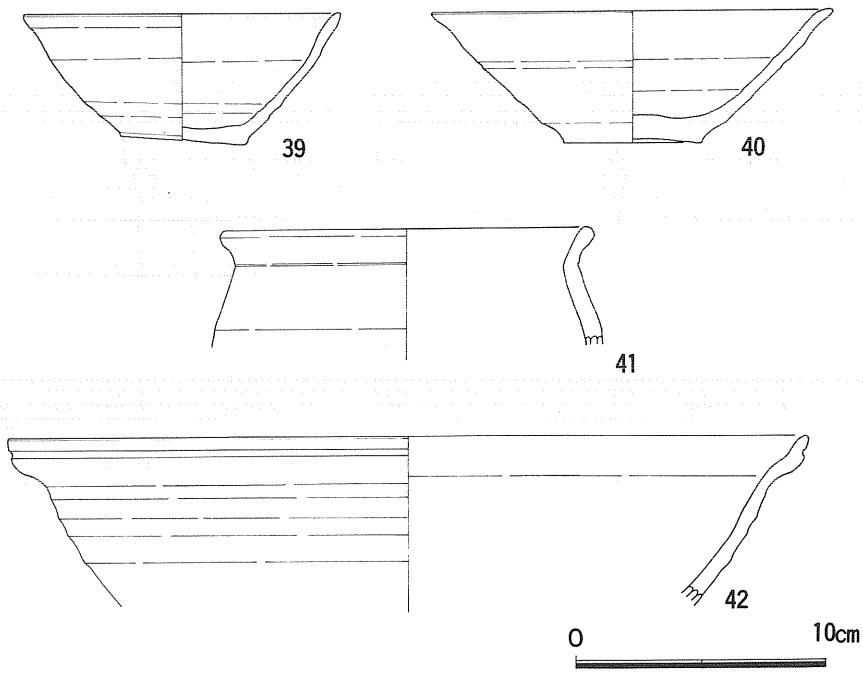
甕　㊳　にぶい橙色を呈し，内反ぎみの体部から口縁部が屈折して外反する。外面は縦，内面は横方向に刷毛調整され，外面口縁部はヨコナデされる。刷毛目工具の幅は，その末端の痕跡から，2㎝を測る。焼成は良好で堅い。



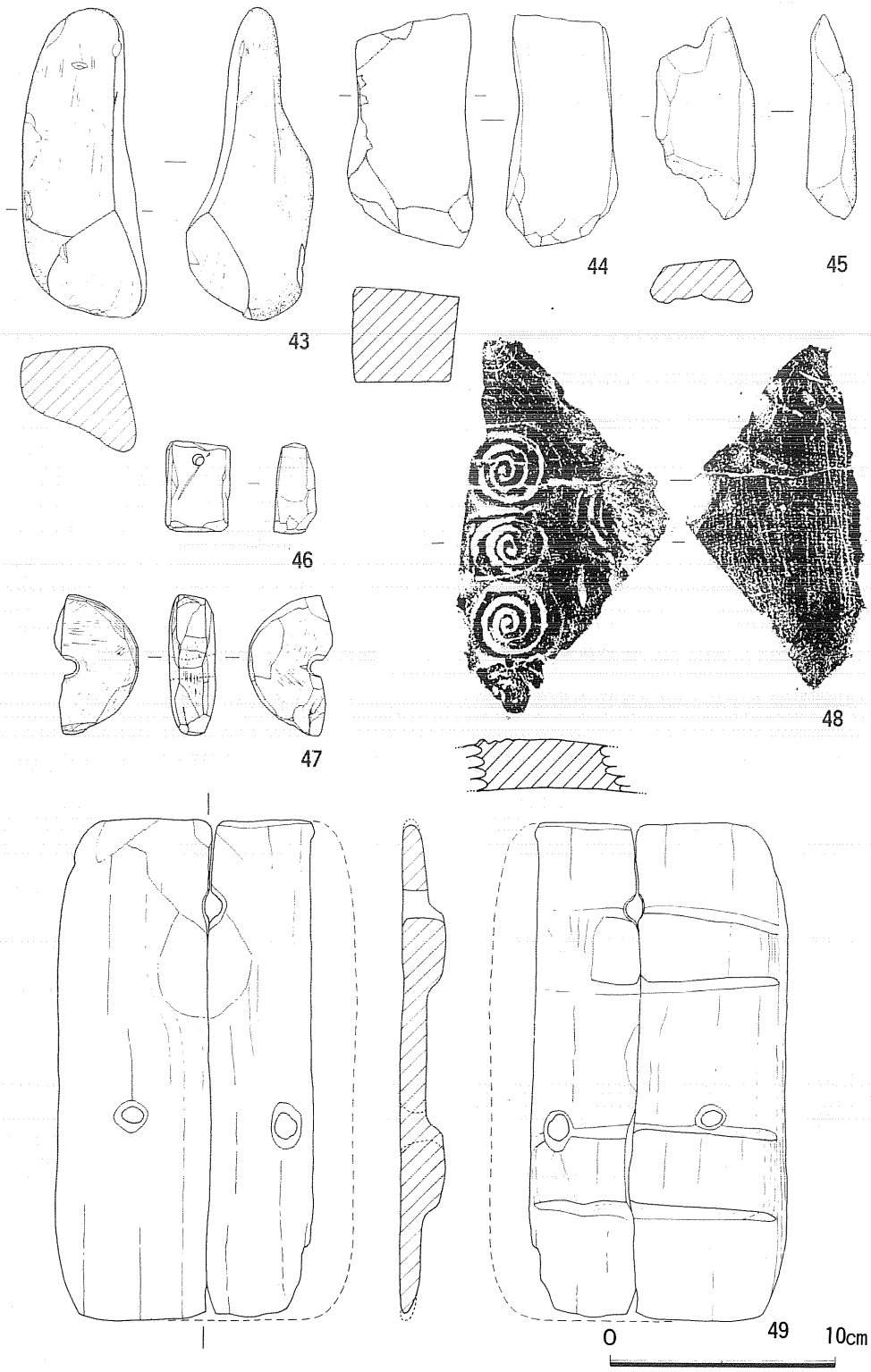
第23図　ＳＸ90出土土器実測図

SK91　出土土器　（第24図，図版28）

杯（39・40）　㊴にぶい黄橙色を呈し胎土に砂粒を混入するが焼成良好である。回転糸切りで，底径の口径比は0.39である。両面に黒班が見られる。㊵全面が一様ににぶい橙色を呈し，胎土焼成ともに良好である。回



第24図　ＳＫ91出土土器実測図



第25図　砥石・紡錘車・瓦・下駄実測図

転糸切りで，底径の口径比は0.35である。

甕 (41)　浅黄橙ないし灰褐色を呈し，両面及び口縁部の断面に煤が付着している。内傾する体部から口縁部が外反し，屈折点は浅い沈線状を呈する。焼成は良好，ロクロ調整による。

鍋 (42)　灰白色を呈し，胎土に小石を混入するが，焼成は良好で堅い。口縁部に太い沈線が走り，煤は付着していない。ロクロ調整による。

ＳＫ92，ＳＸ93・94，ＳＬ95，ＳＫ97・98から土師器・須恵器が少量出土しているが，小破片のため，図示し得るものはない。

（３）　その他の遺物

砥石　（第25図43～46，図版28）

(43)は長さ14cm，最大幅６cmで，二面に使用痕があり主に縦方向に走るが，中央部付近は横あるいは左上から右下に走る。石質は緑色凝灰質泥岩である。(44)は長さ10.5cm，幅5.5cmで四面が使用されている他，稜線の部分にも使用痕がある。石質は砂岩である。(45)は長さ９cm，幅4.5cm，厚さ２cmで，二面を使用している。石質は玻璃質石英安山岩である。(46)は上部中央に穿孔のある携帯用の砥石である。二面を使用しており，石質は緑色凝灰質泥岩である。

錘紡車　（第25図47，図版28）

表裏は不定方向の擦痕が見られ，よく研磨されているが，外周は荒く削り取られており，平坦面が残っている。両面から穿孔され，孔径は中央部で８mmを測る。直径は6.5cm程と推定される。石質は緑色凝灰質泥岩である。

瓦　（第25図48，図版29）

平瓦が10点，丸瓦が１点出土している。いずれも小破片であるが，平瓦は内面に布目痕，外面に格子目叩き痕があり，丸瓦は内面に布目痕，外面は無文である。(48)の平瓦は灰色を呈し，外面に左回りの渦巻き叩き痕が，はっきりしたもので３個，他に明瞭でないが５個見られる。内面には布目痕がある。

下駄　（第25図49，図版29）

縦22.5cm，横推定13.5cmを測る連歯下駄である。隅丸長方形を呈し，歯部は使用によって磨滅，欠損している。前緒孔に接して，足裏によると思われる浅い凹みがみられる。

木簡　（図版29）

第12号　□□□［　　］□

長さ13.1cm，幅2.1cm，厚さ0.55cm。両端が欠損している。第Ⅲ層出土。

第13号　〔解ヵ〕
□□　申請□□

長さ7.5cm，幅2.17cm，厚さ0.34cm。両端が欠損している。第Ⅳ層出土。

第14号　表　□□□□□□□□□

　　裏　□[　　]□

長さ11.1㎝，幅1.36㎝，厚さ0.25㎝。両端と右半分が欠損している。ＳＫ97出土。

（4）　ま と め

第10次発掘調査では，土師器・内黒土師器・須恵器と砥石・紡錘車・瓦・下駄・木簡が出土した。出土土器は，層序によって器種・製作技法等に若干の相違点が見られる。

まず，杯底部を見ると，１破片を１とした場合，層序ごとの杯全個体数に占める，土師器・内黒土師器・須恵器の数は表１のようになる。

杯底部の切り離し技法は，回転糸切りと回転ヘラ切りがあるが，技法の明確なものの量を見ると，表２のようになり，第Ⅳ層のみが，他に比して大きく異なっている。

内黒土師器が層序ごとの土器総数に占める割合は，上層になるに従い漸次減少する傾向がある。（表３）

杯及び蓋で，回転ヘラケズリ，ヘラミガキ等の再調整のあるものは，第Ⅲ・Ⅳ層に多い（表４）

遺構別杯底部出土数，砥石・紡錘車・瓦・下駄の出土点数は，（表５）（表６）のとおりである。

表３　杯底部の器種別出現率

器種／層序	土師器	(%)	内黒土師器	(%)	須恵器	(%)	計	(%)
Ⅰ	38	93	0	0	3	7	41	100
Ⅱ	458	88	8	1	57	11	523	100
Ⅱ'	276	77	9	3	72	20	357	100
Ⅲ	63	62	3	3	36	35	102	100
Ⅳ	82	41	13	6	106	53	201	100
計	917	75	33	3	274	22	1224	100

表４　杯底部切り離し技法別出現率

技法／層序	回転糸切り	(%)	回転ヘラ切り	(%)	計	(%)
Ⅰ	35	100	0	0	35	100
Ⅱ	492	96	19	4	511	100
Ⅱ'	322	91	30	9	352	100
Ⅲ	96	90	11	10	107	100
Ⅳ	87	60	57	40	144	100
計	1032	90	117	10	1149	100

表５　土器総数に占める内黒土師器出現率

層序	個体数	%
Ⅰ	0	0
Ⅱ	28	0.8
Ⅱ'	37	1.7
Ⅲ	16	2.1
Ⅳ	40	3.1
計	121	7.7

表６　再調整のある土器数

器形／層序	杯	蓋	計
Ⅰ	0	0	0
Ⅱ	1	0	1
Ⅱ'	2	0	2
Ⅲ	8	2	10
Ⅳ	16	3	19
計	27	5	32

表７　遺構別杯底部出土数

器種／遺構	土師器	内黒土師器	須恵器	計
ＳＸ90	69	2	6	77
ＳＫ91	84	0	3	87
ＳＫ92	4	0	1	5
ＳＸ93	3	1	2	6
ＳＸ94	0	0	0	0
ＳＬ95	14	0	4	18
ＳＸ96	0	0	0	0
ＳＫ97	2	0	4	6
ＳＫ98	1	0	6	7
計	177	3	26	206

表８　砥石・紡錘車・瓦・下駄・木簡出土数

遺物／層序遺構	砥石	紡錘車	瓦	下駄	木簡
Ⅰ					
Ⅱ	2		1	1	
Ⅱ'			2		
Ⅲ	2		2		1
Ⅳ		1	4		1
ＳＫ91			1		
ＳＬ95			1		
ＳＫ97					1
計	4	1	11	1	3

4　小　　結

1　外郭南門から内郭正面に通ずる範囲には，道路およびＳＬ95の橋脚などとみられる遺構は確認できなかった。ＳＡ99は，ＳＬ95の南側しか発見できず，外郭南門跡（ＳＢ57）の南北中軸線より西側に寄ることなど，橋脚として積極的に理解することができなかった。

2　土壙はＳＫ91・92とＳＫ97・98のグループに分けられ，前者は第Ⅱ'層期，後者は第Ⅳ層期の遺構である。また，ＳＸ93・94は，第７次発掘調査のＳＫ64と距離も近く，位置・規格の不統一・埋土・深さなどから同種の遺構と思われる。第Ⅲ層期であろう。第４・５号木簡を発見したＳＫ60も第Ⅲ層期に伴うらしい。これが確実だとすれば，第Ⅲ層期は木簡年紀から９世紀中葉とされるから，第Ⅳ層期はそれ以前ということになる。出土土器および第14号木簡の年代を推測する手がかりが得られたことになる。出土土器については，整理を完了していないのでその概要を中間報告とした。

土壙の発掘例はまだ乏しいが，遺構内出土資料からその性格が理解できないだろうか。ＳＫ91からは，植物遺体・炭化物層があり，土器量も多い。ＳＫ97からは，植物遺体・炭化物・木簡（焼けていない）・土器が出土している。土壙内出土土器のうちＳＫ91・97・98から内黒土師器，ＳＫ91・92・97・98から須恵器が少量出土しているほかはすべて土師器である。土壙は日常生活に使用されたモノの廃棄の場であり，火の使用もおこなわれていた。火の使用は，廃棄物の焼却にかぎらず，土器生産の場の可能性もあると考えている。

Ⅵ 成果と課題

1 第9次発掘調査

払田柵跡の内郭線構造については，第2・3・9次発掘調査により，実態がほぼ究明されたといえる。しかし内郭線の位置については，北側の一部が確定したが，南側については，第3次発掘調査の(B)地点しかわかっていない。長森丘陵南側の東西に走る道路は拡幅舗装工事が予定されているので，事前の予備調査が急務となってきた。

第9次発掘調査と既往の調査の成果と課題を要約すると次のようになる。

1　第2次発掘調査では，内郭北門跡と角材列は2時期の建て替えがあった。この再建は位置を南側に移していた。第9次発掘調査では，角材列と築地が連続した施設であることが確認された。角材列は南側に建て替えがあり，築地は崩壊後その中心線が柵列の基礎として再利用されていた。これらの事実から考えて，この重複する2時期の仕事は，内郭線全体の大がかりな工事であったことを裏づけている。

2　角材列が築地の中心と接続していたことは，両者が同時存在だったことである。この事実は，角材列が内・外を区画し，視覚的に地上表現された物体としても，同様な機能を果しうる施設だったことになる。いいかえれば，角材列は築地にかわりうる施設であるということになる。角材列と築地という施設構造の相違は，基礎地盤が泥炭地と丘陵地という質的差異によるという理解に一面の妥当性があると考える。

3　角材列と築地の高さが同一か否かが問題となろう。築地の高さは，基底幅3 *m*としてどの位になるのだろうか。延喜式の数式をそのまま使用できえないにしても，約5～6 *m*と想定されよう。従って，角材列の高さも築地と同じ高さだとすれば，おのずと決まる。この結論はさらに検討してみたい。

4　第9次発掘調査では，角材底面に礎板・礎石があった。第2次発掘調査ではみつかっていない。また，角材がわずかに前後左右に傾斜しているとはいえ，底部から大きく傾斜しあきらかに倒壊したような状態は観察できなかった。この状態は，第2次・第9次発掘調査の観察結果が一致した。（注1）

2　第10次発掘調査

外郭南門北側の第10次発掘調査の概要を要約すると次のようになる。

1　外郭南門から内郭へ通ずる正面と思われる範囲には，道路・橋脚などの遺構はなかった。

2　土壙および出土遺物は，南北基準線より西側に多い。

3　土壙からは，木簡・土器など出土遺物が多い。土壙群が遺跡解明の手がかりを与えてくれそうである。

4　上記1～3の状況から，例えば木簡を作成・廃棄する機能を有するが，調査区の近人にあるのではなかろうか。第7・10次発掘調査区の西側あるいは外郭南門跡の東側を継続して発掘する必要が出てきた。

5　土器の出土量は，第Ⅳ層では須恵器が多いが，第Ⅲ層以上ではしだいに土師器の量比が大きくなる傾向にある。（注2）

注1　工藤雅樹　1973：「東北古代史と城柵」　日本史研究第136号　（昭和48年）

注2　宮城県多賀城跡調査研究所　1973　：「多賀城跡第15次発掘調査　考察」　多賀城―昭和47年度発掘調査概報―　宮城県多賀城跡調査研究所年報1972　（昭和48年）

小松正夫　1976：「昭和50年度秋田城跡発掘調査概報　考察　(3)出土土器について」　昭和50年度秋田城跡発掘調査概報　秋田市教育委員会　（昭和51年）

Ⅶ　調査成果の普及と関連活動

1　現地説明会の開催

昭和51年8月28日

第9次発掘調査について　　船木義勝，畠山憲司

2　諸団体主催講演会等への協力

月　日	会の名称	題　目	講　師	主　催　者
5．26	研修会	払田柵の現状	船木義勝	県南社会教育主事協議会
6．2	研究会	払田柵の発掘調査	船木義勝	大曲農業高校国・社教科研究会
6．24	羽後町成人講座	払田柵の現況	船木義勝	羽後町中央公民館
7．29	拓本講習会	拓本のとりかた	畠山憲司	秋田県教職員関係職員互助会
7．31	拓本講習会	拓本のとりかた	船木義勝 小玉　準	秋田県教職員関係職員互助会
8．3	子ども会リーダー講習会	払田柵について	船木義勝	仙北町教育委員会
8．4	拓本講習会	拓本のとりかた	船木義勝	秋田県教職員関係職員互助会
8．9	研究会	払田柵の発掘調査	船木義勝	横手・平鹿郡社会科研究協議会
8．19	野外研修 （フィールド・ワーク）	払田柵跡の発掘調査	船木義勝	秋田県教職員関係職員互助会
9．28	研究会	払田柵跡の発掘調査	船木義勝	県南高校社会科研究会
10．13	全県幼稚園長会議	払田柵跡の発掘調査	船木義勝	仙北町立北幼稚園
11．22	管外研修会	払田柵について	船木義勝	西目町文化財保護協会
12．3	払田柵跡発掘調査講演会	払田柵について	畠山憲司	千畑村公民館
3．5	月例会	払田柵の歴史	船木義勝	金堀部落老人クラブ
3．26	ふるさとの歴史と文化	語りはじめた 不文の遺跡	船木義勝	大曲青年会議所

3　発掘調査への協力

(1)　大湯環状列石

①　所在地　　秋田県鹿角市大湯

② 期　　日　　昭和51年9月27日～10月5日

③ 調査主体　　鹿角市教育委員会

④ 協力所員　　船木義勝，畠山憲司，小玉準

4　第3回東北古代城柵・官衛遺跡発掘担当者会議の開催

① 日　　時　　昭和51年8月30，31日

② 場　　所　　秋田県払田柵跡調査事務所

③ 協議議題　　(1) 築地の構築と構造

(2) 行政上の諸問題

④ 出　　席　　秋田市教育委員会　　石郷岡誠一・日野久

岩手県教育委員会　　国生　尚

水沢市教育委員会　　伊藤博幸・新田　賢

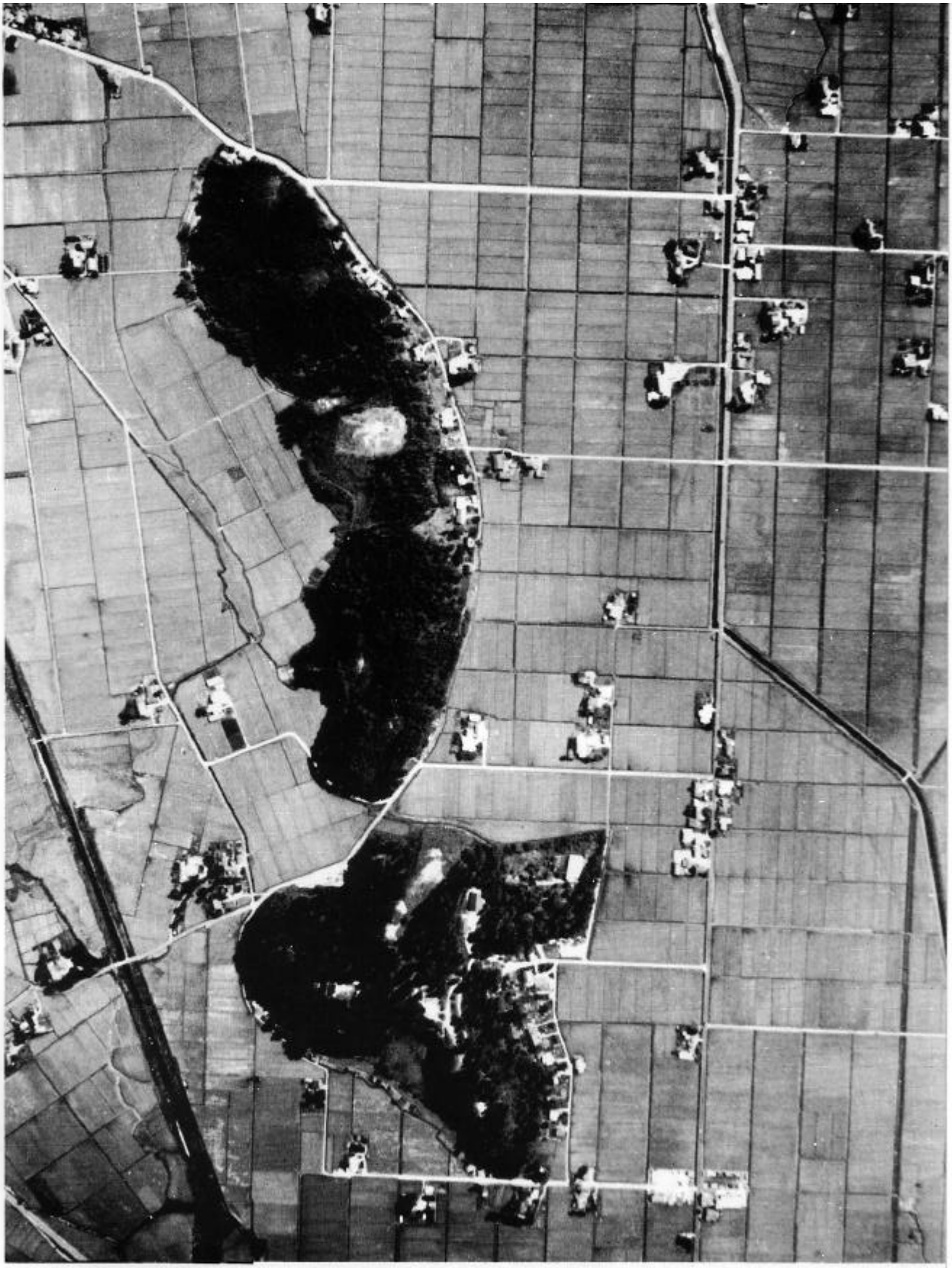
宮城県多賀城跡調査研究所　　桑原滋郎・鎌田俊昭

5　昭和51年度顧問会議の開催

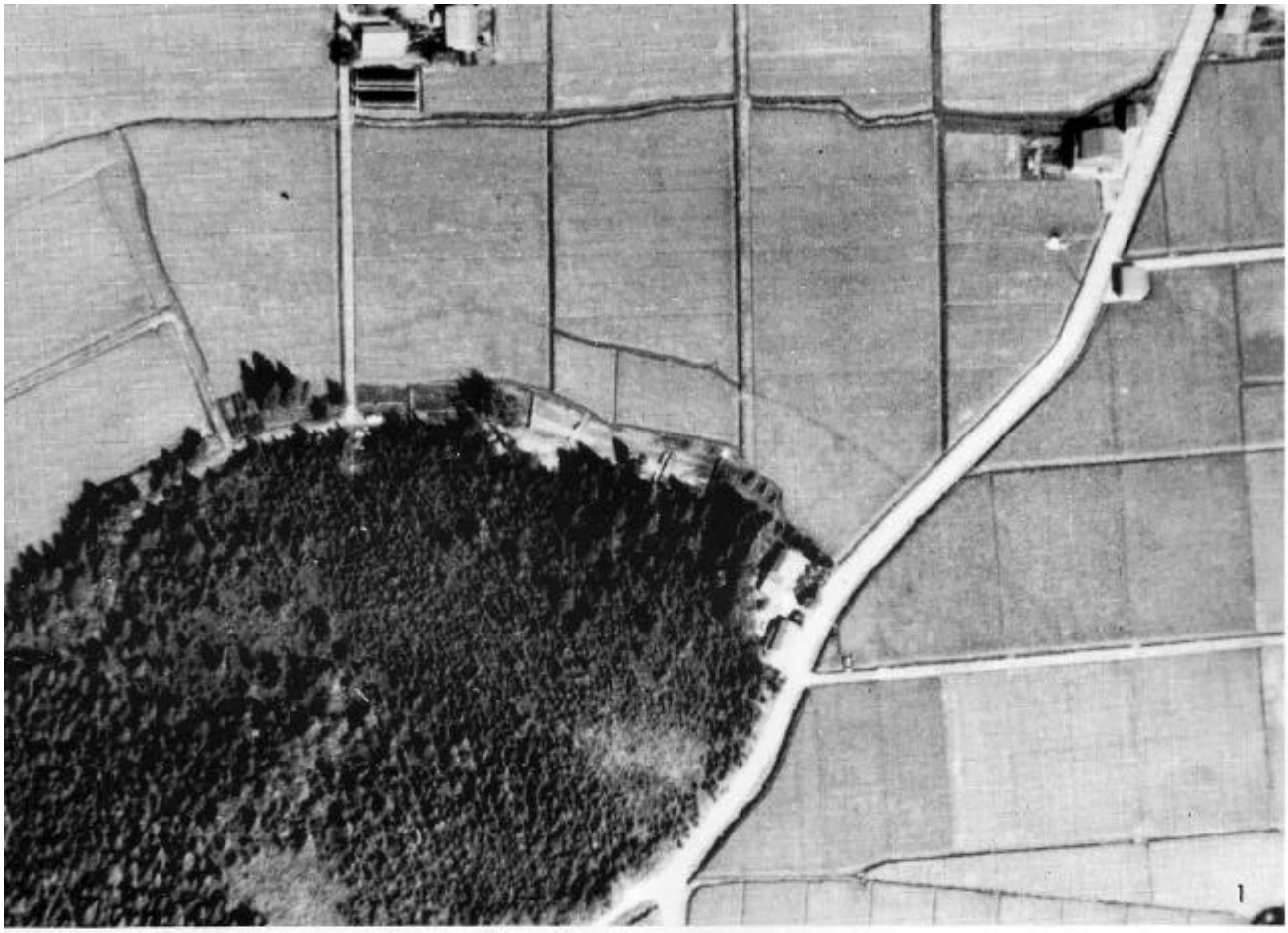
① 第6回顧問会議　　昭和51年7月5，6日

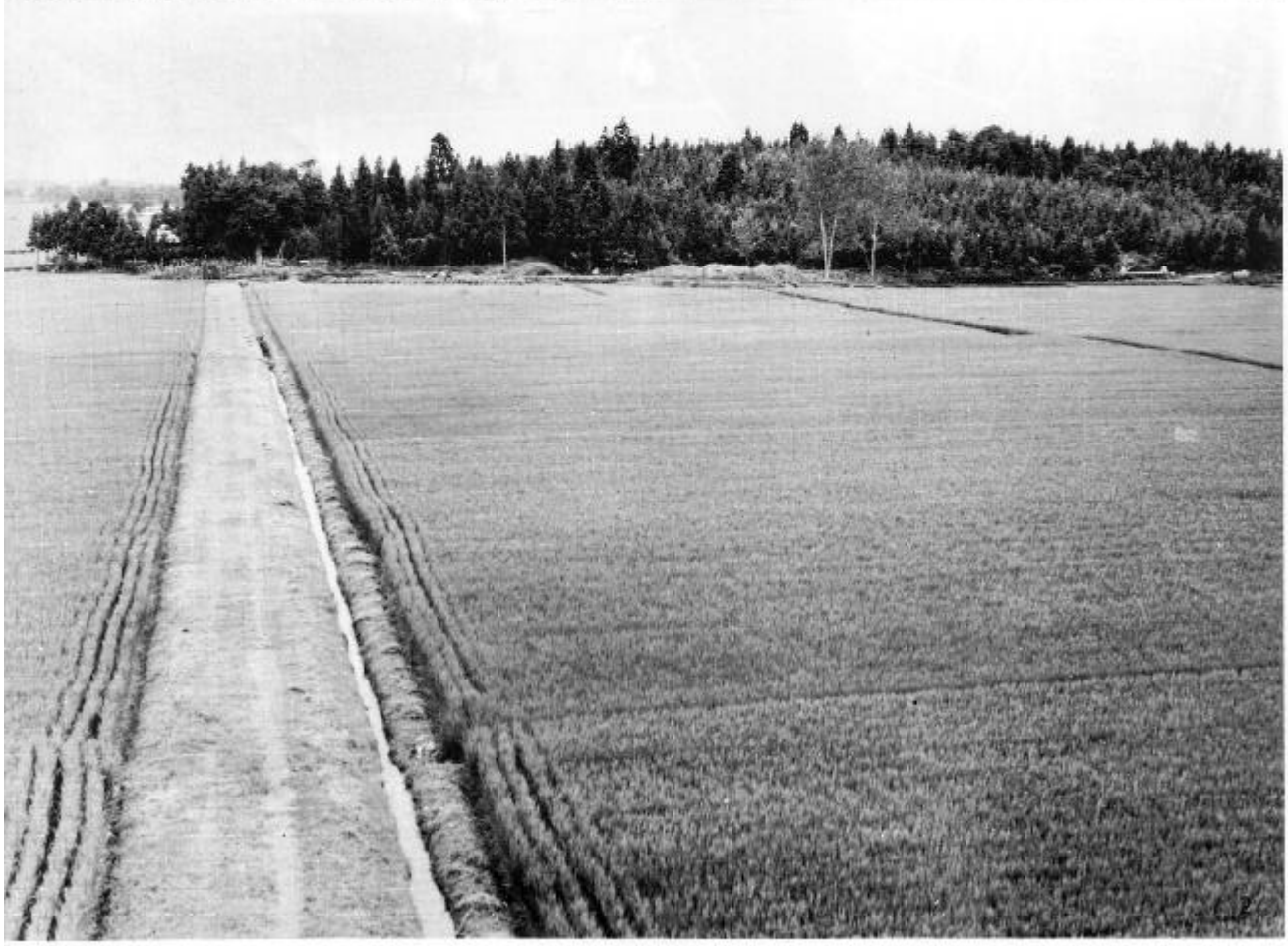
② 第7回顧問会議　　昭和51年8月24，25日

③ 第8回顧問会議　　昭和51年11月29，30日

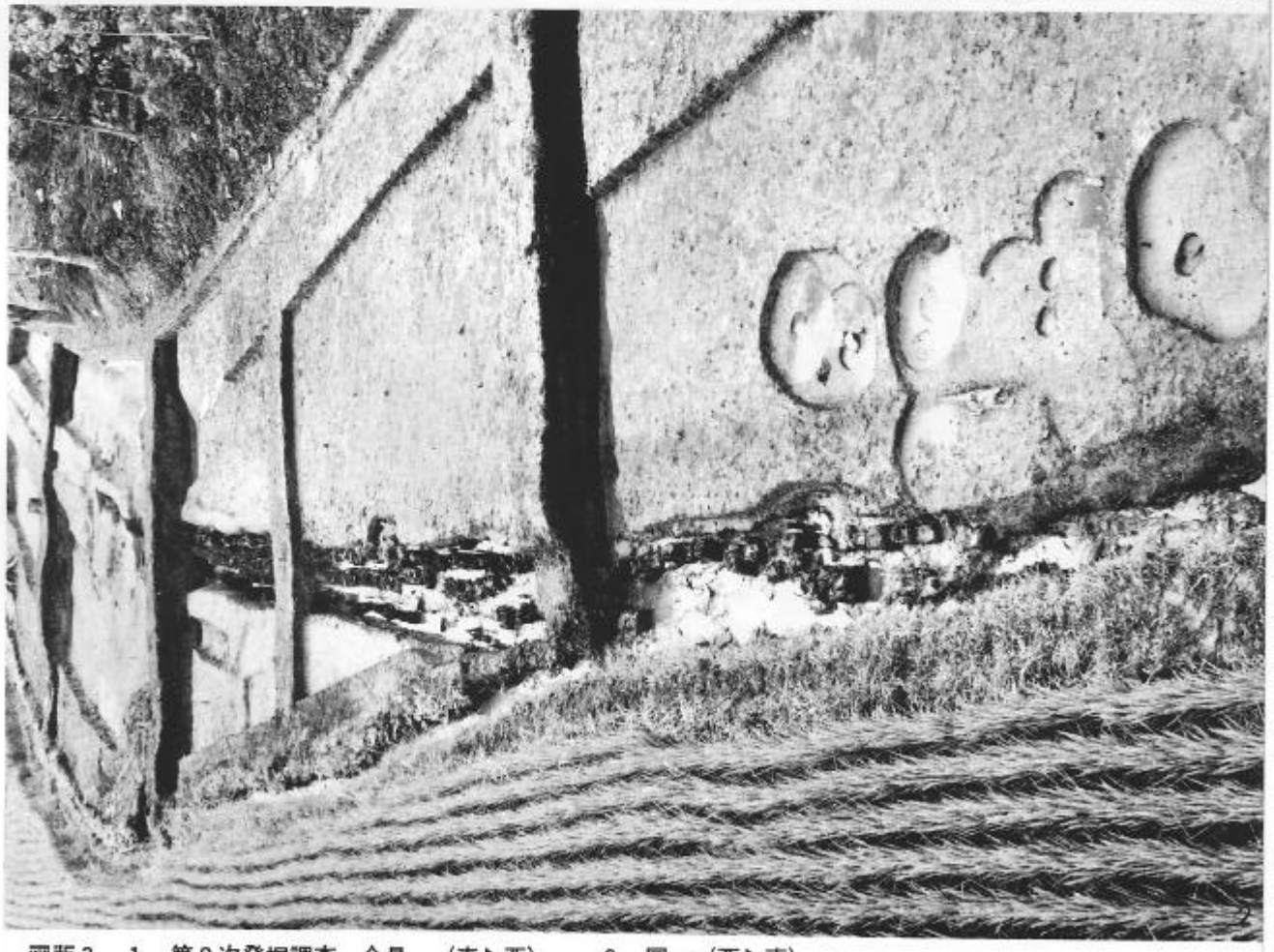


図版1　払田柵跡　航空写真



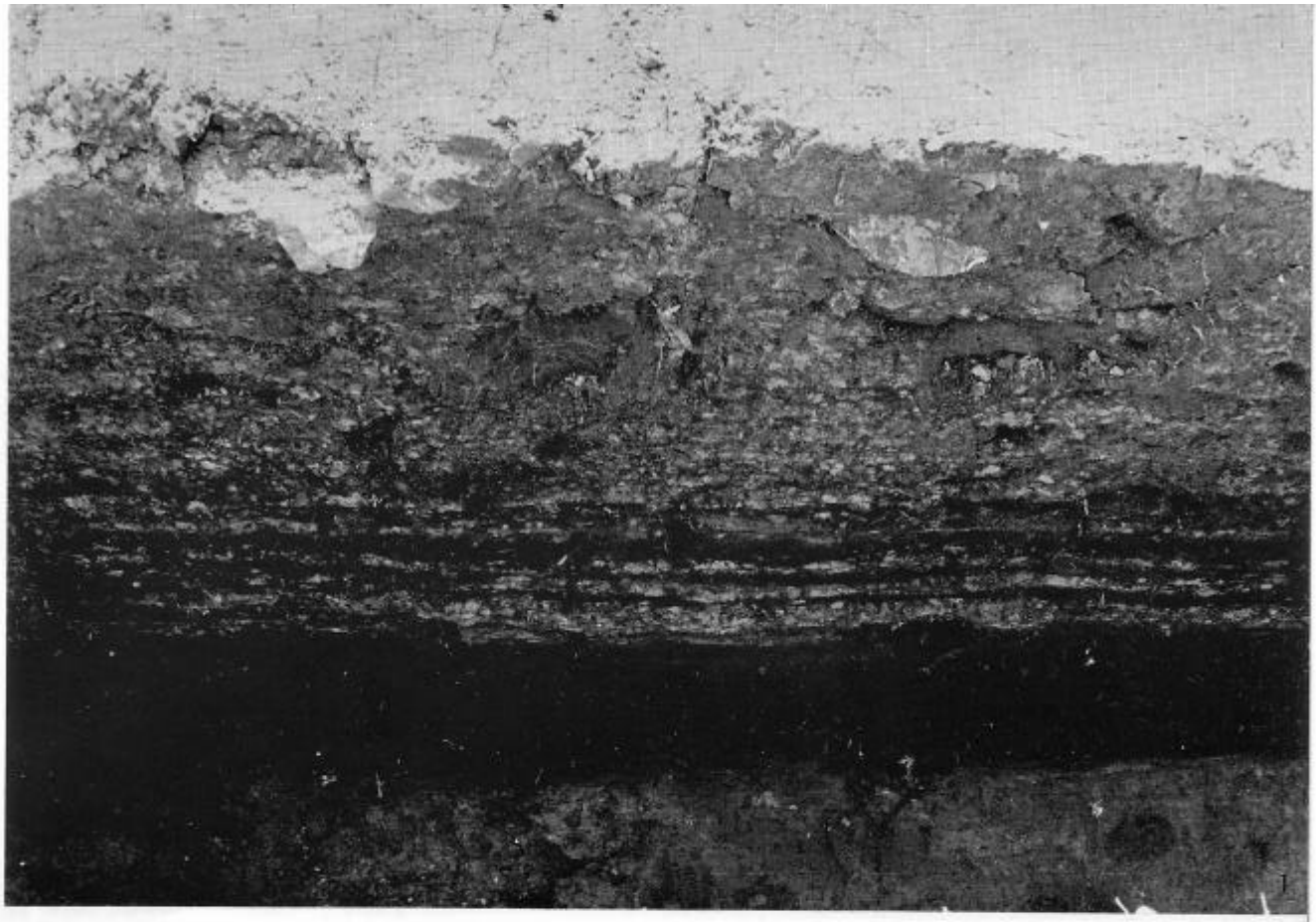


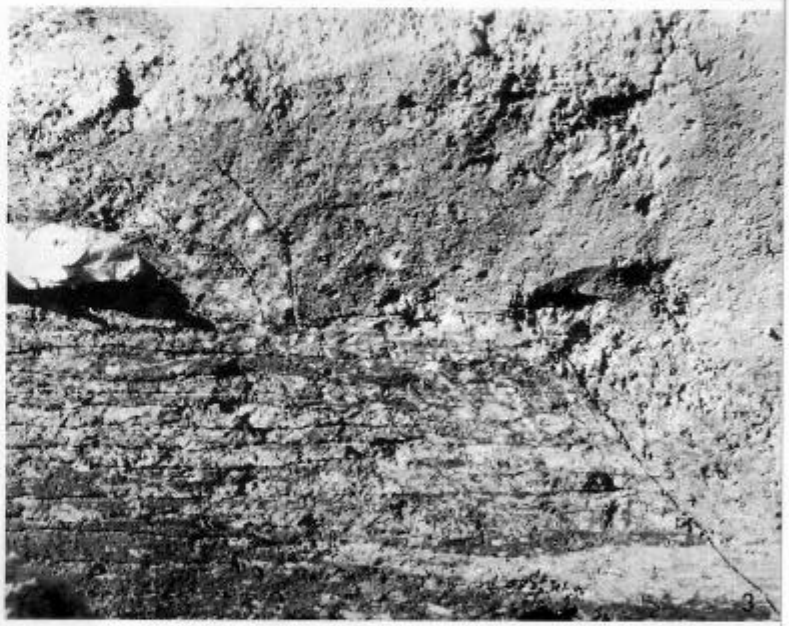
図版２　１　発掘地点の航空写真　　２　発掘地点の遠景　（北▶南）



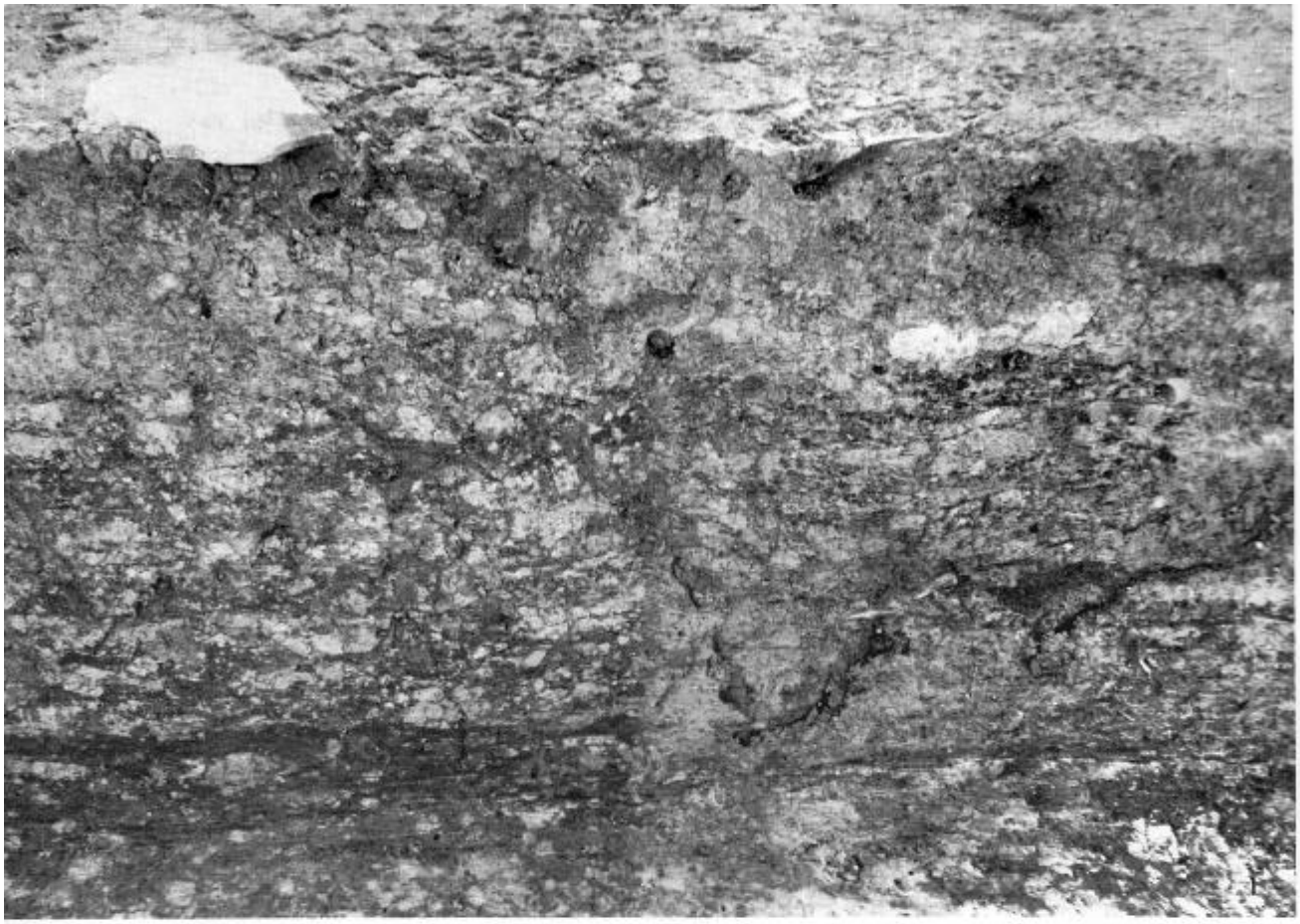
図版3　1　第9次発掘調査　全景　（東▶西）　　2　同　（西▶東）

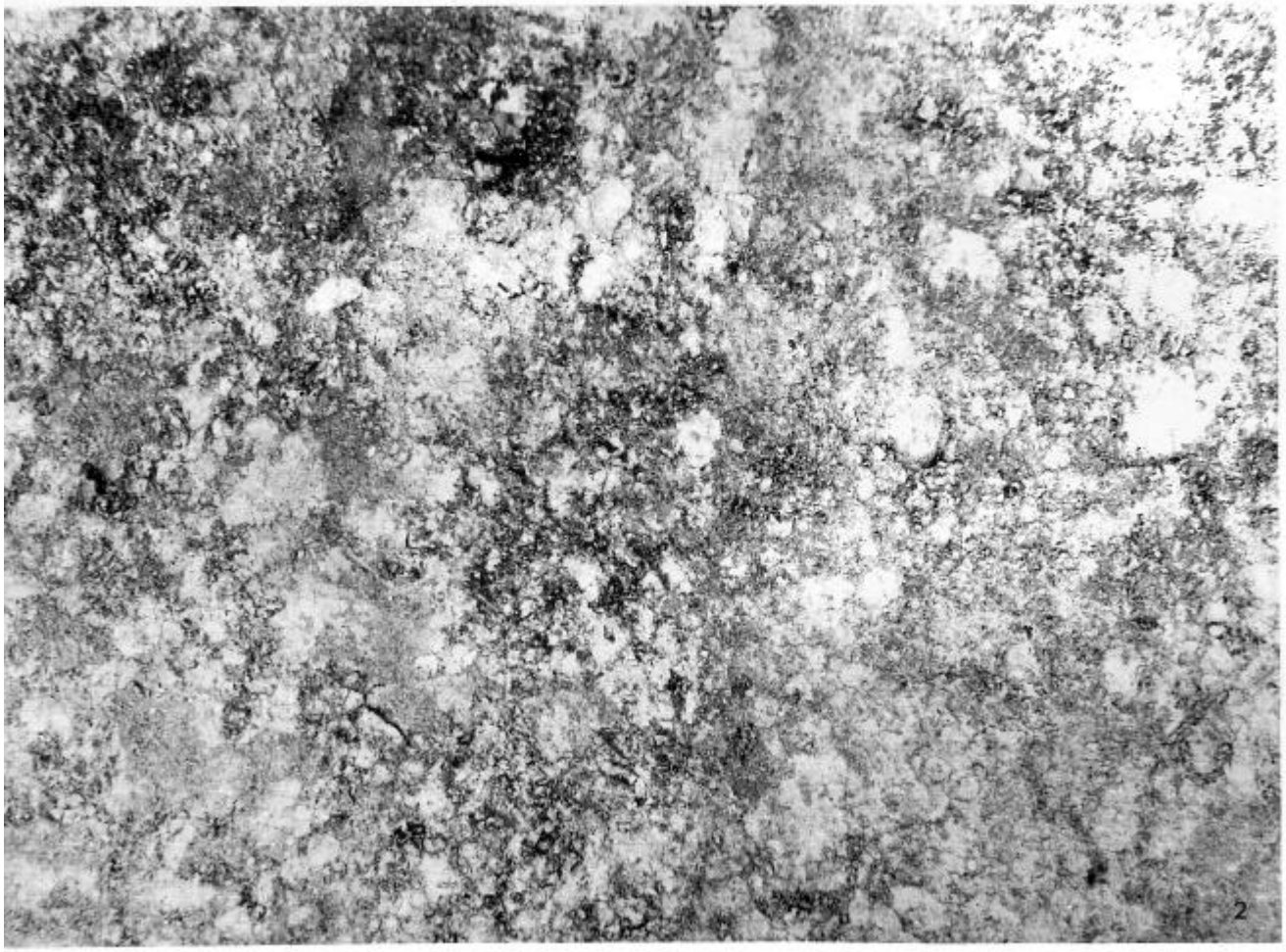
図版4　ＳＦ75築地　（西▶東）





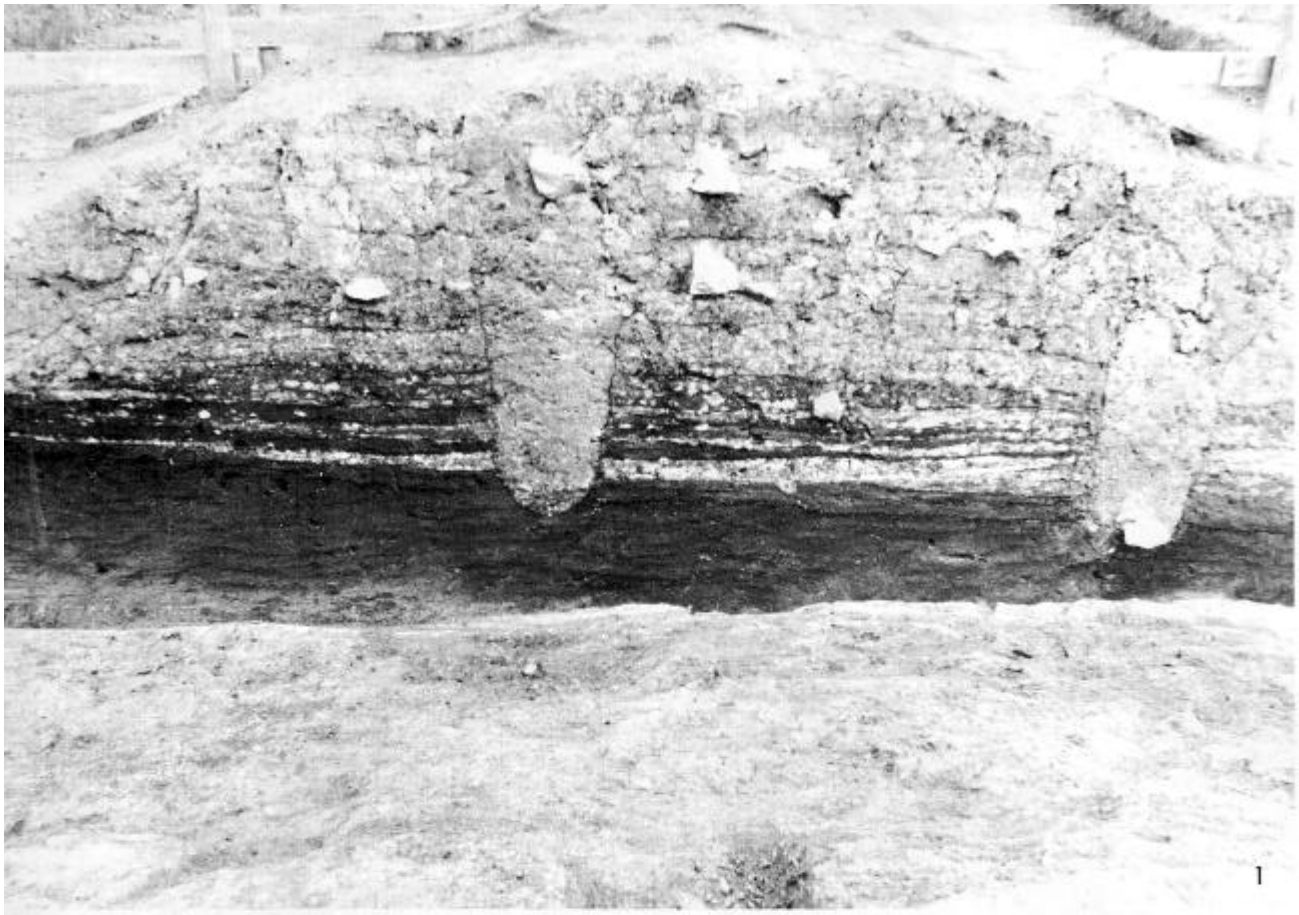
図版５　１　築地版築状況　（東▶西）　２　同　（南側西壁）　３　同　（北側西壁）





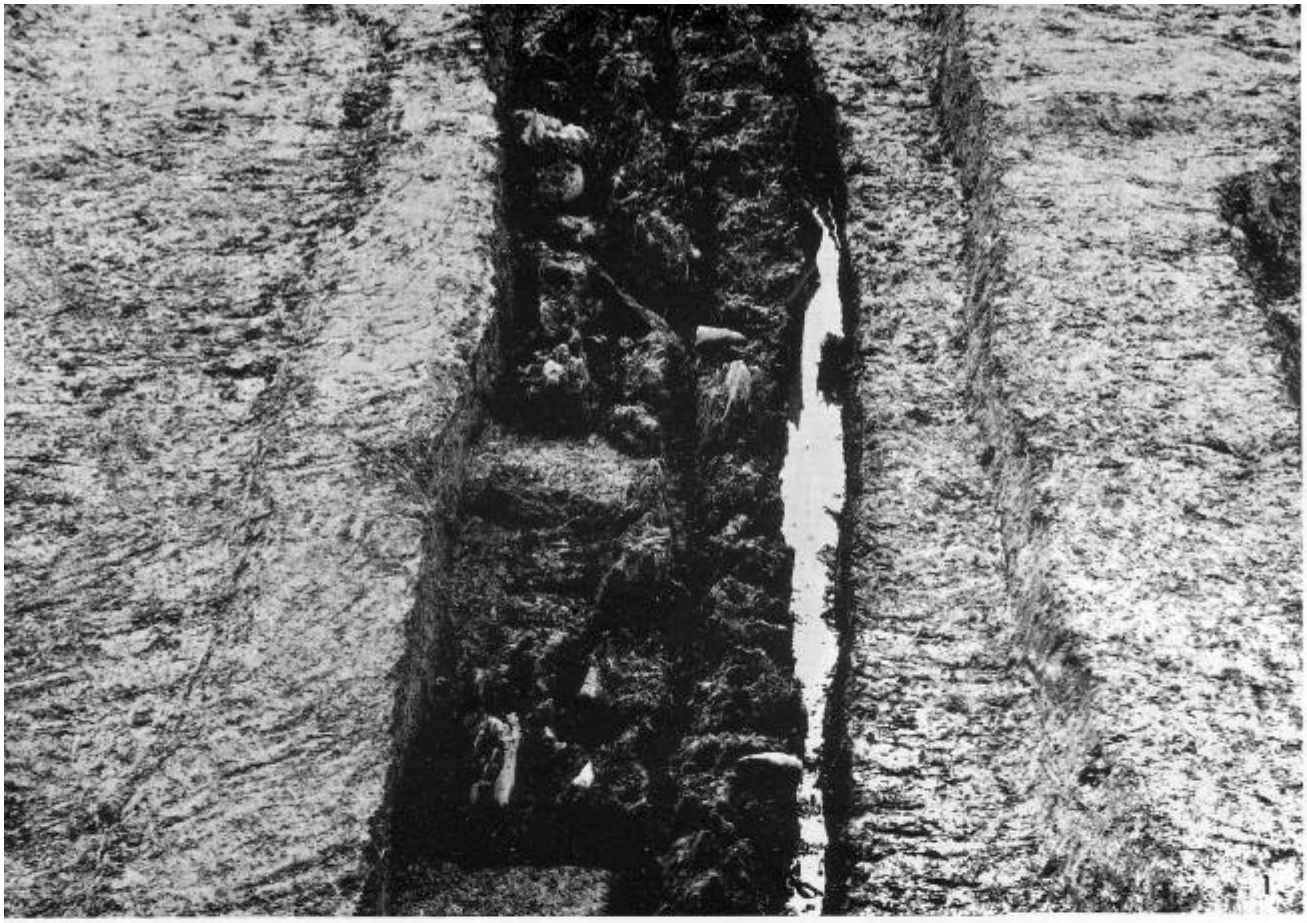
図版6　1　ＳＦ75積手の違い　断面　（北▶南）　　2　同　平面　（北▶南）

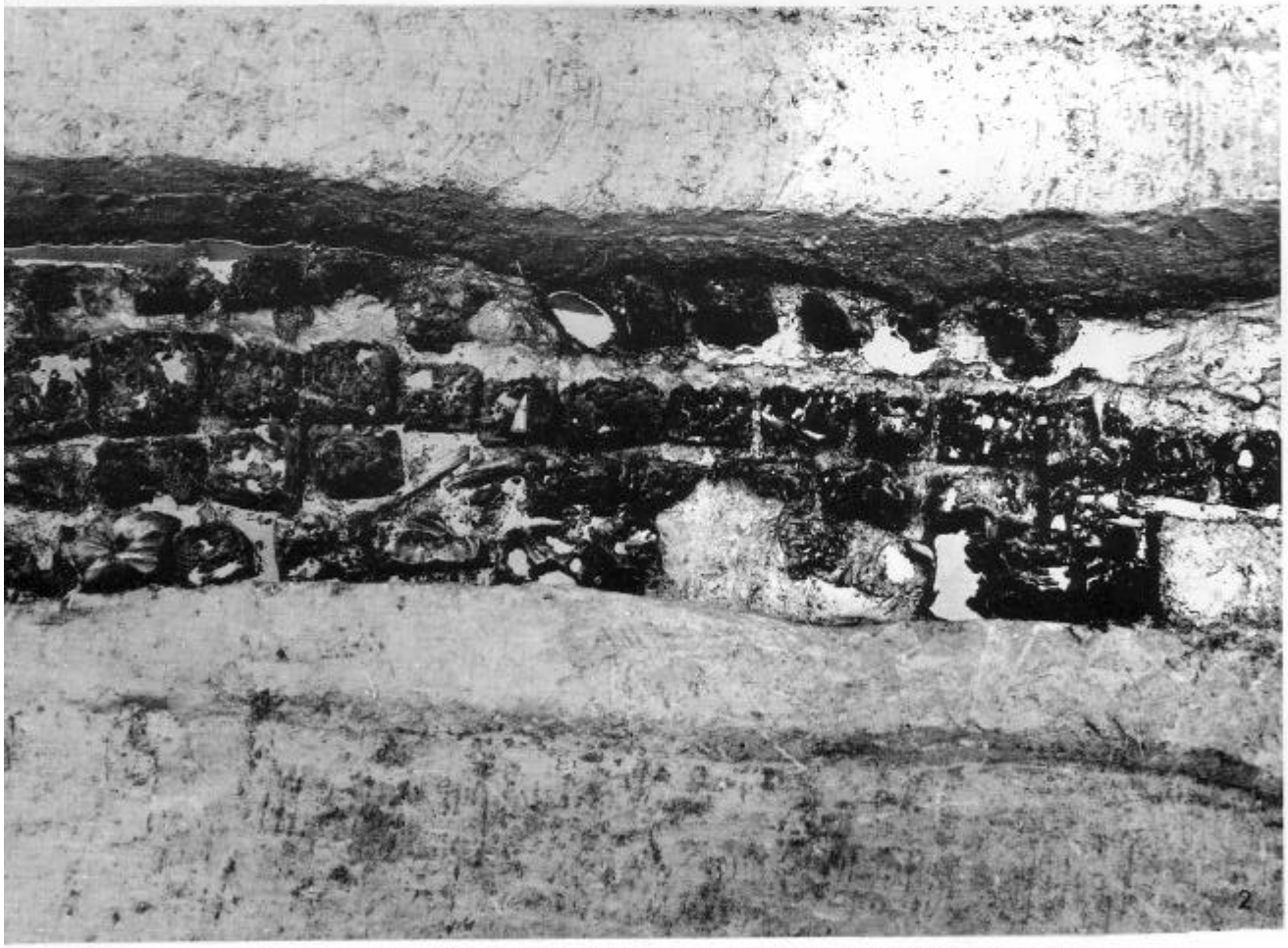
図版7　1　SD76・SD77溝状遺構　（西▶東）　　2　同　（東▶西）



図版8　1　SD77・76溝状遺構断面　（東▶西）　2　SD77溝状遺構柱痕跡　（調査区東端部）

図版9　ＳＡ83・ＳＡ82　角材列　（西▶東）

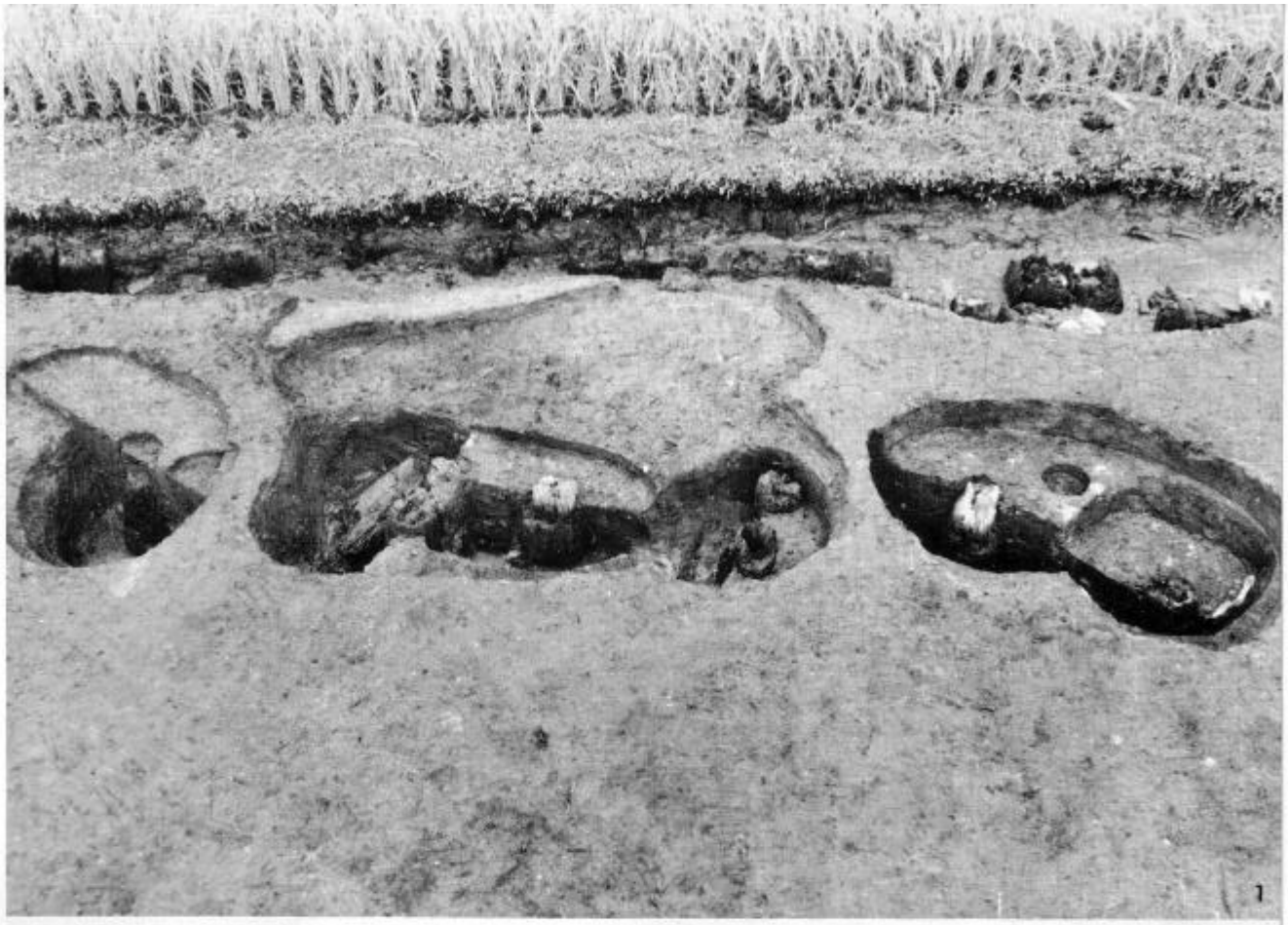




図版10　1　ＳＡ82Ａ・Ｂ・Ｃ　角材列　（東▶西）　　2　ＳＡ83，82　角材列　（南▶北）

図版11　1．2　SA82A　礎板状況（北▶南）

図版12　1　ＳＡ82Ａ　礎板状況　（東▶西）　　2　角材列横断面　（西▶東）

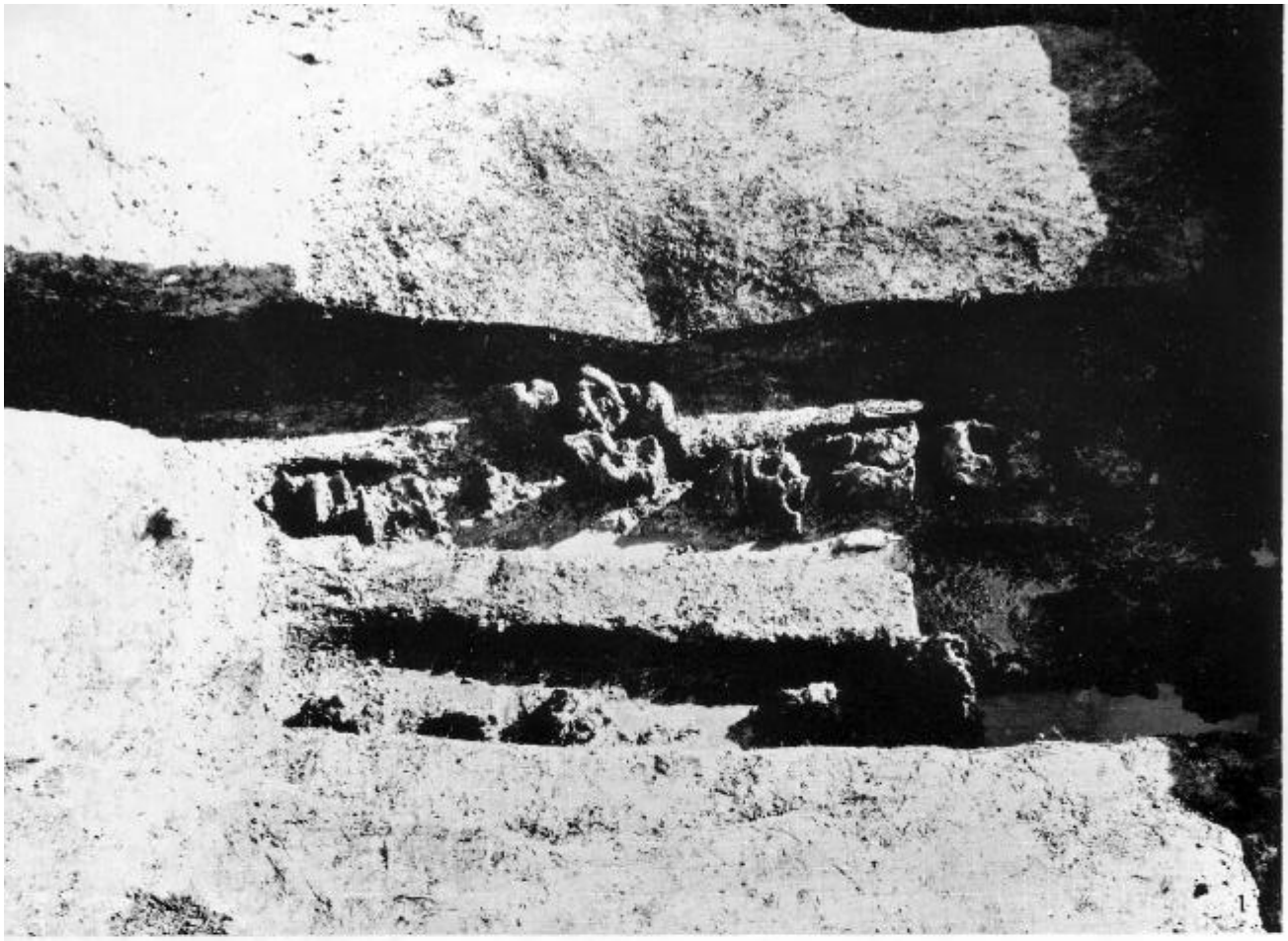


図版13　1　SB87A・B・C　(南▶北)

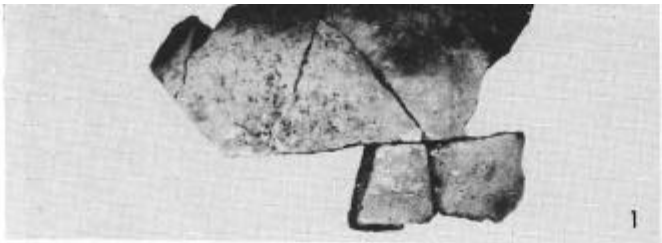
2　SB87B－2・C－2　(西▶東)　　3　SB87A－2　(南▶北)

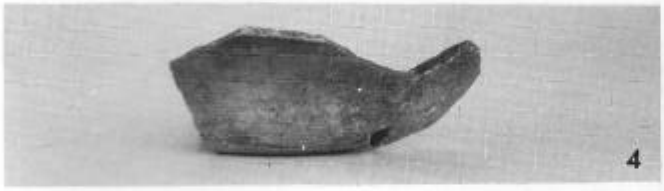
図版14　1　SB80・79，SA84・85（西▶東）　2　同（東▶西）

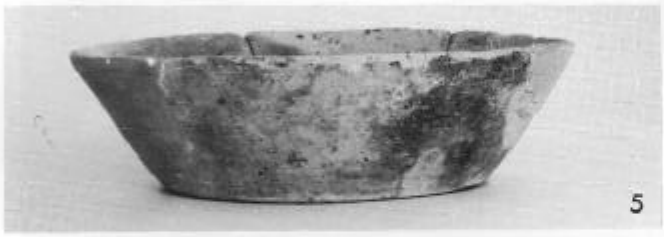
図版15　1　ＳＡ84―２，ＳＡ85―２掘り方断面（東▶西）　　2　ＳＦ75，ＳＡ83・82の接点（東▶西）

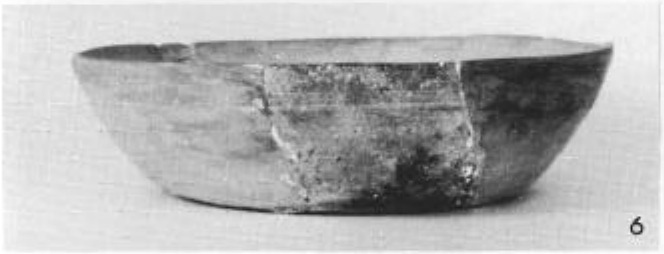


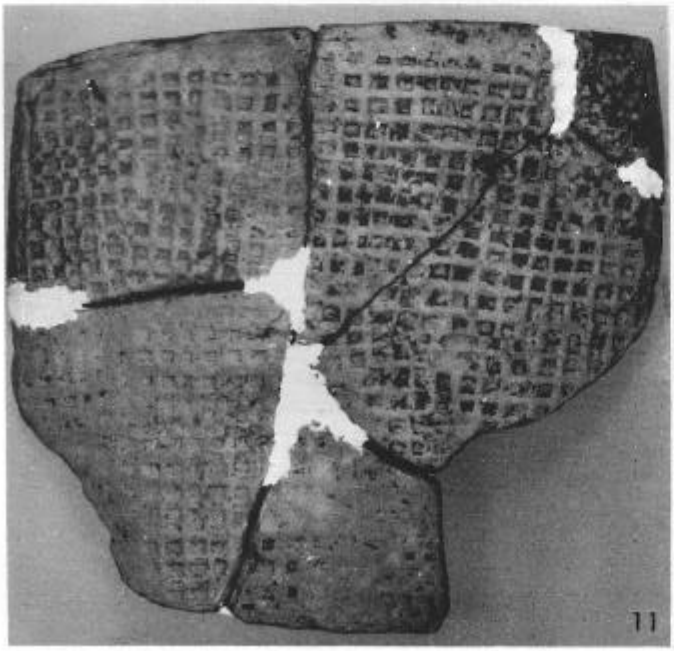
図版16　1　ＳＦ75，ＳＡ83・82の接点（北▶南）　　2　同（ＳＤ77内南壁．北▶南）

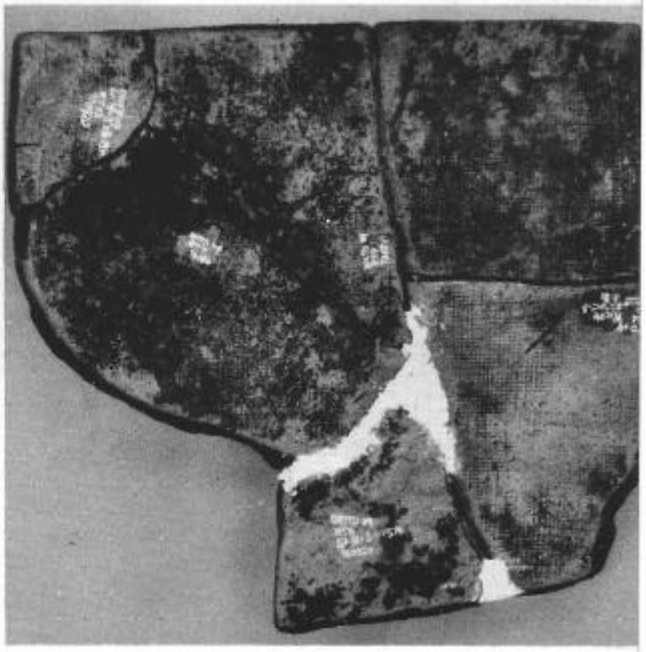




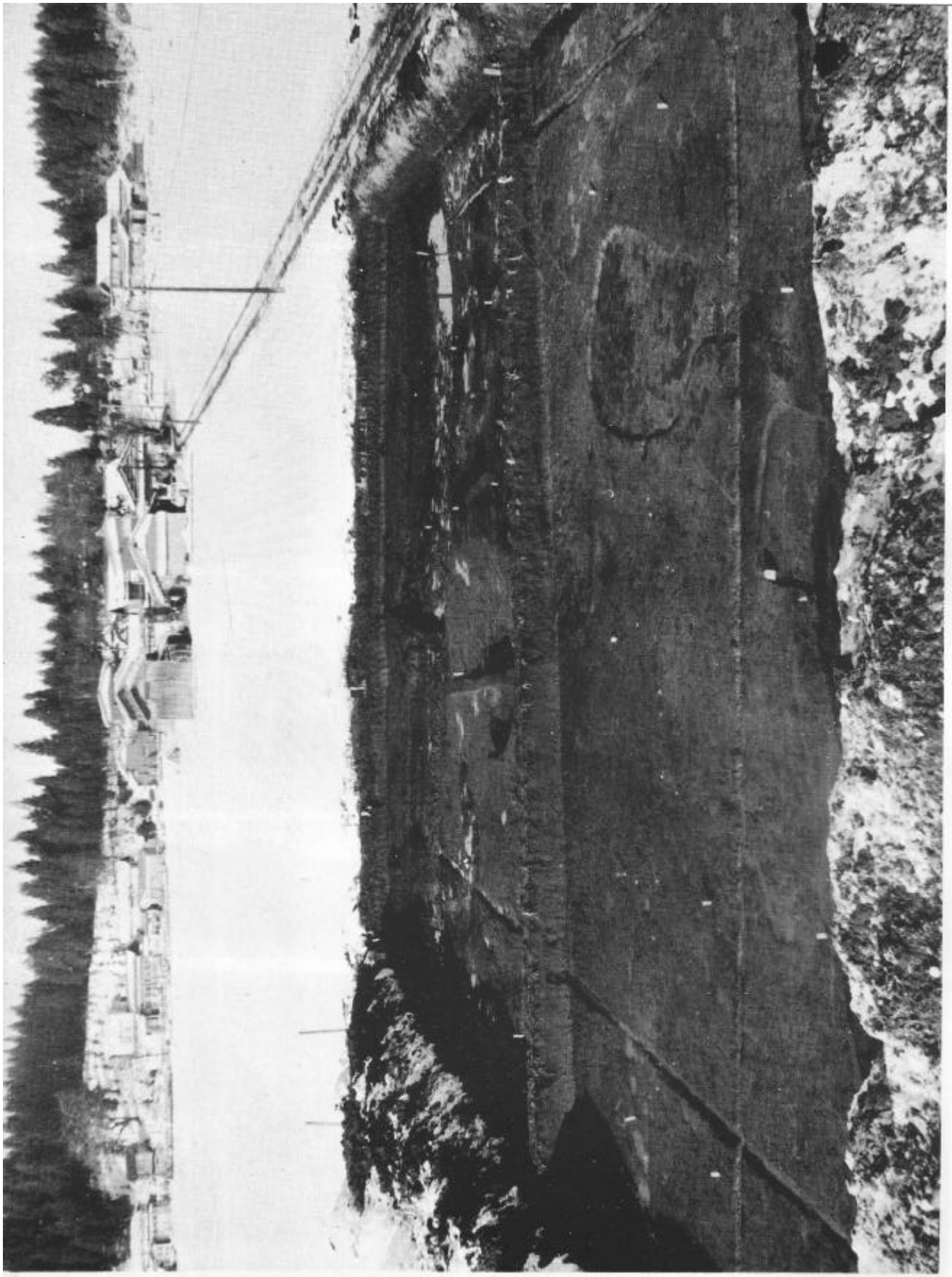




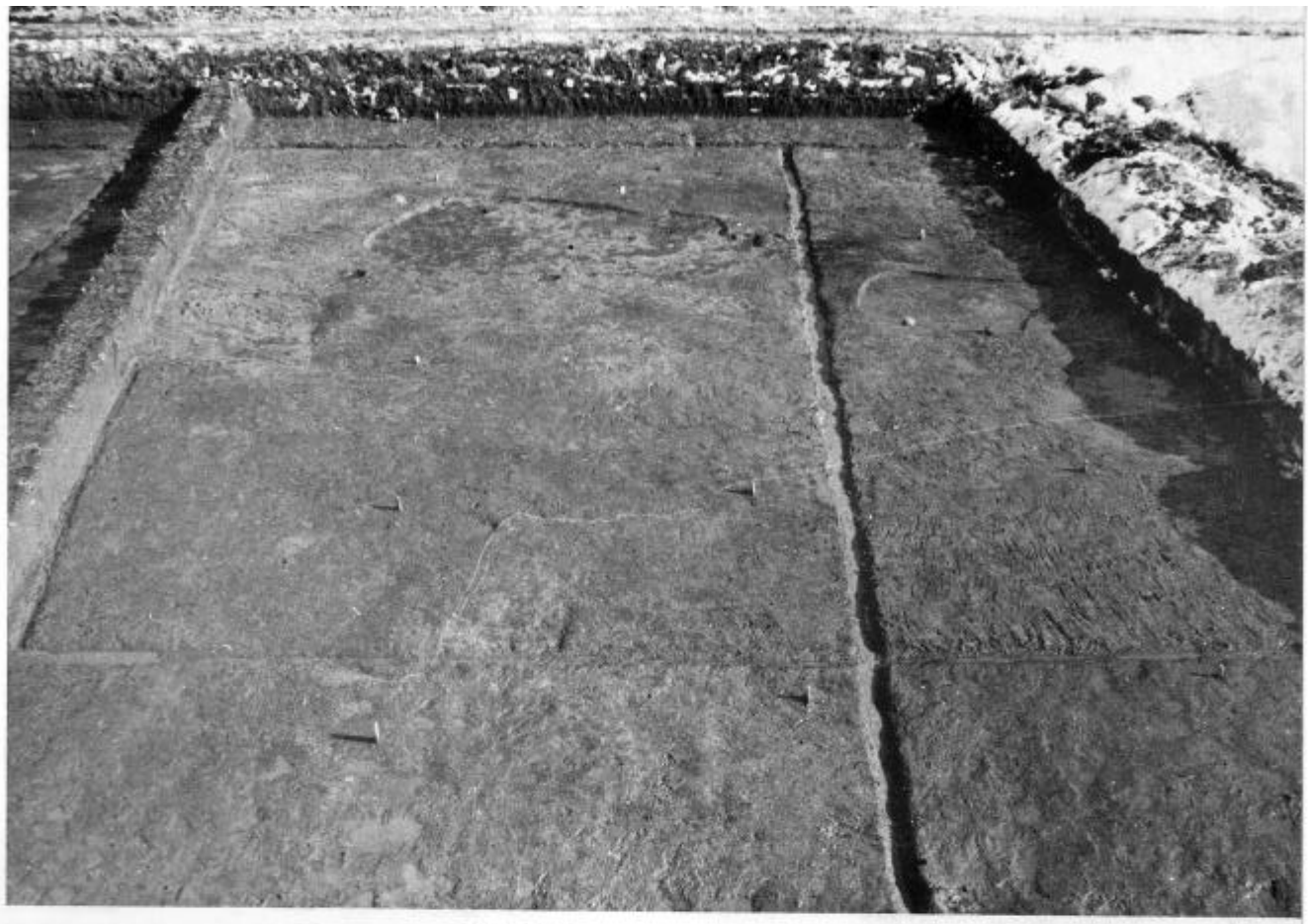


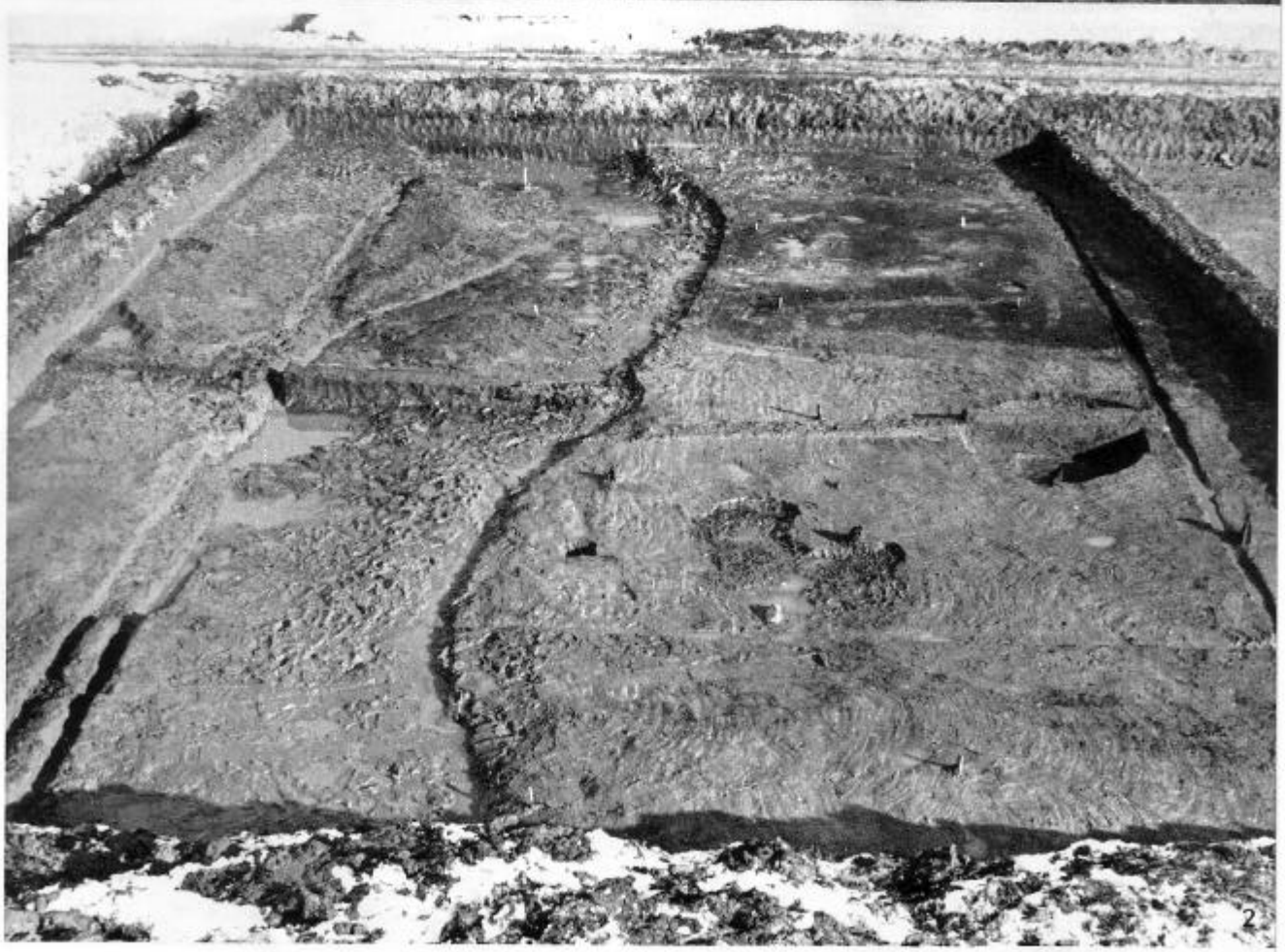


図版17　第９次発掘調査出土土器．瓦

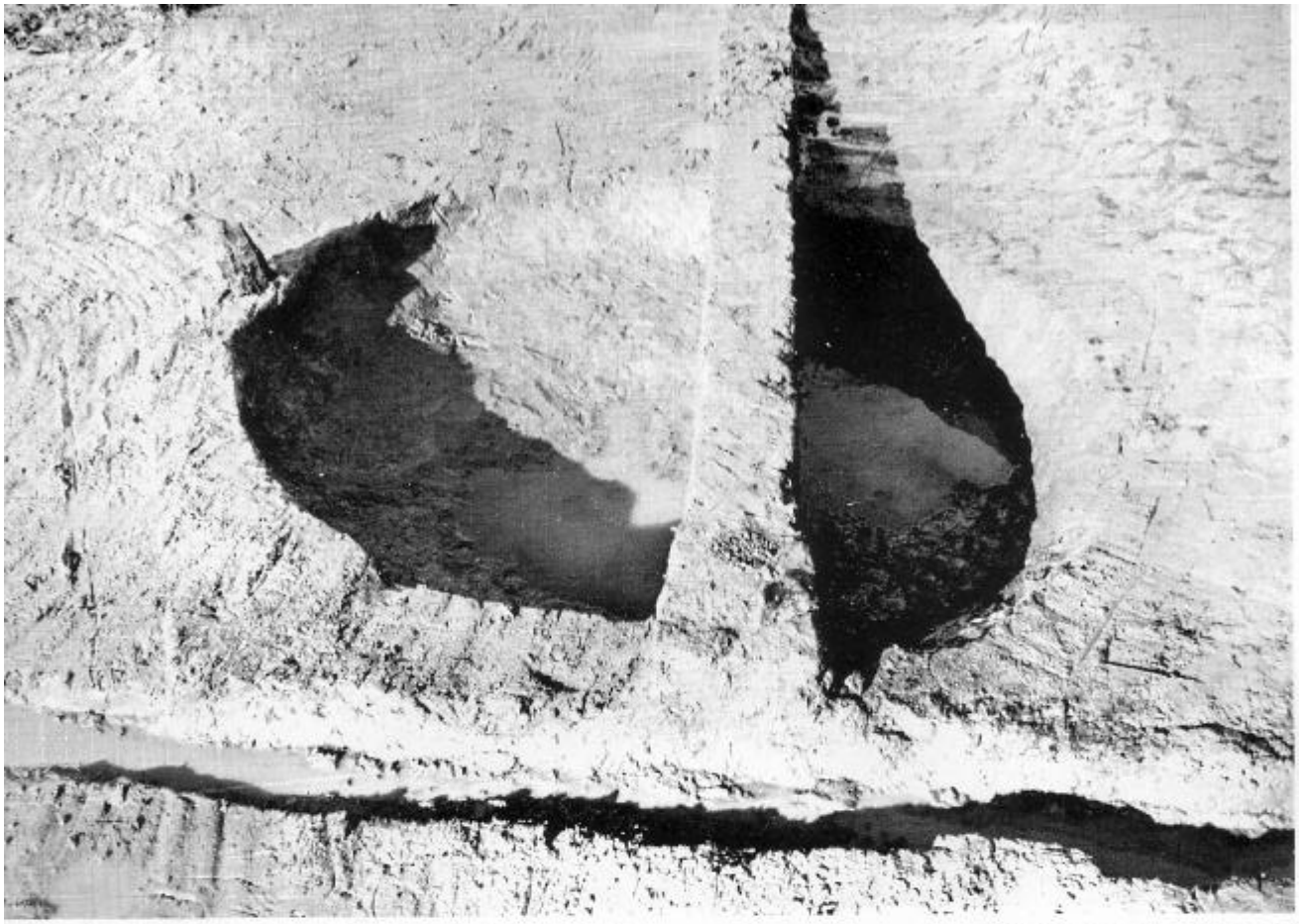


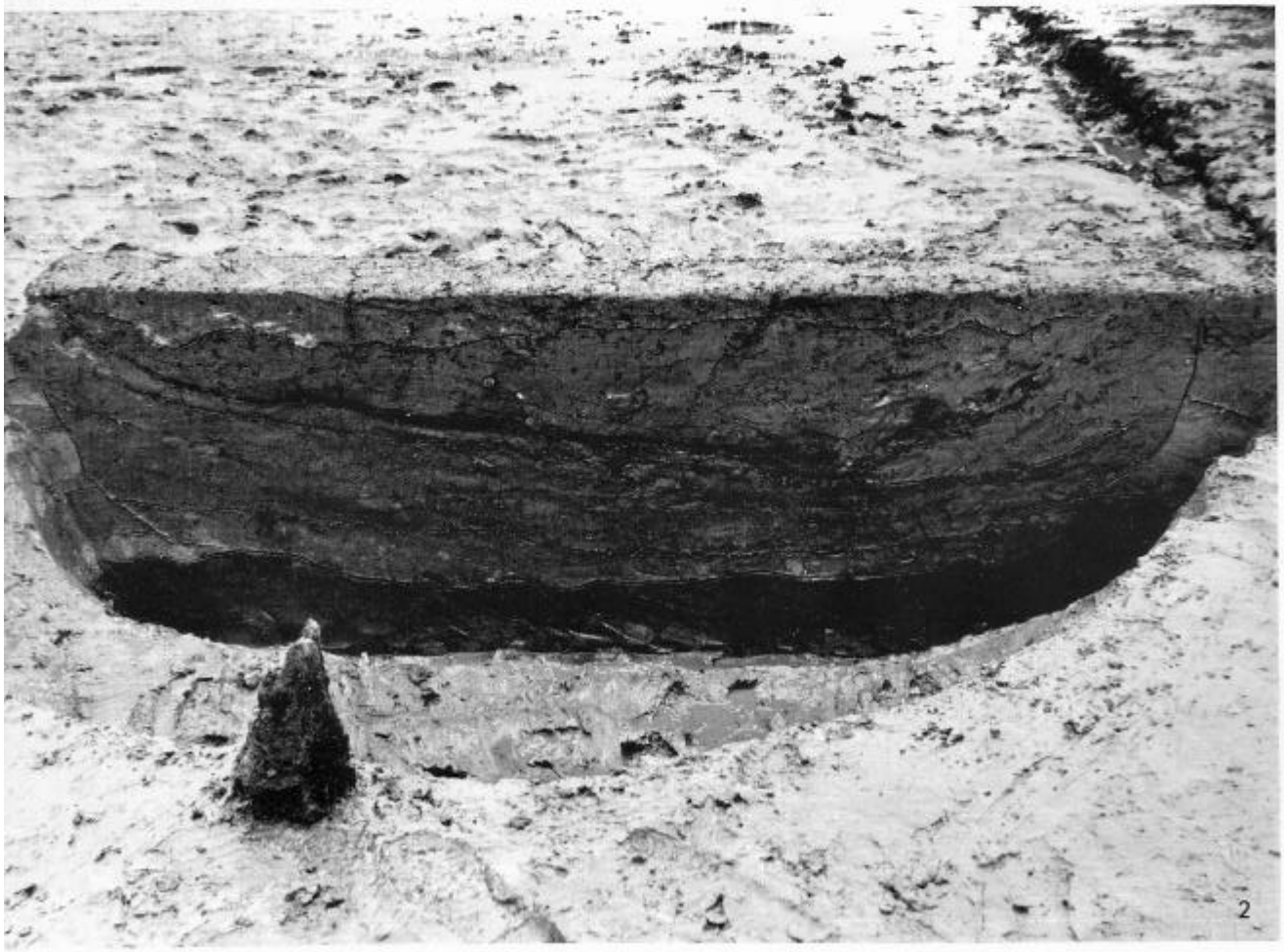
図版18　第10次発掘調査　全景　（南▶北）



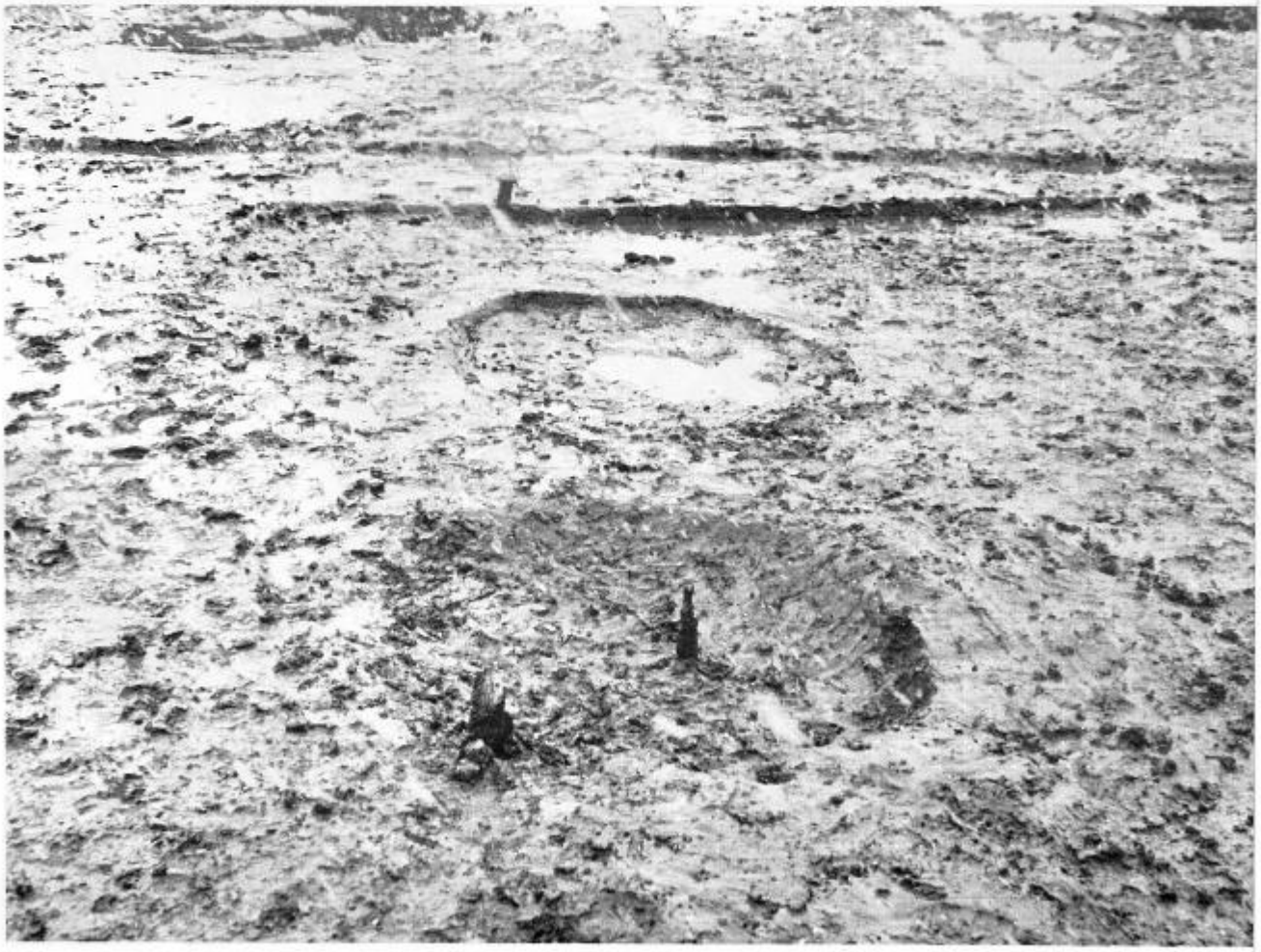


図版19　1　S×93，S×94　遠景　(西▶東)　　2　SK91，SL95　遠景　(西▶東)



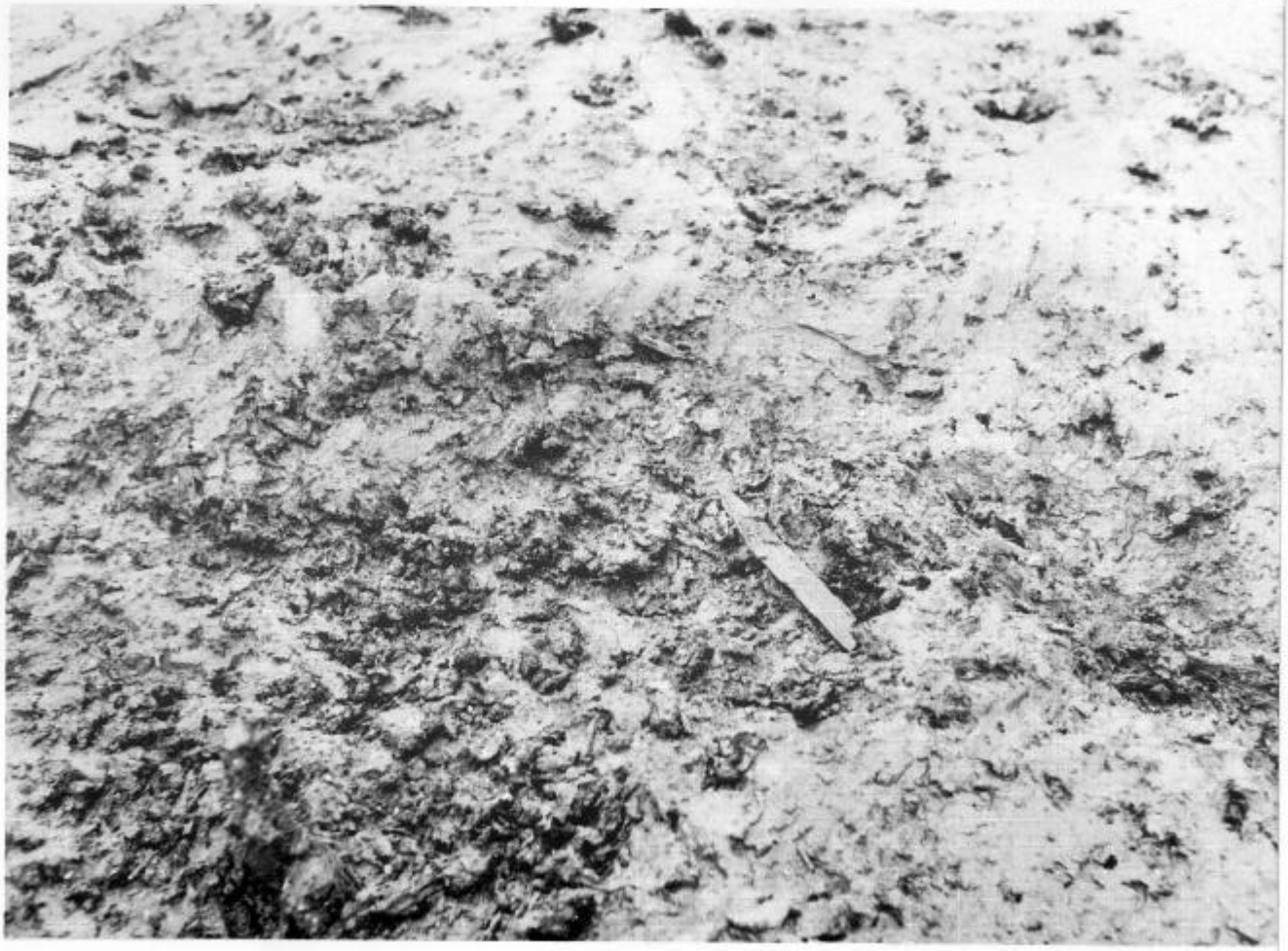


図版20　1　ＳＫ91　土坑　（南▶北）　　2　ＳＫ91　土坑断面　（西▶東）

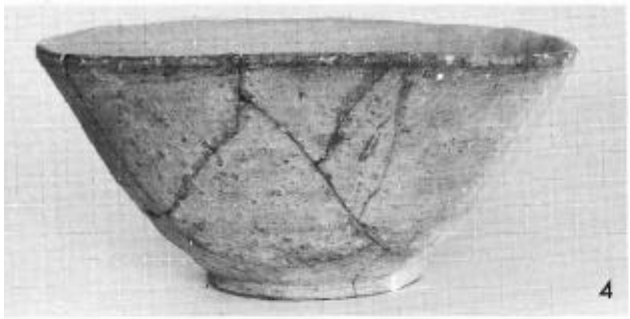


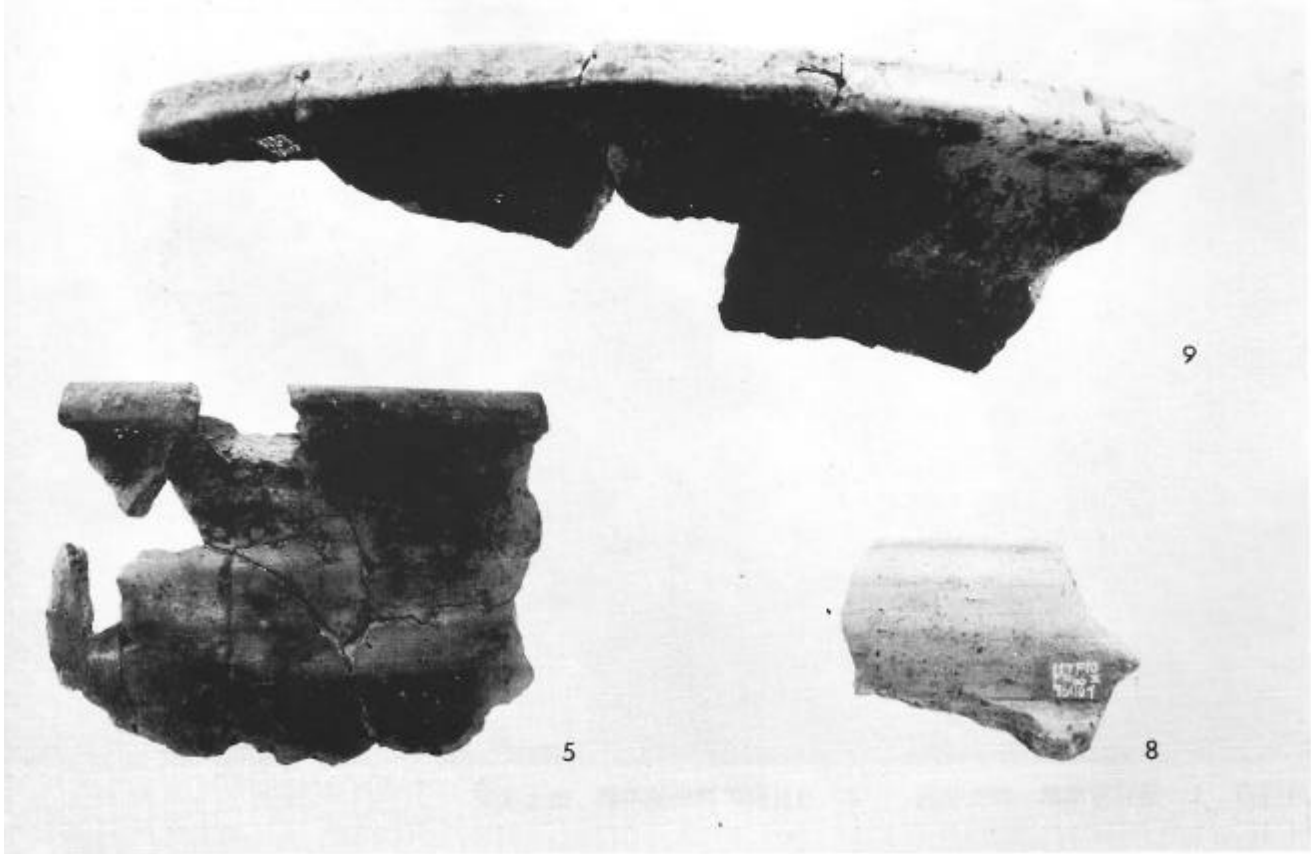
図版21　1　ＳＫ97，98　土坑　（西▶東）　　2　ＳＫ97，98　（北▶南）

図版22　1　花瓶　出土状況　　2　平瓦　出土状況

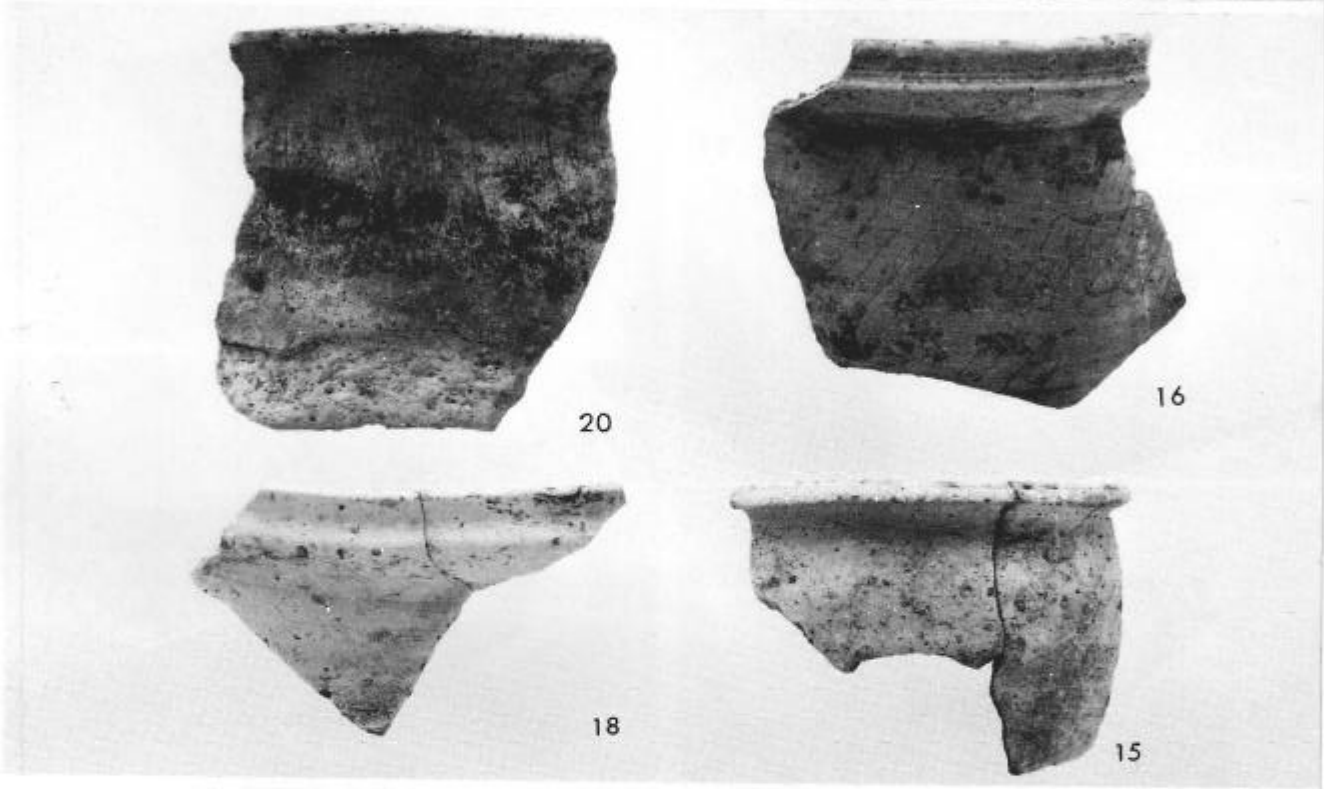


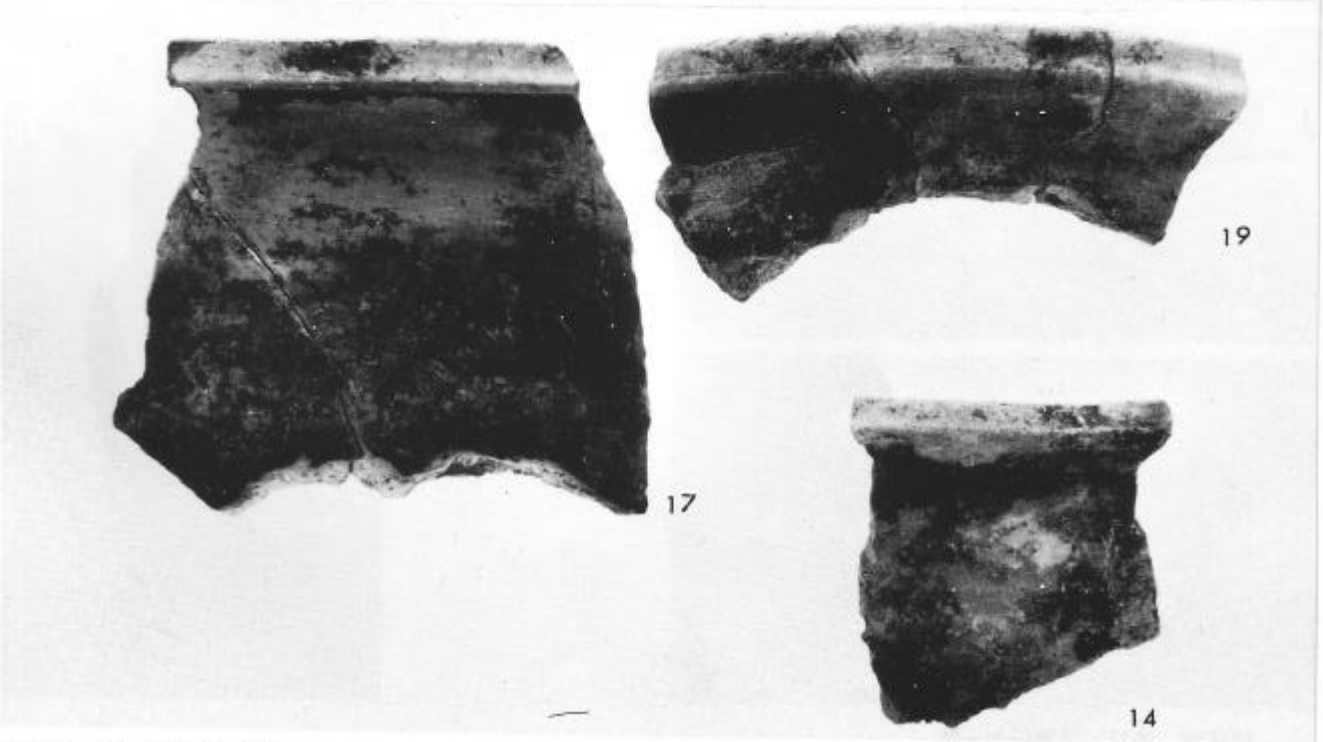
図版23　1　第12号木簡　出土状況　　2　ＳＫ98内第14号木簡　出土状況



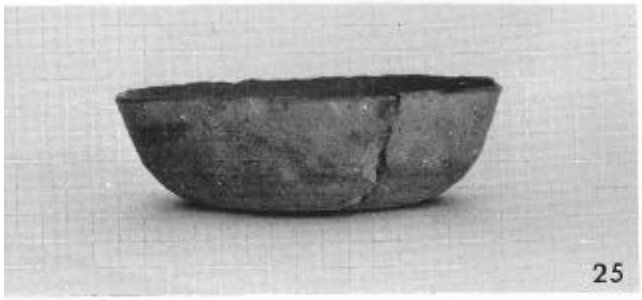


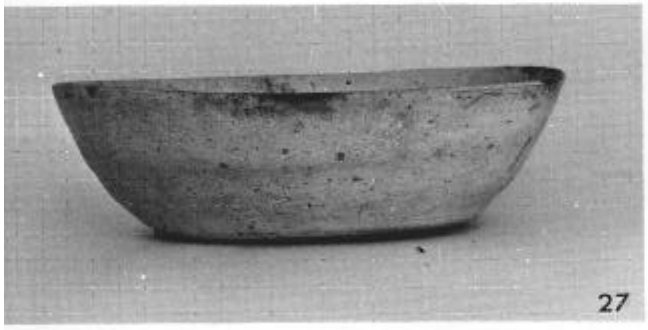
図版24　第Ⅱ層出土土器

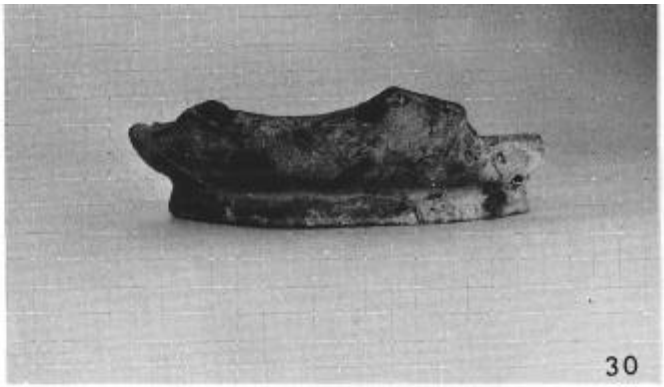




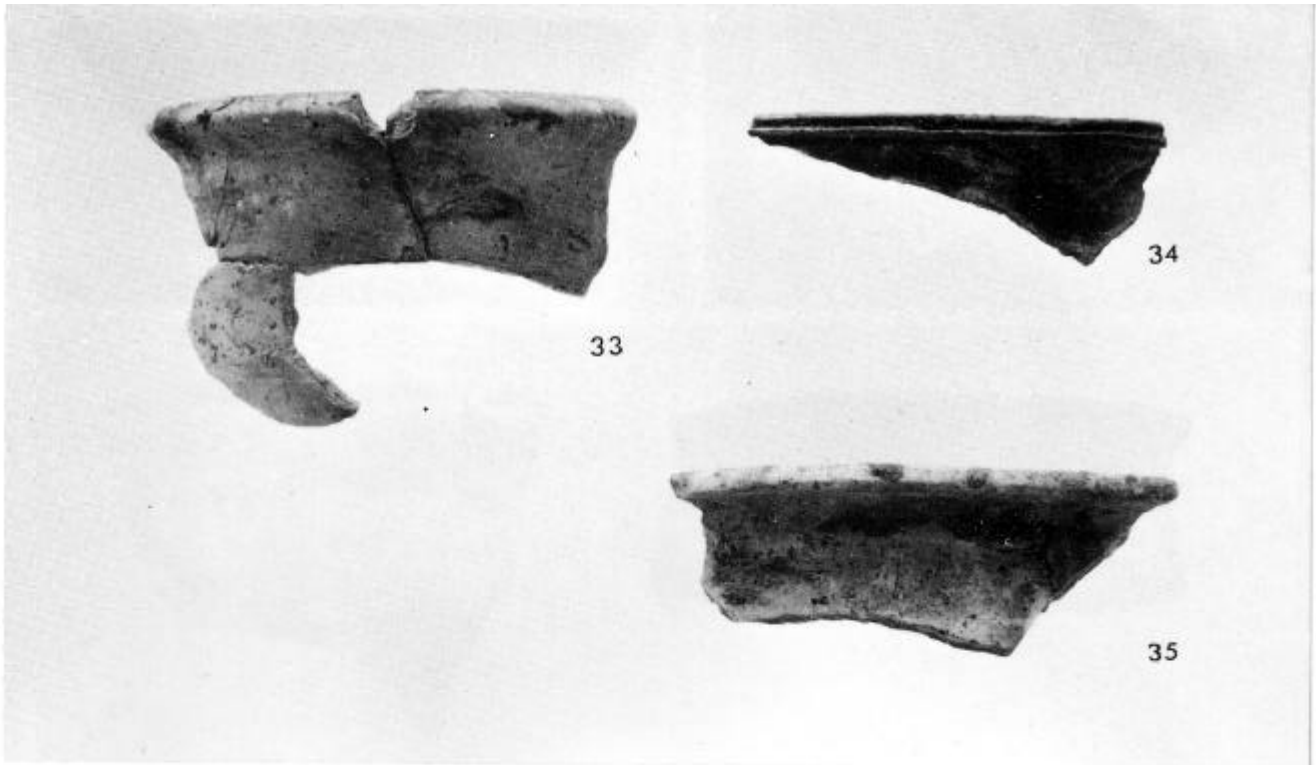
図版25　第Ⅱ′層出土土器

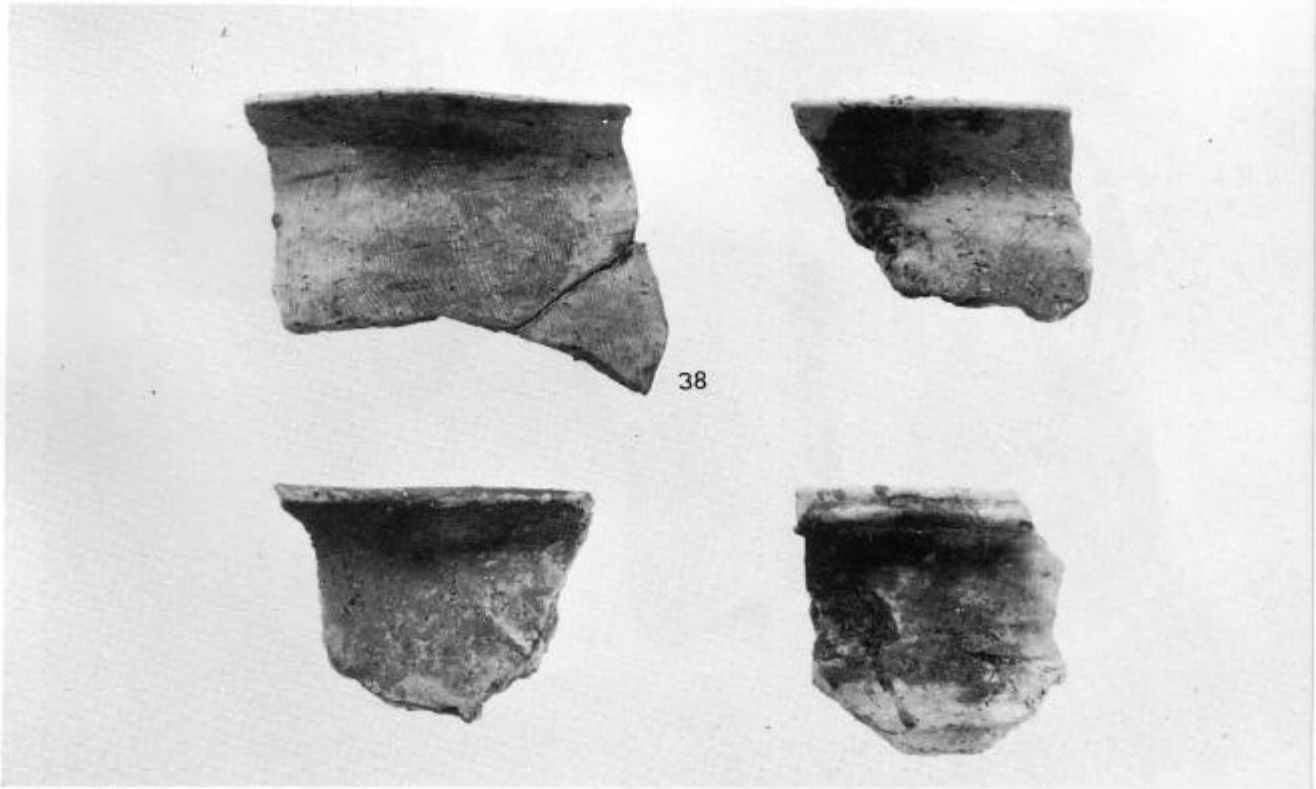




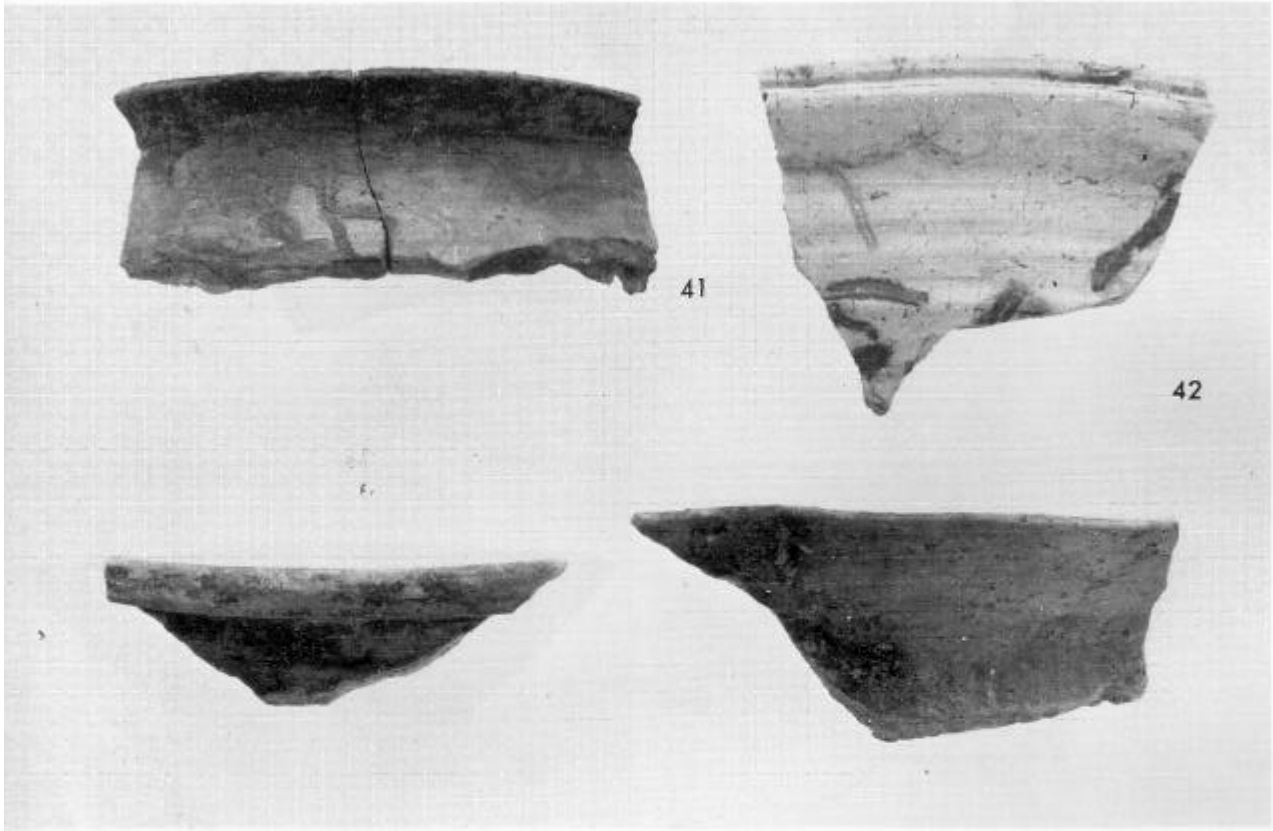


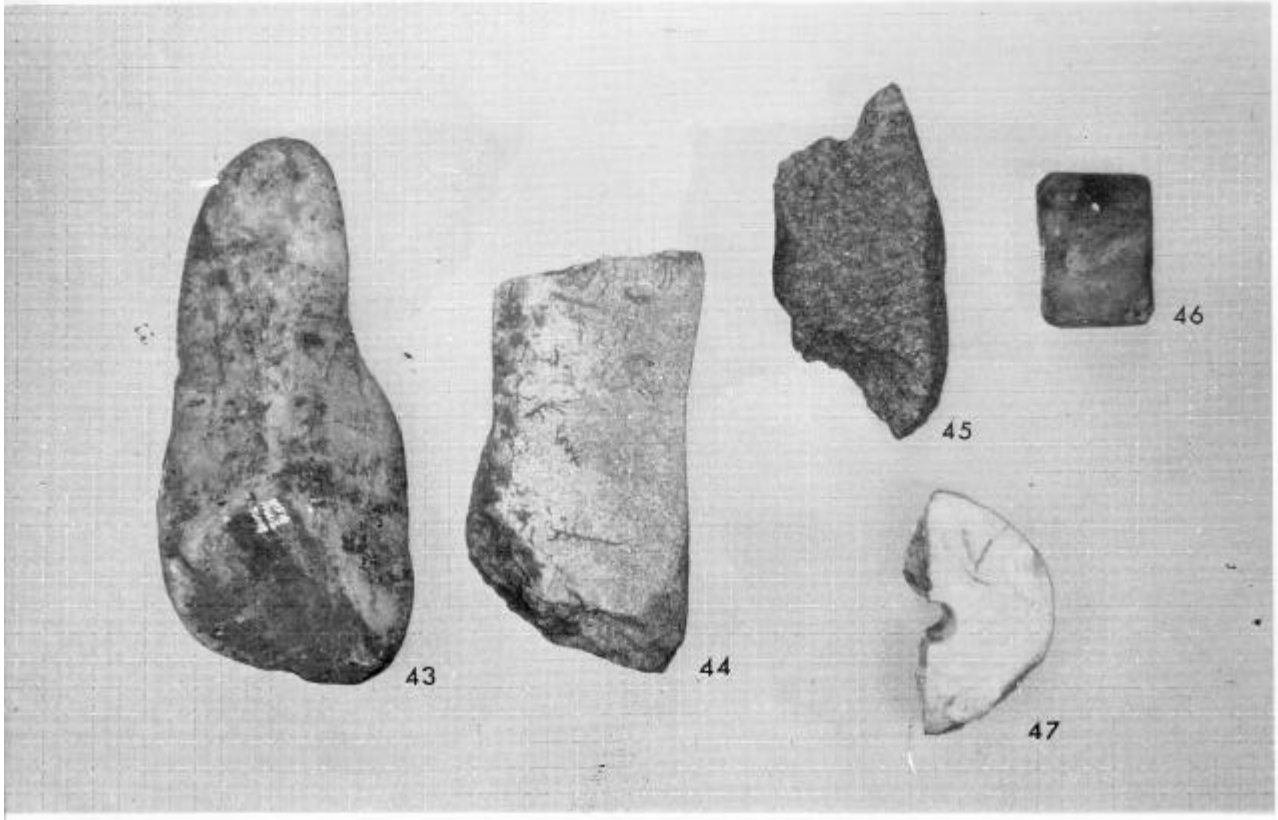
図版26　第Ⅲ・Ⅳ層出土土器



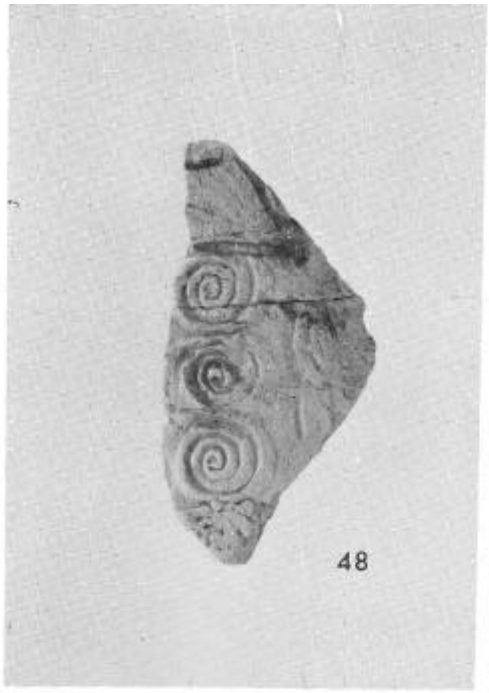


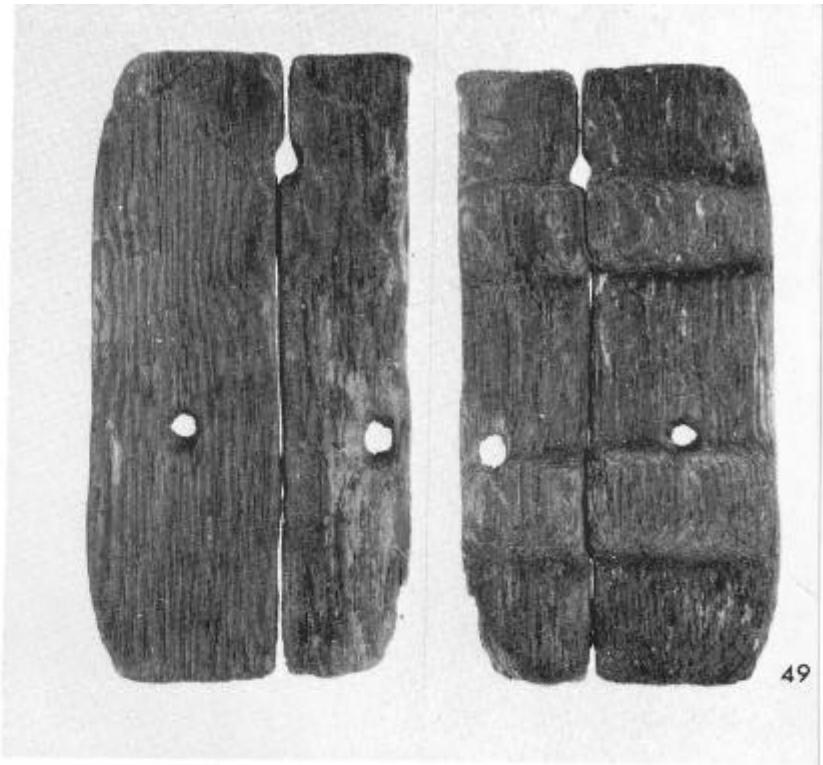
図版27　第Ⅳ層・ＳＸ90出土土器

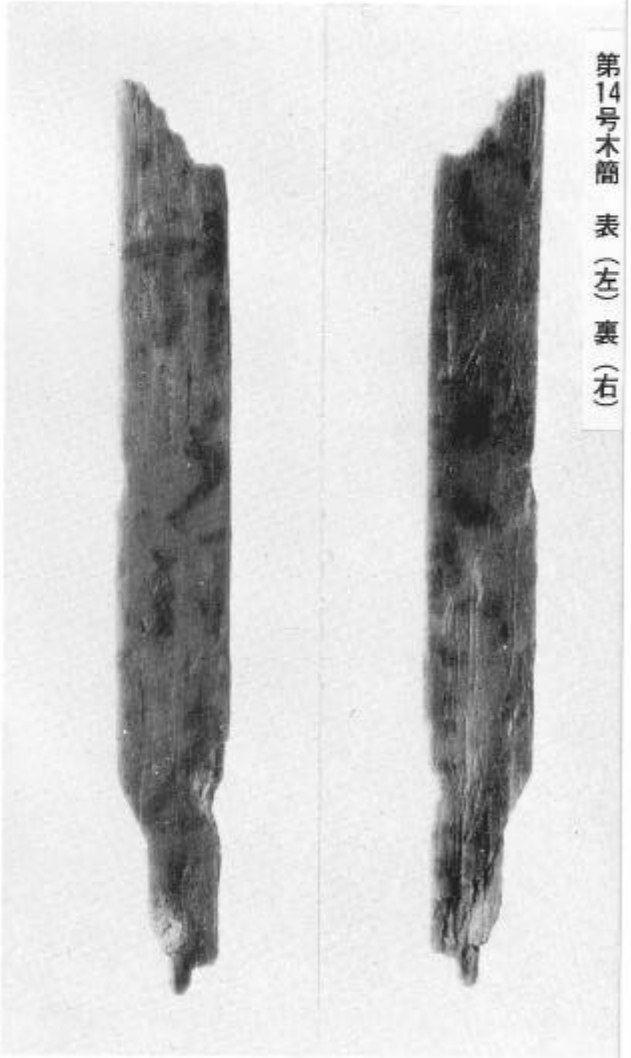




図版28　ＳＫ91出土土器・砥石・紡錘車







実　大

図版29　瓦・下駄・木簡

払田柵跡調査事務所要項

1 組織規定

秋田県教育委員会行政組織規則

第6条（地方機関の設置）

名　　称	位　　置
払田柵跡調査事務所	仙北郡仙北町

第7条　文化課の所掌事務は，次のとおりとする。

8　払田柵跡調査事務所に関すること。

第8条　第2項

払田柵跡調査事務所の所掌事務は，次のとおりとする。

1　史跡払田柵跡の発掘およびこれに伴う出土品の調査研究に関すること。

2 職　員

（昭和52年3月現在）

職	氏　名	備　考
所長	高橋　司	文化課長　兼務
主任学芸主事	門間光夫	文化課　兼務
学芸主事	中谷雅昭	文化課　兼務
学芸主事	富樫泰時	県立博物館兼務
学芸主事	船木義勝	
主事	畠山憲司	
主事	藤田　勉	文化課　兼務
嘱託	富樫利八	
調査補佐員	小玉　準	
調査員	小松昭雄	
整理補助員	千葉聖代	

3 顧　問

昭和51年度払田柵跡調査事務所の発掘・調査研究を適正に実施するため，顧問を委嘱した。

顧問　新野直吉（秋田大学教育学部教授　古代史学）

顧問　氏家和典（宮城県多賀城跡調査研究所長　考古学）